

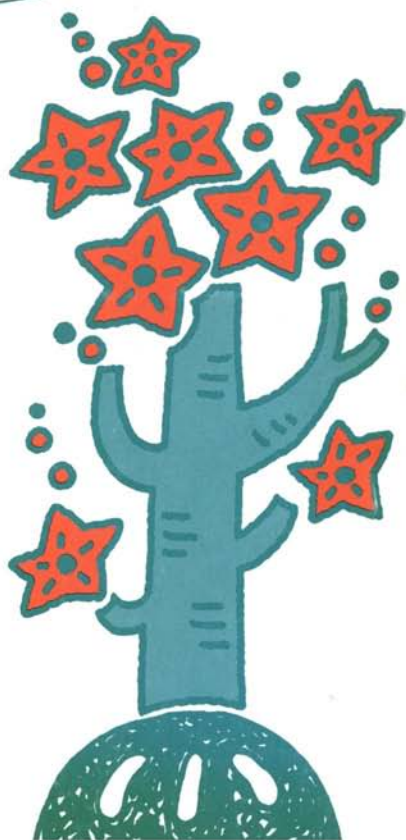
女の言いたい放題誌

わいふ NO.239.

逐次刊行物

平成4年12月 4 歳
国立婦人教育会館
国立教育情報センター

特集 早期教育やってみたらば
特別寄稿 在宅介護の行方
特別寄稿 ロンドンから



10代の性と愛の悩みを解決する決定版！

ティーンのかからだ・こころ・愛

上・下巻
(全2巻)

最新刊

シルビア・シュナイダー 文
ビルギット・リーガー 絵
北沢吉子／孝子・フォン・ツェルセン共訳
定価各1,600円(税込)
A5変型判

1990年にドイツで出版されるや、たちまちベストセラーになった10代の性の本。上巻には、からだの成長、月経、射精のイラスト入り解説はもちろん、親と上手につきあう法、初恋に破れたときの解決法などの心理面も。下巻には、妊娠、出産、中絶、性感染症やエイズの説明も詳しい。性の悩みもこの本ですっきりする。



アーニ出版

〒158 東京都世田谷区用賀3-5-6 TEL 03-3708-7321 FAX 03-3708-7325

あけび書房

東京都千代田区神田神保町2-12
☎03-3234-2571 振替東京6-40323

好評増刷！日本図書館協会選定図書
日本の福祉はこれでいいのか
赤ちゃんからお年寄りの福祉まで、全国各地のその実態を総解明し、福祉変革の道を提言する
2000円

代表編集委員 眞田 是
日本自治体労組総連合
全国社会福祉労働組合
総合社会福祉研究所
共同編集

挑戦 中野区福祉都市への

なぜ、どのようにして
中野区の福祉は
発展してきたのか？
老人保健福祉計画づくり、オン
ブズマン制度、地域福祉センタ
ー構想などを描く、待望の書！
四六判・資料多 1800円
執筆
一番ヶ瀬康子(日本女子大学)
大森 彌(東京大学)
田端 光美(日本女子大学)
谷口 政隆(日本女子大学)
二里木孝次郎(福祉インフマニ
中村 武(中野区助産)
大澤 準一(中野区福祉課)
山下 清超(同高齢福祉課)

福祉の最先端を創り出す中野区。その21世紀戦略を示す

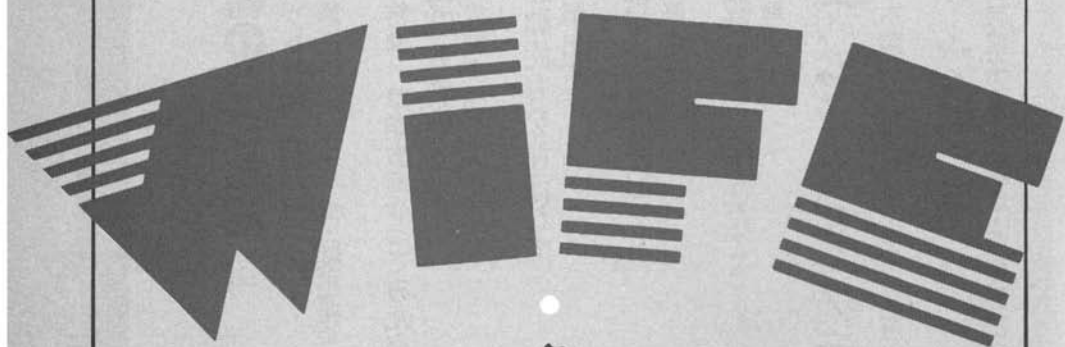


ある
福祉高級官僚
死への軌跡

ギャラクシー賞作品
遺書のドキュメント

1990年12月5日、環境庁次期事務次官候補が自ら命を絶った。厚生省入省以来30年、福祉・環境行政一筋に歩んできた高級官僚がおしつぶされていく「福祉切り捨て」の時代…

是枝裕和 著
四六判上製 1700円



●
あなたのフリースペースです。

4 私のこと場 ⑥

ニット創作・鯉淵道子

写真・佐々木恵子 文・鯉淵道子

●特集 早期教育やってみたらば

10 躁(?)教育のススメ

陣内貴美子

14 運動能力を伸ばして

花岡由美子

17 誰がための習いごと

大野幸子

21 難聴児から学んだこと

百野亜子

24 エッセイスト・クラブ

悠木翔子・松浦啓子・田中文恵

29 サブレシーブ

安村豊子・重住麻悠・斎藤野母子

32 ロンドンから 長野英子

37 ズバリ一言

大川原みち子・川村君子・浦野美智子

40 ある退職 西村 治

45 奥さんから外さんへ

田沼千恵・平塚幸子・板山美枝子
後藤幸子・山本もと子

53 嫁の生きがい 岡井美代子

★連載★

56 わが青春の宝塚 豊城智子

62 あるピアノ教師① 塚本真理

68 女の時事放談 ①

これからの老後

岩田佳子・大川原みち子
岡野睦子・花岡由美子

76 在宅介護の行方 佐藤乃麻

82 人間マンダラ

石井しのぶ

84 アダルトチャイルドたちへ

広野英理子

93 平成おつたまげーシモン 西田淑子

連載10

94 私の愛する外国人 新井ひふみ

103 ワンポイント情報

私のコンパニオン・アニマル

嶋田たい子・須賀まり子・万江初美
安村豊子・加藤洋子・関 米子・清水宏子

108 コミック●痛快ノ一般人 ⑫ 栗田笑

112 読んでみました

鈴木由美子・刀祢啓子
岡田美幸・中西景子

116 ブック情報

118 フリースペース

島津まさ子・織田裕子・中松ミナ子
北 恵美子・村上恵子・匿名

連載小説最終回

128 契約結婚 山影冬彦

134 情報コーナー

135 わいわいがやがや

田中慶子・村田玲子・千田百合子
家守恭子・福地園子

次号投稿募集 141 投稿規定 142 編集だより 144

バックナンバー 13 各地で文章講座を 30
自費出版は「わいふ」へどうぞ 44 お友達に「わいふ」を 126

私のしごと場

6

ニッポ制作

鯉淵道子

東京都葛飾区



写真・佐々木恵子 文・鯉淵道子

本書にプレゼントしたクッション。

小さいころから手先の仕事が好きでした。娘時代、手芸好きだった叔母の編機を借りて自分のセーターを編んでから、機械編みに興味を持ち始めました。一本の糸でさまざまな模様を編み出し、一目一目の集合で形を作る面白さ……。反面、素材の性質や編み方による誤算との格闘で、飽きもせず三十数年もの間、編機に向かっています。

苦労が多いだけに、イメージしたものに近い作品が、出来上がったときの嬉しさは格別です。一九六五年から二十五年間、自宅に教室を開き、七百名近い人に手ほどきをしてまいりました。現在は、定期的に開く予定の、個展の作品づくりをしています。一九九一年九月、銀座の画廊で初めての個展を開きました。



▲一番人気のあった作品。

▼38年ぶりに郷里の同級生が来てくれたりして大感激。



▲いつも編んだものはかり着ています。

六年前から、出身地であるつくば市の手代木公民館で、月に一回、「機械編み講座」の講師をしています。(写真撮影は、受講生の渡辺くにさん)



▲公民館の授業風景。中年以上の人々がほとんどです。手編みも教えます。

▼市の文化祭には、毎年受講生の作品を出品する。



◀昼休みには、お弁当のおかずを分けあつたりして料理談議に花が咲く。



▲公民館前で、つくば市教育委員会社会教育課の東郷公夫氏と。



私の父はニューギニアのアドミラルティ諸島の中のロスネグロス島で戦死しています。"わいふ"に投稿したニューギニア旅行記「父はねおる南の島に」は、一八九、一九〇号に連載されました。

その他、新聞への投書、同人誌の文章など、私が書いたものは、ほとんど父に関するものでした。その中で、遺族会の会報に載つた「父と私」というエッセイがきっかけとなつて大阪読売の取材を受け、同紙に長期連載の「戦争」の中に父のことが取り上げられました。



▲1983年、父の眠る
ロスネグロス島へ一人旅。



▼「戦争」の中の「アドミラルティ諸島」シリーズを担当して下さった読売新聞大阪本社編集委員の田村洋三氏と。同社主催の第16回「戦争展」にて。



▲31歳で戦争末亡人となった田も、もう79歳。つくば市の実家の庭で。



自己表現と人間関係が楽になるセミナー



荒川 旬美
心理学博士

- ◎もっと夫と自由に話がしたい
- ◎子どもの気持ちを理解したい
- ◎友達をつくりたい
- ◎隣、近所のつきあいを楽にしたい
- ◎その他の人間関係をもっと楽しく豊かにしたい

【日 時】毎月1回10:30~16:30(連続6回)

このセミナーは「絵」「音楽」「身体の動き」などを使って
体験的に楽しくトレーニングしていきます。

詳しくは下記まで……



東京ヒューマニクス研究所

☎03-3492-2838 〒141 東京都品川区西五反田2-31-11
五反田永谷タウンプラザ904号

ひがしやま
東山書房

〒104 東京都中央区新川2-2-11708
〒165 京都市右京区山ノ内大町5-3

☎03(3553)8358
☎075(841)9278



河野美代子 著

(広島・産婦人科医)

・89エイボン受賞
女性教育賞受賞

ティーンズボディQ&A

★好評8刷！

ベテラン婦人科医が、他人には相談しずらい「体」や「性」の悩みに誠実に答えます。
ティーンはもちろん、父母・教師にも好評。
性器/月経/避妊/人工中絶/重宝ぶたの手術
/毛深い/他★四六判/出費★1300円(税込)

渥美雅子 著

子どもは告発する

●稚子の事件簿から ★好評2刷！

いじめ、体罰、家庭内暴力、
リンチ、殺人、生命と宗教、
女教師駆け落ち、チビッコ殺人、
丸刈り訴訟、自殺……



●弁護士としてかわった数々の事件から浮かびあがる真実は？。
2男の母としての子を想う熱い視線が、学校、管理社会を告発する！
★四六判/出費★1650円(税込)



“人間と性”を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality
[ヒューマン・セクシュアリティ]

●編集長★村瀬幸浩●
●企画編集★“人間と性”教育研究協議会
●季刊/BS判・128頁●定価1400円(税込)

9号(新刊)《特集》性愛から切り離された生殖

【編集長対談】ゲスト 長沖暁子
(慶応大学助手・フィンレーズの会)
【特集論文】不妊治療(生殖技術)をめぐる倫理と倫理
松嶋あづみ(お茶の水女子大学大学院生)
●特集ルポ「不妊治療」と「生殖技術」を考える…三井富美代・早野いづみ(フリーライター)
●時の話題に迫る「AVと人権」をめくって—「レイプビデオ」急増の中で—杉野未矢
★新連載 コミックで読む錯綜する愛と性—藤本由香里 現代人の性と生—カウンセリングの窓口から—奈良林祥 エイズと日本—アメリカから何を学ぶか—池上千壽子 府中青年の家・同性愛者差別事件/裁判傍聴記—小宮真保
★その他 実践/海外レポートコラム等誌面充実。

8号 性情報・性文化の現状と「表現の自由」と
7号 新教科書がもたらすもの
6号 シルバーエイジの豊かな性と生
5号 ビル解禁を控え、いま避妊を問い直す
4号 エイズの現在と近未来

●直送定期購読者受付中●郵振 京都4-1067番
1年 5,600円 2年 11,200円(送料・税込込みです)

●
特集

早期教育やってみたらば





躁(?)教育の ススメ

東京都世田谷区
陣内貴美子

【五教科七科目を目指す】

娘はまだ四歳。早期教育の結論なんて、まだまだ。私が娘にしてきたことも、早期教育と呼べるかどうか……。

まず出会いは、娘が十カ月のころ。井深大氏の「幼稚園では遅すぎる」「0歳」その他一連の著作。目からウロコというより、「ウッソー!?ほんとうに!」という感じでした。0歳の赤ちゃんに漢字や平仮名、数が理解できるなんてにわかには信じられないでしょ? ところがどんなに好き勝手にしてもいい、かっこうの実験台が目の前にここにこと笑っている。

これはもうやってみるしかないとい色々五教科七科目について策を練るわけですよ。国語・算数・理科・社会・英語・音楽・美術。どうせいずれは遭遇し、苦しまれるこれらの学問に少しでも早くから触れておくことは、有利にこそなれ、決して害はないのではないか。もちろん、やり方によっては勉強嫌いになりかねないので注意が必要、

などなどと色んな本を読みあさるところから始まりました。

ドーマン博士の「子供の知能は限りなく」、三好氏の「子には魚を与えるな、つり方を教えよ」(これは知育偏重になりがちの方必読)、そして具体的指針となる三石由紀子氏の「天才児をつくる」「数学の天才児ができた」などなど。

私がここできいかん早期教育の面白さについて語ろうとしても無理。これらの本を一読してくださればきっとあなたもはまってしまはずです。0歳から三歳くらいまでの単調な育児への大きな刺激となること請け合いです。

ところがこれから私のケースを述べるとお分かりいただけると思いますが、そうそう簡単にはいかないのです。やってみてごらんない。これが続かないのです。何といっても母親の努力と根気のための作業なのです。

〔漢字〕

前述のように、娘が十カ月のとき洗礼(?)を受けた私は、トランプ大のカードをつくり、好きな漢字を書いて

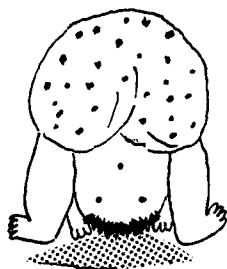
娘に何度も読み上げ、次に二枚並べて読み上げたほうのカードを取らせたのです。何も分からないはずの娘は、十回に八回正解でした。これを喜ぶ私を主人も両親も白い目で見て異口同音、「まぐれだ。そんなことをして何になる。心と体をしっかりさせればよいのだ」私も周囲の反対を押し切るほどの確信が持てず、娘が一歳半になるまでやめていました。

それでも通信教育や幼児教室に触れるたび、思い出したように公文の大判漢字カードをやっていました。すると二歳のころ二十くらいのカードをいきなり読み始め、三歳ではどんどん増えて四歳の誕生日には「漢字書けるよ」と「馬」「犬」「猫」と書いたのです。時々やってもこれです。当用漢字へ広げていったら、何と一人で大人の本が読めるじゃないですか。ところが結局、母の怠慢でやめました。

〔平仮名〕

これについては0歳から絵本の読み聞かせをしていたにもかかわらず「の」

が読めるのに一歳まで待ちました。今思えばゆっくりはつきり一字ずつ押さえながら読むべきだったかも。いつ読めるようになったか覚えていませんが、自分の名だけは二歳前から書いていたようです。四歳過ぎてやっと自分で日記が書けるようになり、字の大きさもそろってきましたが、二、三週間日記を見てあげないとまたすぐ書けなくなる、の繰り返しでした。



〔数〕

一歳までは、ぶどうの数を数えながら食べるとか、洗濯物をパパの分ママの分というふうに仲間分けさせるとか、色や形を教えたり、大小と多少の違いに関する絵本を読むなど。二歳になっ

て三石氏の本から「ドルトンのでんと虫カード」や「数字の棒」などをつくると、娘は喜ぶが親は疲れるという状況で、折角の教材を有効に利用しているとは言いがたかったです。文系の私は数学の楽しさやセンスを娘に教えてあげられないと困ると思い、ドーマン博士の「ドッツカード」(直径二センチくらいの丸が一から百まで百枚のカードに無作為に書いてあるカード)を三歳半から見せましたが時すでに遅く、これはまったくダメ。丸一つ書いてあるカードを見せて、「いち」と読みながら次々にカードをめくっていく方法なのですが、おふろの中ですでにそらで三十や五十まで暗唱していた娘は、カードを見ずに一から最後まで唱えてしまふのです。「理解させる」というのがいかに難しいか。ただ暗記力は驚異で、掛け算でも十二支でも電話番号でもあつという間です。わが家に限って言えば、数学はあきらめざるを得ないかもしれません。しかし図形は別。これは、青山の子供の城に三百円で売っている、色

んな形の小さなマグネットパネルをオモチャにしたおかげか、「三角」二つで四角になるよ」と言ったのは三歳でした。

〔理科〕

理科はもう実践しかない。科学する姿勢をつくりさえすれば、あとはそれに乗っかってほしいと、動物園に何度も行き散歩の途中で犬猫に触らせ、山や草原に行っては虫を捕り、農園を借りては作物をつくる。そのたびに帰ってから事典で名前を確認する。

四歳の春には、「実がなっていた」と

取ってきた草の実を事典で調べた後、ハサミで切って中身を絵に書いていました。

〔社会〕

ニュースを解説し歴史をひもとくには私の知識があまりにも貧弱なので、せいぜい地図を書くとか。祖父母が九州なので行くたびに日本地図で東京との位置を確認する程度。しかし先日娘に地球儀を見せたら、「日本だ」と指差し驚嘆。「おお日ころの成果か」と胸が熱くなる間もなく「だって日本は赤だも

ん」

なるほどその地球儀の日本は赤い。「赤い色で塗ってあるところが日本だ」と教えたやつがいるのだ。犯人はあえて捜さない。しょせん子供なんてこんなものかもしれない。ただ首都や国旗なんか覚えさせるとすごい。これはけっこうクイズみたいで楽しい。

〔英語〕

0〜1歳のころは英語と音楽は早いほうがいと焦っていましたが、その割に実行伴わず、ビデオやテレビ、テープに頼りきり。日本人は子供に英語を教えてはいけない」とある先生からきつく言われていたため。一度耳から入った発音を正すのは並大抵の努力ではないそうです。じゃあどうしたらいいのよというときに、色々見に行った中の一つの英語教室を本人がとても気に入って、一週間毎日パパにお願いして学費を勝ちとりました。

自分でおねだりするほどのものはない、幼稚園を休んでもここは行きたがり、半年たつ今「象はelephant」寝



ているは「sleeping」ときれいに発音。かなりの単語とった、あいさつなら身につけているかも。でも英語はやめればそれまで。すぐ忘れるからあまり意味ないと思います。続けられればですが。

〔音楽〕

六カ月検診で保健婦さんに「歌を歌い絵本を読んで話しかけてあげてれば子供は立派に育ちます」と言われてから毎日童謡は歌って聞かせましたが、「絶対音感」がついているかと聞かれるとハタと困ってしまいます。最近童謡より「Say Yes」とか、「がらがらへびがやってくる」とかを歌うようになり、慌てて鈴木メソッドのピアノを始めました。一週目「ド」と「レ」を見つ、二週目で「キラキラ星」の最初の部分が弾けました。ホルンを吹いていた割にピアノも弾けない母としては、すべて先生にお任せしています。

〔美術〕

これは美感和、絵を楽しむ目を育てるだけいいと思い、絵画展に二回ほど行きましたが続かず、近くのお絵か

き教室に親友が行っているというだけで、お絵かきにはなく遊びに行っています。

話が長くなりましたが、こうして文章にしてみると、私のやってきたことは早期教育でも何でもなく普通の生活ですね。ただ砂場にいても子供相手だと十分が一時間にも思えてしまう私は、何とか楽しく子供に芸を覚えさせ楽しんでしまおうと、始めた躁教育にすぎないので。反応があると面白いし、やめればそれまで、続けば天才、親子で楽しんでるうちは無害でしょ？ところが一度美大、音大、有名大を目指す親子で苦痛になりがちだけど。

早期教育という言葉が普及した昨今でも、一般に肯定的ではないと思いますが、親である以上子供の持つすべての能力を伸ばしてあげたいと思うはず。商業主義の通信教育や教室に惑わされることなく、わが子を見つめ、伸ばせるところ、不足しているところを楽しむながら一種の躁状態で教育していけたらと考えています。

★わいふバックナンバー

各号特集テーマ

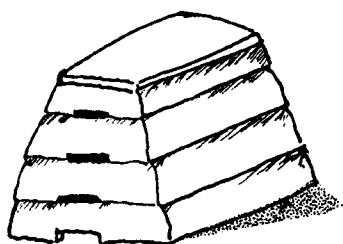
- 176号 わたしの恋愛体験
- 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
- 186号 お医者さんを診断する
- 209号 わがふるさとの現代史
- 213号 私の夫の労働人生
- 226号 セカンドハウス持ってみたら
- 227号 子どもの出現
- 229号 私の職業人生
- 235号 我が家を手に入れるまで

定価二二八号までは四五〇円、二二九号より四六〇円。送料は実費負担で。

★新刊案内

子育てはつらい！ 一五〇〇円
核家族のための
子育てガイドブック 三〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。
☎〇三ー三二六〇ー四七七ー
三二六〇ー四七七三



運動能力を 伸ばして

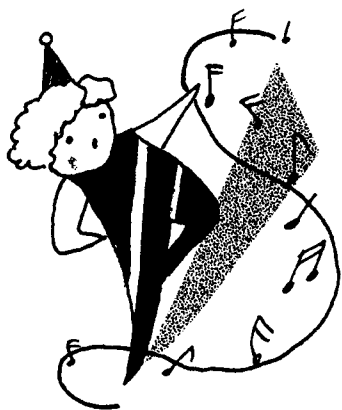
埼玉県所沢市
花岡由美子

（のびのびで過ごしたが）

どこでインプットされたのか、早期教育と聞けば、「幼児の段階で色々教え込むのは、『独創性の芽』を摘み取り、子供らしい子供ではなくなる」とまあ紋切り型の偏見を持っていた。「そういう子が、中学・高校あたりで息切れして、無関心・無感動・無気力の三無主義に陥るのだ。小学校入学までは、のびのび遊ばせるに限る」というふうにならう。だから、うちの三人の子供たちは、もちろん格別なこともせず幼児期を終えた。幼稚園は小学校の先取り教育をするようなところを避け、遊ばせてくれそうなところを選んだ。

では、子供が大きくなった今、あのころ十分ののびのび遊ばせたのか？と自問したとき、答に詰まる。子守代わりにテレビを見せたりと、実はいいかげんに時が過ぎたのだ。

私の子育てのころは、生後三カ月までは目が見えないとされていたのに、大脳生理学の発達により、誕生直後の赤



ちゃんがちゃんと目が見えることや、胎教をした子としない子には、脳細胞の回路にはっきり差がつくデータなどを見るにつけ、漫然と時を過ごした痛みがチラッと横切る。

井深大氏によると「0歳」は、教育の最適時期だそうである。豊かな感性をはぐくむには、右脳のイメージ力を育てるとよい。これから子供を産む人や、子育て中の若い母親は、このことを知っておいたほうがよい、と思う。

のびのびを信じていた私も、娘には劣等感を味わせたくない親心で、六歳になってから、ついにピアノを習わせ



始めた。しばらくして、絶対音感を身につける適性年齢を知る。五歳児が一人とすると、四歳児ではその二倍の二人、三歳児では三、逆に六歳になると〇・五、六歳を過ぎるともう身につかない能力だった。

指は動いても、調音が苦手な娘を見て、なるほどとうなずき、ピアノリストになりたいわけでもないのに、「しまった、もう少し早くから触れさせておけ

ばよかった」と思ってしまうのである。

しかし、後悔ばかりの育児も、長男（大学生）・次男（高校生）に限って言えば、一つだけ「効果あり」と言えることがあった。運動能力が伸びたとき、同時に知能も伸びたのである。まさに「ひょうたんからこま」だったが。

夫の運動能力はたぶん「並」。私は自他共に認める低さ。その子供だから、遺伝的には運動神経が鈍い。ところが、二

人共「スポーツは何でもできるね」と言われるほどにまでなってしまった。

きっかけは、長男の非常におとなしい性質とぜんそく気味の体質にある。何とか活発で丈夫な子になってほしいだけの理由で、小学校一年になってから、スイミングに入れた。

ボチャンバチャン泳ぎで数年間。小五あたりで変化が現われた。泳ぐスピードが早くなったのとピタリ正比例して、成績が上がってきたのだ。さらに自信がついたのかこのころから人の前に出ていくようになった。

（成功体験が大切）

中学で、校内大会、地区大会、関東地区大会、ジュニアオリンピックなどに出るようになって、リーダーシップも出てきた。練習してもしても、生来の運動能力のなさで行き詰まり、挫折感もタップリ味わったが、ガッツもフアイトもここで養われた。長男の人格形成に水泳は切っても切り離せない。

試合の緊張感を数多く経験したので、

重庄につぶされることなく高校・大学受験をクリアできたのも、メリットの一つだった。

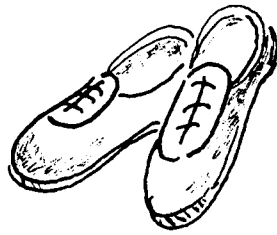
次男も、ほぼ似たような経過をたどっている。ある一つのことです。「成功体験」を持つと、ほかの面の付随効果もよいことを実感する。

先日、巨人軍のコーチを務め、元F1レーサー中嶋悟、女子プロゴルファー塩谷育代、プロボクサー井岡弘樹、フイギアスケートの八木沼純子など、各分野の一流選手のトレーニング指導をしている東海大学の田中誠一教授に、子供の運動能力を伸ばす方法を聞く機会があった。

私の場合、理論は分らずにやったのだが、後から田中教授の話を聞くと、ある程度理論的に当てはまることをやってきたようで、驚いている。うちの子は鈍いからとあきらめてはいけない。ちなみに田中教授によれば、赤ちゃんは脳の発達に応じてお座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きをするが、十三カ月の間にこの段階をちゃんと踏

まないと、脳の基礎的なものがよくできないそうである。十カ月で歩いたと喜ぶなどもってのほか、十分はいはいをさせなさいと言っていた。

幼児期にはできるだけ自然の遊びをさせ、その中にランニング、スイミング、ハンギング（ぶら下がる）、スローイング（投げる）を含めると、将来スポーツ能力が伸びるのだそうである。



（末娘の場合）

長男・次男でうまくいったので、それではと年の離れた末娘（九歳）も、同じようにスイミングに入れた。

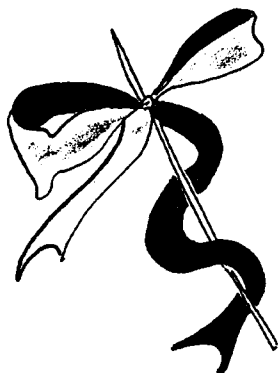
クロールを覚えるのに一年半、バタ

フライは一年がかりと、まだポチャポチャ泳ぎの段階。運動会で六人走れば大概四位か、五位。ドッチボールをすれば、逃げてばかりですぐ当てられる。跳び箱では助走の格好だけはするが、踏み台の前で止まり、一呼吸してから跳び箱の上にチョコンと乗る。鉄棒の逆上がりは最近やっとできるようになった。

「わたし、運動が苦手なの」とボツリと言う娘の成績は、中くらい。そう、本来の姿である。「継続は力なり」で、効果が出てくるのは、数年先と期待しておこう。あくまでも教育は長期戦なのだ。

早期教育なんて、とどのつまりは、わが子に少しでも早く何らかの能力を身につけさせ、他人より抜きこんで社会で成功させたい親心にはかならない。

左脳に文字を教え込むような作業はナンセンスとしても、右脳の「そうぞうりよく」（イマジネーションとクリエイティビティ）を育てる早期教育はやったほうがいい、と思う。気長にね。



誰がための 習いごと

千葉市美浜区
大野幸子

【かわいいレオタード姿】

「三日坊主」。私にとって大きな声で言えない、後ろめたい言葉である。わが家の場合、詳しくは「五日坊主」であったが。

娘、いや私たちが体験した出来事。娘が三歳にも満たない確か二歳十カ月のとき、私の住む団地の近くに大型ショッピングセンターがオープンとなり、その四階に、冬はスケートリンク、その他の季節はテニスコート、スポーツジム、その一画で新体操クラブも同時オープンしたのである。そのころ新体操も脚光を浴び始め、新体操といえは山崎浩子さんの時代であった。

そして、そのクラブは幼児対象としては、画期的な試みだそう。こんな近くにすばらしいクラブができたことに、三人娘を持つ親として興味をそそられた。「そうだ三人の娘のうち一人は新体操でもやらせてみたい」

上の二人はすでに習いごとをやっており、三女に夢を託し見学に行った。質

問、「うちの子、まだ三歳になっていないのですが大丈夫なんでしょうか?」「ハイ、大丈夫ですよ、私どもも数人のインストラクターで教えますので……」と、とても愛想よい返事があった。「鉄は熱いうちに打て!!」と申すように体の柔らかいうちに一日でも早く鍛えたほうがいいのだと、そのとき私は思い込んでいた。そして、情操教育とスポーツの抱き合わせというのにも夢が広がった。

コーチはとても感じのよい二十代の美形の男性。ルーマニアだか、ブルガリアだか忘れたが留学を終え、このクラブのため帰郷したばかりとのこと。そのことも手伝って、私は早速申し込み、入会金を納め、勧められて輪、リボン、レオタードなどを買い求めた。そんな親の魂胆など二歳十カ月の娘には知る由もない。数日後、クラブのオープンングセレモニーが開かれた。入会した生徒たちも、そろいのレオタードに身を包み参加する。もちろんまだ何一つできるわけもなく、名前は忘れ

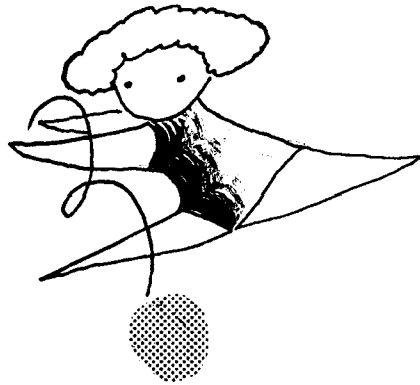
だが、招待したブルガリアの新体操世界ランク一位、二位など有名な選手たちのそばに立ち記念写真などを撮ったり、それは華やかなスタートに思えた。今思えば、短い間のステキな記念となったのだった。

彼女たちはまさに美のかたまり、ただ美しいだけではなく、すばらしい技といい、しぐさといい、ため息の連続であった。カモシカのようなあの足はいつまでも脳裏から離れることなく、いつの日か娘も……そんなことを夢見た私の愚かさ。

やがて週一回の練習が始まった。「ちゃんと先生の言うことを聞いてネ、一生懸命頑張るのよ！」娘はとりあえず外出できることが楽しいのか「ウン、ウン」と笑顔でうなづく。

一時間の練習は二十人ほどの生徒で小学校の高学年、幼稚園、年齢は多様であったが、やはりうちの娘が最年少で体も一番小さく、白いレオタード姿も下っ腹が膨れ幼児体型そのままである。決してサマにはならないが、立つ

ているだけで愛くるしいとほかのお母様たちが、お世辞で言ってくくださった言葉がやたらとうれしかった（親バカである）。前半十分ほどは柔軟体操か



ら始まり、後半は音楽に合わせる。例のコーチいわく、「日本で、こんなすばらしいマットはここだけです」

そのコバルトブルーの正方形のマットの上で、先生のやるとおり一列に並

び、同じまねをし、踊る。娘も終始ニコニコ顔で、猿まねのように手足を動かして（本人は踊っているつもり）参加していた。離れたところで見ている私の顔も、思わずほほえんでしまう。そんな練習も四回目まではどうにかついていったのだが……。

（筋 肉 が 硬 い）

五回目のある日、その日は道具（ボール）を使い慣れさせる第一段階とのこと、娘は初めて手にした赤いボールを抱え、相変わらずの笑顔で仲間に加わっている。最初は一列に並び、一人ずつ先生の後について、ボールを空中に投げ、受けては走るという動作である。娘はボールを投げて、もうしてもとれない。やがて、あきらめたのかボールを持つと列から離れ、ボールを足げりしたり、バウンドさせたり、マットの外まで追いかけたしたのである。先生の注意など耳にも入らず、独り勝手に遊びだした。

私もう「先生のところに戻りなさ

い」と叫ぶが、そんなこと関係ないという顔で、ボールを追いかけてはキャッ、キャッと声まで出して走り回っている。先生も無視し娘を除外し、ほかの子供たちを指導している。そのとき私は「やはり無理だったのかもしれない」と、そんな思いが胸一杯広がり、十分後それは決定的なものとなった。やっと練習も終わり娘はとても満足げな顔で私のそばに駆け寄り「麦茶ちょうらいな」「もう、どうして先生の言うことと聞けないの、ちゃんとやるって約束したでしょう。今度でできなかったら麦茶持ってこないよ」そんな説教をしていると、例のコーチが「未央ちゃんのお母さん、ちょっと未央ちゃんとこちらに来てください」

私と娘は隣のスポーツジムに案内された。「未央ちゃんの体力検査をしますので、お母さんはそちらで待っていてください」それは二、三分ほどで終わった。コーチとインストラクターがある器具の数値を見ながら話している「硬いなあ……」インストラクターがうな

ずく。私には何のことか分からないが二人の様子をガラス越しに見ていて不安になってきた。娘を連れコーチが私のそばに来て、真顔で「未央ちゃんの筋肉は少し子供にしては、硬いようですね」と目を落とす。私は「それがどうしたんですか」と聞こうと思ったが二人の真剣な顔を見つめながら……沈黙のうちに納得できたのである。

「先生、やはり三歳前では無理だったのでしょうか」

「そうですね、うちも試験的に未央ちゃんを入会させてみたんですがね、やはり三歳児は指導の面でも無理だと分かりました」

なんてコッタ、うちの娘は実験材料だったのか。それでも筋肉でも柔らかければ、まだ希望があったのか。それは生まれ持った体質、そこまで考ええるとは遺伝的なことになってしまう。素質のない子は、最初からダメだということとを思い知らされたのである。素質ある子は国をもって育てていく其産圏に、留学されてきたコーチにとっては当然

り前のことなのであろう。

素質ある子供を捜し当て、一流の選手に育てることがコーチの務めであることも私には理解できる。あれから八年ほどたった今、そのクラブからジュニアで全国一、二位の選手も育っている。やはりその業績は、そうした考えの結果と認めたえたい。

話は前に戻るが、そのとき私は冷静沈着に「短い間でしたが、有り難うございました」と礼を述べ、クラブをあとにした。娘には何の罪もない。私の勝手で始め、私の判断でやめさせただけのこと。高い出費と、親の欲目で子供に無理に押し付けたことの後悔だけが残ったのである。それが私と娘の「五日坊主」の体験である。それから私は何一つ娘には習いごとをさせなかった。

【好きこそもの上手】

先生の言うことが理解でき、自分でやりたいことが見つかるまでと私は沈黙を通した。臆病になったわけではないが、あの「五日坊主」の思いを再び

味わいたくないのが本音であった。

そんな娘が小学校二年生も終わりのころ、「ママ、私バレエ習いたい」と言い出した。バレエは長女も九年間続け、家には発表会のビデオや写真が多く残されている。「エー、ほんとうに続けられるの？」私は半信半疑の目を向ける。「だって、私ぐらいいだよ、何もやっていないの」

「みんながやるから、やるんじゃないでしょう。ほんとうに自分で続けられるかどうか考えてごらん。そんなに甘いもんじゃないんだから」

「絶対に続けるから」

私も不安はあったが、最後には根負けしたのである。そして自分から言い出したバレエは性に合ったのか、週二回の練習も、雨が降ろうが、真夏の暑い日差しの中だろうが通い続け、一日も休むことなく二年間連続皆勤賞をいただいた。そして習い始めてから二年半ほどして、千葉国民文化祭のオーディションに受かりその他大勢ではあるが参加することができた。

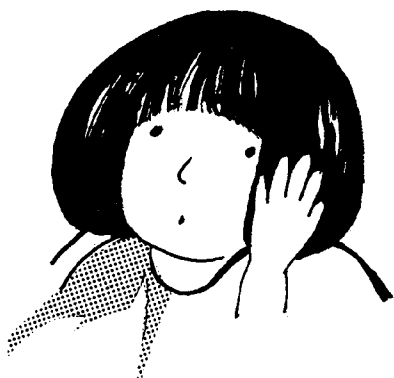
それは、やはり彼女の努力だと素直に認めたい。習いごとは親の意向で決めるものではなく、本人の意欲や意志に任せれば失敗などないことを私は身を持って確信したのである。しかし、まだまだ課題は幾つかある。バレエの世界もなかなか厳しく、技術的なことばかりでなく、顔の大きさ、手足の長さなどやはり体型的なことが問題となってくるのである。女の子は初潮を境に体型も変わり、女性らしく丸みを帯びてくる。

娘は小学校六年、まだその時期は訪れないが同じ教室の大きい姉さんたちは、バレエを続けるため大変苦労をしているようだ。ほかのスタジオなどでは、上級（中学生くらい）になると親子の面接があり、その母親の体型を見るそうである。母親が太っていると子供も太りやすい体質は逃れられないというのである。

私はつくづく、その教室でなくてよかったと思う。外国では、三代さかのぼって調べ身内の体型で続けるかどうか

か決めるそうだ。やはり行きつくところは、遺伝学に到達するのであろうか。子供は親から受け継いだ遺伝子によって、将来の夢や希望が決められてしまうなんて残酷なことではないか。新体操もバレエも根本的な考えは同じである。しかし、美を表現する者に対しては避けては通れない試練なのであろう。娘も今のところは細身であるが、やがて母親の遺伝子を受け継いで、丸くなったとしたら……でもそんなこと考えてもしようがない、そのときは娘も自分で判断し結論を出すであろう。自分が好きで打ち込めることがあるだけでも、すばらしいことではないか。

「好きこそ、もの上手なれ」それが習いごとの原点だと思う。そして、それから得たものは決して彼女の人生でプラスになってもマイナスにはならないこと、すべての習いごとや塾は、早ければ早いほどよいのではなく、本人がやる気になれば、始めた時期など問題ではないことを断言したい。「五日坊主」を体験した私の感想である。



難聴児から 学んだこと

福岡県筑紫野市
百野亜子 (28歳)

【難聴の子には文字が必要】

私は、仕事で難聴の子供たちと接している。小さいころから補聴器を用い、わずかな聴力とほかの感覚を総動員して、様々なことを学習しながら子供たちは成長する。

そんな子供たちと付き合う中で、早期教育について考えさせられることがあるので、わが子に行なった早期教育の経験ではないが、述べてみたい。

難聴児を育てていく際、子供の自然な発達に合わせてかわっていくのか、少し先取りして教えていったほうがいいのか、悩むことがある。種々の力には、芽生える時期や、学習するのに最適な時期があるのだから、それに即して適切に接していけば、子供の健やかな発達は保証されると思う。

しかし待っているだけでは、なかなか芽生えない力に、積極的に働きかけることもある。

音の存在に気付かせたり、言葉の意味を伝えて、子供が聴覚を使って学習

する下地をつくっていく場合がそうである。

また、子供の興味がわく前に、あえて意図的に関心を持たせ学習を促すこともある。文字を比較的早くから導入していくのが一つの例である。

なぜ、発達を先取りしてまで教えなければならぬのか。

この問いは、そのまま早期教育を行なう際の重要な鍵となるだろう。

難聴の子供たちは、早目に文字を教えられる場合、負担も大きいように見える。家中に「すいどう」とか「でんき」など名称を書いた文字カードを張る工夫をしたり、お母さんも大変である。

しかし覚えてしまえば、文字は難聴児の強い味方となる。人の言葉がよく聴きとれないときに、書いてもらうことで理解したり、自分の言葉が相手に伝わらないとき、書いて示すというように、文字はコミュニケーションの補助手段として大いに活用されるのである。

また、難聴児は発音の誤りを聴いてチェックしたり修正することが難しい

ため、自分の筋知覚を通じて発音の仕方を習得しなければならぬが、文字を手がかりに、この音はこうやって発音するというルールを思い出すこともできる。

難聴児療育を長くやってこられた先生たちからそうしたメリットを教えられ、また自身も、今担当している子供たちが文字を巧みに併用している様子を見てみると、やはり文字は役に立つと思われる。多少無理をしても、そうしたメリットのほうをよしとして、早目に文字を指導する必要がある。一方、聞こえが正常な子供たちに、早期教育の一環として文字を教える場合、それはどんな意味を持つのだろうか。

私は実際に携わっていないし、子育ての経験もないため、実感としてわいてこないのだが、一年ほど前、友達が電話でこんな話をした。

「赤ちゃんってすごい才能を秘めているのね」

と言う彼女に、そのわけを尋ねると、「うちの子、まだ八カ月なんだけど漢字

カードが選べるの。目とか手とかだけどね」

と弾んだ声で話すのだった。

電話を切った後も、どうも釈然としなかった。そんな教育を受け入れる親たちは、その理由を把握しているのだろうか。

単に「早く覚える」ということだけが強調されてはいないだろうか。

子供には一人一人発達のペースがある。世の中に、平均とか標準といった情報が流れるとついそれを基準にして判断してしまい、子供本来の伸びようとする時期と食い違うことになりかねない。

問題解決力が大切

難聴児や、色々な障害を持った子供と接してみても、ようやくスピードやスコアによらない物の見方があることに気付いたが、私は学校教育でみっちり偏差値や数値評価を受けて育った世代だから、身についた数値的な価値観の根は深い。

早期教育を考える場合、早いということがどういうことなのか見極めることが大切だと思う。それは、私たち大人の課題である。

こうした課題を解決するときに、私たちはどんな力を使っているのだろうか。恐らく自問自答したり、ほかの人の意見を聴いて吸収していく力が必要なのだろう。自分に課せられた問題を自分で解決していく力は、大人になってから身につくものではなく、それこそ、幼い時期から身につけていきたい力の一つではないだろうか。

こうした力を育てるような働きかけは、そのまま教育的なかわりといっていると思う。

教育というと、学校や塾といった機関を思い浮かべるが、教育には必ずしもそういった場所があるわけではない。子供とゆっくり付き合うと何でもない場面が立派な学習の機会になることに気がつく。

私の手のひらに赤いボールペンのおとがついているのを、一人の女の子が

見つけて、

「チガデテル」と言った。隣にいた先生が「血じゃないよ。ペンのあとよ。」と言うとその子は首をかしげた。補聴器をつけているとはいえ音はゆがんで聞こえるため、聞き慣れない言葉をすぐに理解できないのだ。

「ペンノアト？」とその子が繰り返すと、隣の先生は、チャンスとばかり実際に赤いボールペンを取り出して、私の手のひらにもう一つの点をつけ、

「ほら、ペンのあと」と言ってみた。子供はその点を見ながら、もう一度、「ペンノアト」とつぶやき、パッと表情が変わり「ああ、ペンのあと!!」とその言葉の意味をすっかり理解してくれた。

また、子供は子供なりに生活の中から物に対する認識を持つようになるが、それでは説明のつかない場面に出会ったとき、速やかに概念を修正したり変更していくようである。

ある日、シャボン玉をするために、石けんから液をつくったり、針金で輪を

つくったりしたときのこと。針金が長すぎるのでどうしようかと尋ねると、引きちぎろうとしたりハサミを持ってきたり悪戦苦闘していた。おもむろにペンを出して、子供たちの見守る中、あっさりプチンと切ったとき、一人の男の子が「おっ」と声を上げ、目を丸くした。

また別の日、女の子が、「やぶさめ」という珍しい神事を見たときの話をしてくれたついでに、「やぶさめ」と書いてみてとボールペンを渡したら、「やぶさめ」の「ぶ」が「ぶ」となって、その子はしまった!という顔になった。ちょうど砂消しゴムを持っていたので手渡すと、その子はゴシゴシこすってカスを払い落とした。そのとき「あっ」と言って顔を上げた。ボールペンで書いたはずの余分な点が消えていたのである。

【教える側は価値観の点検を】

私は、子供たちのこうした「あっ」とか、「おっ」とかが大好きである。その瞬間の表情の輝きを見ると、子供が

実に様々なことを体験から学んでいるのだなあと感心する。

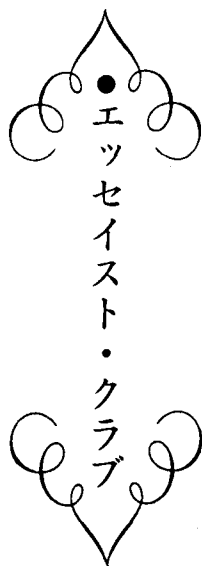
そうした発見に満ちた生活を、親も一緒に楽しみながらやっていくことが、子供たちの創造力、適応力、判断力といった力をはぐくむことにつながるのではないだろうか。

私は、子供との付き合いの中で、早く教えることの意味を、待つことの大切さとの兼ね合いで判断しようと思っている。

また、自分がどんな価値観を持っているか不十分でも点検していくようにしている。

人は自分が色付きのメガネで物を見ているのに、気付かないことが多いのだそう。

私が難聴児から学んだ、大人としての役割について、ほかの人がどう感じるか語り合ってみたい気がする。一年前、釈然としないまま連絡していない彼女にも、また連絡しようと思う。今ならお互いゆっくりと、子供のことを話し合えそうな気がする。



未婚の母

東京都 悠木 翔子

昨年、結婚八年目にして出産というものを経験した。自分で妊娠・出産・育児（今まだその真っ最中であるが）を経験してみても初めて分かったことだが、子供を持つということは想像していたよりはるかに楽しいことであると同時に、精神的にも肉体的にも、そして経済的にも『大変』なことであった。周囲の祝福、夫の協力・励まし・支えなどなどがあつたうえでもこんなに大変なことなのに、これが祝福されないような、あるいは一緒に子供を育ててくれる相手がいらないような場合だとしたら、一体どれほど大変なことだろう。

「妊娠かな……？」と思って、初めて産婦人科の病

院へ診断を受けに行ったときは、とにかく体調が悪かったため、自宅に一番近い、歩いて行ける個人病院を選んだ。尿検査の結果を見て、医者に「おめでたですよ」と言われても、熱はある、体はだるい、今まで経験したことのないような何とも形容し難い気持ち悪さ（吐き気）に襲われっ放しの私は、「はぁ……」と、嫌な表情のまほうなずいただけであった。「じゃ、カルテをつくりませんが、アレギーや特異体質はありますか。初めての妊娠ですか……」と、医者からの質問が色々続いた後、『結婚継続年齢』という項目にきた。「結婚は……」医者はちよつと間をおくと「されていらっしやいませんね」とかなり断定的に言い、カルテにそう記入してしまった。私はあ然としながらも、我に返り「六年半です！」と答えた。「えっ……！」そのときの医者の意外そうな表情といたらない。カルテを書き直したしたが、そばにいた看護婦とともに思いつ切り疑いの目をこちらに向けている。「じゃ、内診しますからこちらへ来てください」「お産みになりますね?!」看護婦は私に厳しい口調で念を押すように言った。院内には『予定外の、好ましくない、ふしだらな妊娠』と決めつけられているような雰囲気漂っていた。「どうせ産むつもりもないくせに。せいぜい産ん

だところで、未婚の母じゃどうするつもりだ」と言っているような視線を私は周囲に感じていた。

実際のところ、「子供はできないけれど、夫婦二人の生活も楽しいし、ま、いいか」と、夫と話していた矢先の突然の妊娠だったので、喜びというより驚きと戸惑いのほうが大きい、というのが私の実感だった。「未婚の母扱いされちゃった」と友人たちに話すと、「若く見えたんじゃない」「それだけそういう人が多いってことでしょね」という言葉が返ってきた。「そうか、若く見えんだ、きっと」と、ちょっと気分を取り直したが、あの扱いにはいまだに腹が立つ。

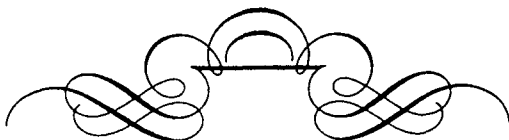
『未婚の女性の妊娠』と思ったとたんにああいう態度に出た医者や看護婦たちの無神経さ、思いやりや配慮のなさ（そんな道德観や倫理観のない人間など思いやる必要はない、と思っているのだから当然であるが）、差別感、偏見、軽べつのまなざし……、私は今でもあのとき味わった屈辱感が忘れられない。これがもし、ほんとうの『未婚の妊娠』だったら、どれほどの傷を心に負い、一生引きずっていたことであろうか……と思う。

私の母は、私のことを妊娠し、（どういう事情があったのかは分らないが）多分一人で出産し、出生届も出せず、乳飲み子を抱えての生活を（目

分で選んだとはいえ）余儀なくされた。一体どれだけ苦労したであろう。彼女は私が一歳になるかならないかのときに、子供のいなかった夫婦に私を託し、姿を消した。『この子の前には二度と現れない』という条件で。

現在でさえ、『未婚の母』というと、私が体験したような偏見や差別で肩身の狭い思いをするというのに、今から三十年以上も前に、一人で出産し、一人で子供を育てるということは、想像を絶する忍耐や心の葛藤^{かっち}があったに違いない。ましてや一歳まで育てたわが子を手放す決心をしたときの心境は、いかなるものであろうか。

今、私の子供は一歳を過ぎたところである。この時期だから余計感慨深く、感傷的な気持ちになる。『未婚の母』がいいとか悪いとかはさておき、途中で手放してしまったことはともかくとして、私を産み、一歳になるまで育ててくれた人がどこかにいる。「こんなに大変なことを一人でやってくれてどうも有り難う。私を産んでくれてどうも有り難う」私は自分の子を胸に抱くとき、いつもどこかにいるであろう実母に、心の中で呼びかけている。



東京駅まで？

東京都台東区 松浦 啓子

駅の階段をゆっくり上がる老婦人がいる。

「どっいしょ」

ホームの端にようやく上り着いて、トントンといきに結んだ帯の下をたたいた。

私の前に行くその老婦人は、襷足をなで上げながら少し歩いて、サラリーマンふうの男性に声をかけた。

「あのう、すいません。東京駅へ行くにはこのホームでいいでしょうか」

たばこに火をつけていた手を止めて、彼はお茶の水で乗り換えるようにと優しく答えている。そんな二人のわきを抜けて、私はホーム中央へと進んでいつもの位置で電車を待った。

昼時の駅は何かのんびりしていて、電車を待つ客の顔にも余裕がある。朝のラッシュ時は、せか



せかした人の群れが電車の着くたびにあふれ出て、だれの表情にもゆとりなどない。今は何だか空の雲まで、のどかに鼻ちようちんを出して浮いているように見える。私もあくびが出かったところで、さっきと同じ声が出た。

「あの東京駅まで行くのですが、ここの電車でもいいんですか」

アレ？あの老婦人が、今度は売店の横で黄色のヘルメットを抱えて立っている作業服の若者に尋ねている。この若者も笑顔で丁寧に前の男性とまったく同じ答を返していた。

おかしいな。ホームを半分歩いただけで、もう聞いたことを忘れてしまったのかしら。ボケているのかなこの人は。いぶかしく思いながらもがめていると電車が入ってきた。

「この電車は東京駅へ行きますか」

車内でも案の定、同じことを繰り返す。三人目はドアに寄りかかっている中年女性だった。よくぞ自分に尋ねてくださったと言わんばかりに、この相手も金歯をのぞかせながら愛想よく教えている。

「次がお茶の水ですからね。反対側の赤い電車に乗って二つ目ですよ」

おまけに降りるときに手まで添えてもらって、



老婦人はその女性に深々と頭を下げた。

尋ねるときや礼を言うときのしゃっきりとした様子からは、それほどボケているようには思えない。私にはむしろ、答えてくれる相手の気持ちよい笑顔を楽しんでいるように見える。今の忙しい世の中で、ゆっくり老人の話し相手になることは敬遠されがちだが、ちょっと何か尋ねられるだけなら、みんなあんなに優しい表情で向かい合える。これはもしかしたら彼女のストレス解消法なのかもしれない。

お茶の水のホームをまたゆっくり歩きだした彼女の行く手に、今度はミニスカートの女子大生が立っていた。

排水路

東京都葛飾区 田中 文恵

“よどんでいる水の一滴を顕微鏡で見てごらん下さい。生き生きとした細胞であふれているから”と、アガサ・クリステイーが『牧師館の殺人』で書いている。

葛飾区柴又にある江戸川に、十五年以上も前か

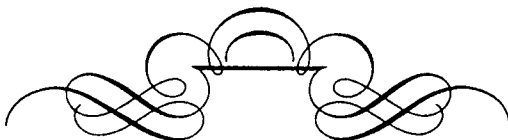
ら使われていない排水路がある。今はただ江戸川の水が出たり、入ったりするだけの汚い水たまりにしか見えない。公園の拡張工事のために埋め立ててしまおうとした建設省も、よどんだ池としか見なかったのだろう。

この排水路が、トンボの楽園であり、カニ、オタマジャクシ、メダカの住みかとなっていることを知っている人は少ないのではないか。十種類以上のトンボ、アカテガニやクロベンケイ、浅瀬はオイカワの産卵場でもある。

「今のまま残してほしい」という要望書を「みずもと自然観察クラブ」が葛飾区に提出し、小さい生き物たちの楽園は守られることになったと、一九九二年七月九日の読売新聞に掲載されたが、何人の方が心に留めてくださったであろうか。

休日には犬を連れて、江戸川を散歩する。「矢切の渡し」を通り、排水路まで行くこともある。途中にはヨシ原があり、セツカのヒッヒッヒッヒッという声が聞け、草の茎に両足を開いて止まる姿を見ることが出来る。

江戸川は、日によっては悪臭に満ちて、人を寄せつけない。晴れた日には、兩岸の緑、空の雲を映し、ボートや水鳥を乗せて流れる。曇りの日には、空の灰色を飲み込んでしまう。風が出た夕暮



れどときには、おびただしい波を走らせる。

忙しく飛び交うセッカの声のためなのか、とどまることのない川の水のためなのか、連れている犬のためなのかは分からない。私は時を超え、都会を忘れ、雑草になる。

風がヨシ原を渡っていく。ヨシ原がうねる。ハクセキレイが河原を飛び歩き、魚が跳ね、カヌーが通る。私は犬と並んでじっとしているだけである。犬が黒い鼻をびくびく動かして、水のおいをかぐ。私に寄りかかり、釣り人をなめる。静かだ。

かつては柴又の街の生活雑排水が流された排水路が、はぐくんでいるものたちのことを考える。オタマジャクシはカエルになるだろう。ヤゴはトンボになり、ボウフラは蚊になり、稚魚は成長して江戸川へ泳ぎ出す。排水路は、何年も流された柴又の街の生活雑排水によって、栄養たっぷりのたまりになっているに違いない。全長三十メートルあるかないかの汚い、よごんだ水たまりに守られている命は無数なのだ。

同じ区内にある水元公園の整備事業のために、保護を必要とされるミズネコノオという野草の繁殖していたショウブ田が、埋め立てられてしまったことがある。ミズネコノオは茨城県で「絶滅」

千葉県で「絶滅寸前」、東京都では「現状不明」とされていることが、一九九一年五月二十一日の毎日新聞に掲載された。

公園拡張工事とか、公園整備事業という名のもとに滅びていく命がある。これをどう考えたらいいのだろう。

入口と、出口と、ベンチと、舗装された公園を人は必要とするのだろうか。背の高い雑草と、そこで繁殖する生き物たち、ぼうぶらがわく水たまり、囲いの透き間から侵入することが大好きな私には、どうしても分からない。公園は見るためにあるのだろうか。

柴又の人たちは、十五年以上前に小さい台所を切り盛りしながら、雑排水を流していたに違いない。洗剤も多くは使わなかったろう。サランラップや、ナイロンの袋、アルミ箔なども少なかったろう。排水路は、そのころの暮らし方を物語っている。

排水路が江戸川に入るところまで、私の犬が下りていった。足を泥だらけにしながら、水の中で遊んでいる。何か見つけたのだろう。時々顔を左右に振って、水面をなめる。そして私を見上げて「ワン」とほえた。「僕、この水たまりが好きだよ」得意になって、私に告げていた。

(え・カステラネン)

サーブレシブ

家事について四年目 主婦が思うこと

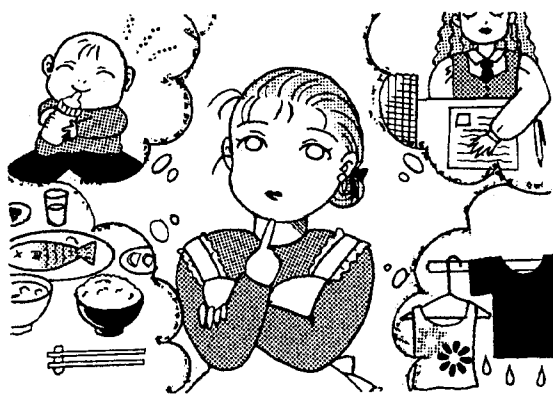
東京都北区 安村豊子(28歳)

二三八号の「家事について」という投稿を読んで、結婚間もないころを思い出した。

といっても先輩ぶれるほどの話ではない。

朝六時に起きてみそ汁をつくり(これは初めの一週間だけだった) 九時から五時半までは会社。帰りの電車では料理本と首っ引き、夕食には常に五品以上並べ、加えて掃除に洗濯、要するにとても張り切っていた。そしてある日、ブツンと切れた。

坂本龍一氏は妻の矢野顕子さんを「怪物」と呼ぶという。家事、子育てを完璧にこなす仕事もするし、自分より本も読んでいるからだというのである。そのイメージ



がどこか頭の中にあり、あこがれたが、現実の自分との間にはどうにもギャップがあった。それをどうしても埋められないと悩み、疲れ、涙が止まらなくなる。そんな状態が三日くらい続いた。とどのつまりは、

ダンナの「おまえ、一人でそんなに頑張るなよ」でチャンチャン。元々極端な性格であるので、それからは一気に手抜き主婦を目指した。

今思えば、慣れないのに頑張りすぎだったと分かる。今はとりあえず出産を目指している。食には気を配るようになった。働くことをやめる気はないのでこれからも戦いは続くが、かといってきっちり半分ずつ家事をすればいいというのもちょっと違う気がする。

食物産業をはじめ、これだけサービスが発達している時代で、衣食住も様々な形をとることができるだろう。子供ができればますます選択肢は増える。選べるだけ昔と比べれば恵まれているし、また不幸でもあるが、できるだけ情報に振り回されず、自分にとって「ベストな方法」を見つけたしていくしかない、独りに戻る気がなければ。

結婚するといふこと

神戸市西区 重住麻悠(35歳)

二三八号の「家事について……」を読んで、三年前、次女を出産して退院した日の情けない出来事を思い出した。

梅雨も明けた七月十八日の昼過ぎのころ、私が病室で荷物をまとめていると、夫が迎えに来てくれた。そして、最初の一言が「今日の晩飯は、どないするねん」だったのである。

夫にしてみれば、私が入院していた六日間（長女は私の母に預けていた）ほとんど外食だったし、長女の産後のときに比べる、私もずっと元氣そうだったのでそんな言葉が出たのかもしれない。

しかし、私はその一言を聞いたとたん、女にとって結婚するということは、毎日の夕食を気にしなくてはいけない生活が半永久的に続いていくことなのだと、気が付いたのだった。

そんな心の中とは裏腹に、なぜかそのと

きの私は割り切った口調で「ああ、私、何か適当にするわ」と答えていた。そして帰宅して一休みすると、ぎらぎらした太陽の光にめまいを起こしそうになりながら、買物に行き、献立は忘れたがともかくちゃんと夕食をつくったのである。

次の日からは母乳マッサージに須磨まで二回ほど通い、長女の相手もしながら家事もこなした。半分ややくそな気持ちで自分の体を酷使して一週間、ついに私は台所に立っていられないほどに体調を崩してしまっ

た。このような状況になって、ようやく夫の夕食づくりが実現した。だが、これはたまたま夫の仕事が夏休みに入っていたからこそできたことである。今でもやはり仕事のある日は、夕食づくりなど頼めない。

新米主婦さんはきつとまじめな方なのだろう。私などディンクスのころは、仕事で疲れる出来事があった日や、遅くなりそうなのは、夫の職場に連絡して外食にしていたので、家で夕食をつくるのは週のうち半分ぐらい。だから、それほどの負担は感じていなかった。ところが、子供が生まれる

各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば「わいふ」文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館の主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住まいの地域の公民館に申し入れて下さるよう、お願いいたします。

一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。

くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合せ下さい。要旨を書いたものをお送りしますので、それを見せて公民館にお申し入れいただくとよいと思います。

とそうはいかなくなる。

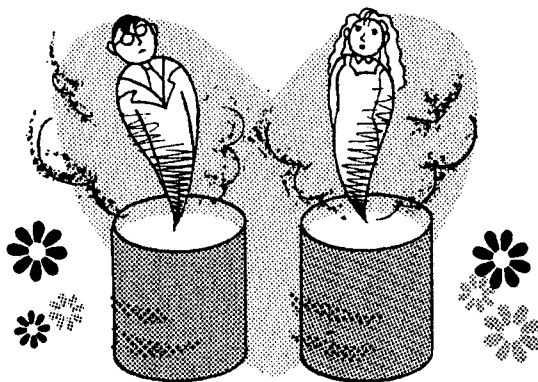
どうしても夕食をつくる気持ちにならな
いときは、夫にそう言ってみよう。嫌々つ
くってもおいしいものではない。それで
夫が外食や店屋物で済ませてくれればそれ
でよし。「じゃ、今日は僕がつくろう」と言
ってくれば最高。怒ったり、不機嫌にな
るようなら、子供ができないうちに別れた
ほうがいいかもしれない……。

続編をお待ちします

福島県郡山市 斎藤野母子(33歳)

二三八号、サーブレーション「夫婦って何
だろう」の荻野様の投稿は、大変感じると
ころがあり、何度も何度も読み返しまし
た。

正直、私も二三七号のセックスレス夫婦
の特集を読んだとき、自分と同じような夫
婦がたくさんいることにホッと、胸をな
でおろしましたが、だからといってこのま
まこの状態を受け入れて年を取っていくに
は、あまりにもさみしすぎるしホッとばか



りもしてられないと、すっきりとしない
気持ちでしたので、その思いを荻野様の文
章で確認することができ、うなずかずには
いられませんでした。

私には三人の娘がいますが、娘たちが成
長して年ごろになったときに、今のままで
は女性として何も伝えることができないと
思うと、やはり逃げてばかりもいられない
。すでに三人の子供があり三十を過ぎた

というのに性に関してはまったく無知で、
ほとんど種族保存の本能に突き動かされて
の、結婚であり出産だったように思いま
す。言い換えれば、若気の至り。

すでに種族保存の本能を果した今、性
はなくても日常生活は自然に流れていきま
すが、何か納得のいかないものが、私の中
でくすぶり続けているのです。性は生であ
り、日ごろのコミュニケーション、思いや
りがなくては成り立たないでしょう。毎日
同じ屋根の下で十三年も共に暮らしてき
て、同じ血を分けた三人の子供までなし
て、指一本触れることさえもできなくなっ
てしまった原因は、夫婦歴をさかのぼれば
様々に自己分析できるけれど、そんなこと
は何の解決にもなりません。

荻野様は与えられるだけの人生から、与
えることの大切さに気付かれ、ついに思い
がけなく救われてしまったとおっしゃる。
一体、荻野様は、どのようにして救われた
のか、私はそこが一番知りたいと思いまし
た。どうして信仰に至ったのか、続編をお
待ちしています。

(え・梅村莓)

ロンドンから

長野 英子



住んでいた家

連れ合いの仕事の関係で、五月末から三カ月ばかりロンドンへ行くこととなった。私の参加している「精神病」者団体の運動も気にかかり、行くかどうかかなり迷ったが、この二年間ほどかなりハードな運動が続いたので、思い切って休暇をもらい子連れで同行することにした。短期滞在者という最も気軽かつ「無責任」な立場から感じたことを書いてみる。

住まいは築百年

ロンドンの住まいはハイドパークのすぐそばロンドンの真ん中で、東京でいえば有栖川公園のそば広尾に住むようなものだろうか？ 住まいは長屋の一つ、といっても寝室三つ、バスルーム二つ、キッチン、食堂と広い居間、東京の我が家（七十平方

メートル）の優に三倍はある。「高級御長屋」といったところか。家具付きで家賃月三十万円は、東京の感覚からいっただけなら安いといっただろう。私の一生で最初で最後の高級住宅体験となると思う。

この家も百年以上たっているそうだが、何しろ街中にビクトリア様式（もっと古いものもありそうだが、私の知識では判断できない）の建物が並び、それらを修理し手を入れながら使っているのがロンドンだ。街角に立ってざっと見回すと、必ず改修や塗り替えのための足場が目に入るといった感じ。

地震もなく湿気も少なく、かつ、れんが造りという条件もあるのだろうが、ともかく古いものを大事に手を入れながら使うのがこの国の誇りというか習慣のようだ（こ

の精神は戦後に建てられた建物に対しても同じで、新聞には戦後から六十年代にかけての建物の保存運動が紹介されていた。

郵便局に行ってエアメールを出すと、天秤ばかりで重さを量っている。何グラム以上幾らというわけだから分銅を使うのは合理的といえは合理的だが、日本ならとくでデジタル式のはかりに切り替えているところだ。

公共交通は地下鉄とバス（例の二階建てバス）が発達しており、地下鉄は外国人にも使いやすく便利。この地下鉄にも我ら日本人はびっくりさせられる。その車両の古いこと、床は板張り、シートのピロイドは擦り切れ、破れたところが繕ってあったりする。ちょうど私の子供のころ（一九六〇年ころ）の総武線のイメージだ。しかもこの体の大きい人の国であるにもかかわらず、車両は狭くしかも車両全体がかまぼこ型となっているので、ドア周辺に立っている人は首をかしげていなければならない。いすに座っている人たちも長い脚の置き場に困っている感じ。エスカレーターのステップも木製のところが多い。もっともたま

に新式の車両もあるので、順次新しくしていく方向にはあるようだが……。

人を運ぶという機能はきちんと果しているのだから、車両が古かろうが問題ないといえはそのとおり。かつて国鉄民営化問題が議論されていたころ、国鉄に詳しい友人が、国鉄の赤字の原因の一つに、必要もないのに車両を次から次に新しくしていくこと、を挙げていた。これは車両メーカーに、国鉄の幹部が天下りするからだそうだが、確かにロンドンの地下鉄は車両は古いが運賃は安い。競合する私鉄がないこともあるだろうが、定期は一日単位で買えて、日本人学校の送り迎え用に二カ月の定期を買ったが、割引は半額で日本の国鉄と同じ、しかもゾーン制をとっているのも一つのゾーン内ならこの定期でどの駅でも乗り降りできる。さらにバスもこの定期で乗り降り自由。東京でいえば、品川から新宿までの定期を買ったら、山手線内のどの線のどの駅でも乗り降り自由ということになる。利用者にとってはピカピカの車両より運賃の安いほうがありがたい。

しかしこの街に慣れてくると、この「古

いものを大切に」という精神が、「停滞」と感じられてくるのも事実だ。数カ月行かないとすぐ街並みが変わってしまう東京のターミナル駅周辺と比べると、これでは不況も続くなあ、と感じられてくる。

日本も一時的異様なブームが過ぎ不況を迎えているが、イギリスの不況も深刻で、英語の先生によると三人に一人が失業者（ただし日本の失業率は、失業の定義が厳しいため低く出るようになってるので、この数字を日本の失業率とすぐ比較することはできない）、特に管理職クラスの中流以上の人たちが失業におびえているのと、つまり管理職三人のうち一人を首にすれば若い女性十人が雇える、そして管理職三人の仕事をするのは可能だが、女性十人の仕事を一人でこなすことは不可能ということだそう。イギリス社交界の大行事、アスコット競馬に現れる上流婦人の衣装も今年は地味になったとのことだ。



家の内部

野放しの犬と

ひも付きの子供

ハイドパークのすぐそばなので、最初のころはほとんど毎日子供を連れて公園に行っていた。そこで驚いたのは、公園内は一部の場所を除いて犬を野放しにしてよいことになっているのだ。

慈善団体の中で最大の資金力を持つのが動物保護協会というお国柄ゆえか、犬を飼っている人も多いようだが、そのマナーは最悪。公園内に犬のふん用のごみ箱まで用意されているにもかかわらず、袋を持って始末している人は見かけない。公園内だけでなく路上も同じだが、至るところに犬のふんが放置されている。公園の芝生は犬のトイレといつてよい。

息子には日本でもそうだが公園に行けば棒切れを集めるのが大好き、芝生に私が座り子供が集めた棒を積み上げているところへ、突然大きなむく犬が現れ、その棒目がけて放尿開始したのにはびっくりした。それ以来芝生にじかに座るのは絶対やめよう



ハイドパーク

と決意したが、この国の人たちは何も敷かず平然と寝転んでいる。

息子は大学の保育園に通っているが、この保育園の赤ちゃんの部屋も先生たちは靴を履き替えずに入っていく。その床を赤ちゃんがはいはいしている！ 息子の行って

いる日本の保育園では、当然玄関でスリッパに履き替え、さらに〇歳と一歳の区域へ行くには、そのスリッパを脱いで入る仕組みになっている。

湿気が少なく気温も低いので病気の心配があまりないのかもしれないが、これにはびっくり仰天した。土足で家上がる人たちの衛生観念はどうも理解できない。

この国に来て子供連れを見て気付いたのは、ひも付きで歩かされている子供の多いことだ。日本のデパートの育児用品売り場で一度見かけたことのある「トットコバンド」と称するものだが、胸と背中にゼッケンのようにひもをかけ背中の中にひもを付け、それを親が持って歩かせる、という仕組みだ。日本では使っている人を見たことがないが、こちらでは人込みの中でこれを使っている人の多いのに驚かされる。安全上も、そして子供にとっても手をつながれるよりは行動半径が広いわけだからよいのかもしれないが、日本人の感覚では「子供を犬並に扱って、児童虐待」という感じがぬぐえない。イギリスの精神科医レインの自信の中で五歳までひも付きで散歩させ

られた、というのを読んで「何と抑圧的家庭」と驚いたが、五歳というのは例外的でも、二歳ぐらいいまではひも付き散歩は普通のようなものだ。さすがに公園内などでは使っていないようだが。

公園でもう一つ驚くことは、日光浴をする人たちの群れだ。冬の日照時間が少ないためかこの国の人たちは天気の良い日はここを先途と日光浴に励む。公園内は上半身裸の男性とビキニの女性であふれる。しかもこれは公園内だけではない。ある日ふと窓の外を見ると隣の奥さん（年のころ五十がらみか？）がビキニで道に面したプラントーの花に水をやっている。筋向いでもデッキチェアを出して、奥さんがビキニで日光浴をしている。ここは長屋で前庭は一切ない。表通りではないといえ人通りのある往来である。

ほんとうに小さい赤ちゃんも裸にさせて乳母車に乗せている風景をよく見る。日本の育児書では日光浴というと生後何カ月からまず脚、そして手、などと細かく配慮するように書いてあるが、この国の人たちはそんなことお構いなしという感じだ。ある

日の新聞で、厚生省が子供の皮膚がんの増加を日光を浴びさせ過ぎることと結びつけ警告していたが、さもありなんと納得するのは日本人だけなのだろうか？

ホームレスそしてこじき

イギリスに来ようと思った一つの動機には、この国の「精神病」者団体やその支援団体の発達ぶりをまれ聞いたからだだが、サッチャーが福祉切り捨てをしたとはいえやはり「揺りかごから墓場まで」の福祉国家、日本では望むべくもない制度や団体が存在している。

詳しいことは専門的になりすぎるので省くが、例えば郵便局へ行くとそこには「病気それとも障害？」というパンフ、生活保護の請求用紙などが置かれている。パンフにはさらに詳しい各々の制度に関するパンフの請求用紙が付いており、パンフの請求や手当てなどの請求を地域の福祉当局にあてて出す場合は郵送料は無料、さらに福祉当局への相談の電話はフリーダイヤル、しかも英連邦と旧植民地だけだろうが英語以外の電話窓口もある。

日本の福祉事務所が、本来取れる権利についても教えようとせず、できるだけ出費を減らそうという姿勢を取っているのに対して、できるだけ情報を提供しようとする姿勢に驚かされる。東京では生活保護者に対して、往復三六〇円（生活保護者の一食分の金額だ）のバス代を使わせて生活保護費を取りに来させる役所さえあるのだ。

ロンドンでは確かにホームレスをよく見かける。しかし私はむしろこの事実に関心。ロンドンの中心にホームレスが存在することが許されている事実には感動する。ホームレスは社会問題として認知されており、その支援団体も活動している。

東京ではホームレスは、山谷などの日雇い労働者の街に押し込められており、東京の中心でホームレスを見かけることは少ない。もしいたら直ちに追い出されるだろう。昨年の冬にも、上野の駅構内から駅員に投げ出されたホームレスが頭を打って死亡した事件が起きた。多くの人は東京にはホームレスはいないと思っているのではないだろうか？ 日本ではホームレスが社会



問題として認識すらされていない。

地下鉄の車内でこじきに会う。彼らは一様に紙に書いたメモを突きつける。その態度は「物ごい」をしているといった卑屈さ

はなく、「要求」しているという感じでむしろ小気味よい。メモには「両親が死んだ」と書いてあったり、「ホームレスそしてハングリー」、「ユーゴスラビアの戦乱から逃げてきた」などと書いてある。い

ちいち感動する私としては、「車内でこじきをする自由があるロンドン!」と感激してしまう。そういえば以前ニューヨークの地下鉄構内でこじきをする権利が裁判で認められた、という記事を読んだことがある。

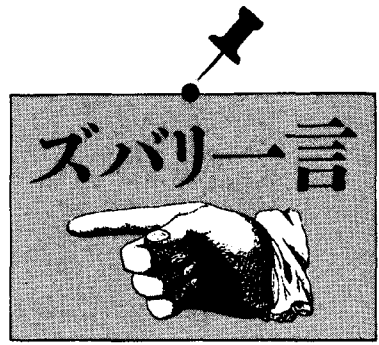
地下鉄構内ではギターを抱えて歌っている人、ヴァイオリンやキーボードを演奏している音楽家たちに出会う。一応張り紙があり、「音楽演奏は禁止」となっているが、ほとんど妨害されることはないようで、それぞれの駅で常連が楽しませられる。結構、小銭を投げる人、立ち止まって聞いている人がいる。駅でのピラまきのとき、いつも駅員に嫌がらせされている私としては、ロンドンの地

下鉄はなんてすてきなんだろう、とうらやましくてならない。

ラッシュアワー（といっても日本ほどの混雑はないが）の地下鉄に乗ると、そこには様々な服装の人がいる。インド人のサリ、イスラムの婦人は黒い衣装をすっぱりとまとい、中には顔を仮面で隠している人もいる。黒人、黄色人種、多民族国家という概念が実感できる。気候に関する感覚も様々なのか、タンクトップの女性とコートを着た人が擦れ違ったりしている。日本の地下鉄のラッシュアワーの一樣の背広の群れは、外国人にとっては異様に見えるのではないだろうか？

地下鉄に乗っただけでも、日本の均質社会は、ある意味で異様な強迫的秩序志向の社会ではないか、と思えてくる。多様な価値観、多様な感覚が共存できない日本社会は、まだまだ「国際化」に遠い。こうした傾向が人権感覚の鈍さと結びつき、様々な差別を深刻化させているように思える。「国際貢献」などとても日本には早すぎる。

（写真提供・筆者）



性と人権

東京都府中市 ●大川原みち子

国分寺市で「エロスの行方」というテーマのトークショーが行なわれた。友人と二人で参加したのだがフェミニニスト誌を編集しているパネラーが、「私の中にレイプを望んでいる部分がある」

などと発言して、会場から驚きの声が上がった。友人は帰りの電車の中で、

「レイプってどういうことか分かってるのかね」と怒っていた。

レイプとは精神的な殺人と私は思っている。このごろ従軍慰安婦問題がかまびずしいけれど、輪姦が毎日制度的に行なわれたということだ。従軍慰安婦も買春ツアールも結婚生活も女性を品物として見ているという思想にはかからない。

従軍慰安婦も下着まではぎ取って男のトイレ代わりにしたし、買春ツアールも職業を選択する自由はあるといいながら、経済的にそこまで追い詰めて、生計をそこに頼らざるを得ない状態に追い込んだ者の罪だと思ふ。

最後に結婚生活を考えると日常会話の中で、

「娘さんをいただきたい」

「娘を片付けた」

「結納金は、どのくらいが相場」などなど、これが品物でなくて何だろう。

私の友人たちと従軍慰安婦のビデオを見た。後の感想会で妻たちの置かれた立場に言及し、

「妻はオンリーだ」

「奥さんは固定客に奉仕する女」「セックス付きの家政婦」

などと思いが飛び出し結論として、結婚する女は愚かな女、しない女は賢い女などと冗談が出てきてお開きになった。

結婚制度の罪が三割、男の無

自覚が七割ということか。結婚制度に支えられるから男が甘えるのか男の無自覚さが結婚制度を支えるのか、卵が先か鶏が先か分からないけれど、このことが原因でセックスレス夫婦が増えているのではないだろうか。これから高齢社会が近づきつ

つあるとき、女だけに介護を任せておけない。今まで品物として遇してきた女性に老後を託す男は怖くないのだろうか。人権を奪ってきた人に相変わらず太平楽に構えて優しくしてもらいたいなどと考えているのだろうか。



私は最近おじいさんにまといつかれ、ほとほと持て余している。電話は一日五回、それも朝五時、夜十二時などという時間帯。最初に知り合ったのが「憲法九条の会」。昔は結構いい線いってて東大仏文科出身、岩波書店に勤めたというインテリ。

女一人のアパートに訪ねてきてチェーンをかけて開けないと、ドアの間から豆腐二丁、コンビニで買ったおにぎり、桃二個などなどプレゼントを持ってくる。受け取らないとドアの前に置いていくので、ごみのように見えてみっともない。

友人たちが冷やかして、

「先がないんだから相手してやれば」

「ボランティアだと思って茶飲



み友達になれ」

などなど他人事だと思って笑い転がっている。私にとってはほとんど災難で夜中の電話に飛び起き、外出するのに小窓を開けて人影を確かめる。先日たまりかねて、

「あなたのやってることはセクハラだ」

とどなりつけた。女は、どこまでいっても生きにくい。

まともでない人

東京都杉並区●川村君子

最近、久しぶりに電車の中で痴漢に遭った。若いころはよく出くわしたが、ここ数年来比較的すいている路線で通勤しているせいかとんと遭わなかった。その日はどうしたわけか、かなり込んでいた。いつものよう

に立ったまま文庫本を開いて目を走らせる。だれかの荷物が私のおしりに当たっているような気がした。かばんにしては何となく違和感がある。意識を集中させた。もぞもぞまさぐる動きはまさしく指の感触である。それとなく後方の様子をうかがってみた。どうも青っぽいスーツを着た三十歳前後のサラリーマンふうの青年らしい。もうすぐ五十歳に手の届く女がいきり立つのもおとなげない。何気なくおしりの辺りを片手で払い、少し体の向きを変えた。

痴漢に遭ったことを男性に話すと、大抵にやにやしてちゃかされるのが落ちである。不愉快さなど分かってもらえないことが多い。女の人に対して愚痴ると経験のある人は一緒に憤慨してくれるが、そうでない女性は皮肉たっぷりに無神経なことを言ったりする。

「私も一度くらい遭ってみたいわ」

「魅力的だからでしょ」

いかにも、すぎがあるとか、痴漢好みだと言わんばかりに聞こえる。私はめったな人には言わないようにしてきた。

気のおけない友人に今度の一件を話してみた。友はケラケラ笑いながら冗談を飛ばす。「あなた、髪を長く垂らしているから後ろ姿は若い女に見えるのよ。相手が若い男だったら絶対振り向いちゃだめ! 詐欺だつて、反対にお金取られるわ」

髪を束ねてひつつめておけば年相応に見えて大丈夫だと付け加えた。

翌日、新聞に載った若い女性の投書が目に残った。その人は電車の中でしつこい痴漢に遭う。勇を鼓して面と向かって抗議した。すると何を証拠に痴漢呼ばわりするのか、名誉棄損で

訴えるぞと逆にすこまれる。周りの人たちの加勢を期待したが、だれ一人として口を開かなかった。被害者から一転して加害者にされた女性はいたたまれなくなる。悔しさと情けなさで次の駅で電車を降りた。

読み終えて前日の友達の冗談が頭をよぎる。ふと先日交わした姉との会話を思い出した。近所に住む五歳年上の姉の家は、最寄りの駅から歩いて七分ほどの距離である。大した暗がりがあるわけでもないのに午後十一時を過ぎると、必ず夫に駅まで迎えにきてもらう。午前十二時を回っても平気で鼻歌混じりに帰る私は姉をからかった。

「姉さんを襲うような物好きな男なんていないんじゃない?」

「まともな男ならもちろんそうよ。でも襲うのはまともな人じゃないから怖いのだ」

姉は目を真ん丸にして大まじ

めに答えた。

それにしても、今まで私は電車の中でたびたび被害に遭っている。なぜなのか。

ねらいを定めたのなら別だが、痴漢は人込みに乗じてたまたま居合わせた間近な人の下半身をこっそり触る。容姿や年齢などもあまりより好みをしていられない。背の低い女性のおしりをかがんでなで回していたのでは周りにすぐ気付かれる。私がいたずらされやすいのは身長が男性並みに高いので、おしり



がちょうど男の手が触れやすい位置にくるからではないのか。

このごろむさ苦しいせいもあって私は髪を一つに束ねて出勤するようになった。今度痴漢に遭ったときは振り返ってにっこりはほえみ、私の推論が当たっているかどうかを尋ねてみたい。しよせんまともでない人なのだから聞いても無駄かもしれない。

男が先?

千葉市美浜区・浦野美智子

先日、地元の小学校の運動会に参加し、綱引きなどで汗を流した。子供たちの活躍ぶりを見て楽しく過ごしたが、気になることがあった。それは、すべての競技を男子が先に行っていたことだ。「男子が先で女子が

後」というやり方は「女子よりも男子のほうが偉い」という男女差別の発想につながると思う。

小学生で女子と男子に体力差があるとは思えないし、あったとしても、運動会は競争というより楽しむものだから、女子と男子が交互にスタートするとか、男女混合で競技を行なうなど、工夫するべきだと思う。「そんなことは小さな問題だ」と言う人がいるかもしれない。しかし、「男女別の出席簿」をはじめとして、小さなことの積み重ねが男女差別社会をつくっていくことを私たちは認識しなければならぬ。

「女子も男子も人間として同等である」という男女平等の意識を育てていくこそが、教育現場に課せられた義務だと私は思う。

(え・山田京子)

ある退職

千葉県 西村 治

万引き事件

昭和五十年代の後半のことである。私は首都圏のK市（人口三十万人）の裁判所に勤めていた。簡易裁判所判事になって二十年近くたち仕事にもすっかり慣れてきた。

今でも忘れない。初めて黒い絹の法服を身に着け法廷に座った日のこと。法廷に向かう廊下を歩く足はガタガタ震えた。緊張で頭の中は真っ白、口の中はカラカラに乾いた。傍聴席に座っている人の顔なんかもちろんはっきり見えない。ミスのないように法規の定めに従って手続きを進めること

で頭の中は精一杯。通常予想できないような事態が起きたらどうするか。そんなことを考えると頭の中にカァーと血が上る。当事者から異議が発せられたり、被告人から苦情が出たら……。さあどう処理するか。何しろ一人の裁判官で事件を取り扱う場合（二人制）、開廷中の法廷内で起きたいかなる事態についても、その処理の権限と責任は彼一人が負わなければならない。新人であるうと、三十年も法廷に立っているベテランであろうと、その点は寸分の違いもない。

あの日から二十年近く経過し経験と研鑽（けんさん）

を積んだおかげで、どんな事態にも適切に対処できる自信ができた。傍聴席の片隅にだけがいるか、その顔もはっきりと見ることもができるようになった。

当時私はある事件の処理に悩んでいた。検察官の起訴状に記載された公訴事実が簡単なものであった。市内のスーパで価格一万円ぐらいのポットを万引きしたというのである。窃盗罪だ。

通常なら処理に迷うような事件ではない。事実認定（法廷に提出された証拠で公訴事実を認めることができるかどうか）にも、法律の適用にも、特に頭を悩ませる問

題はまったくない。

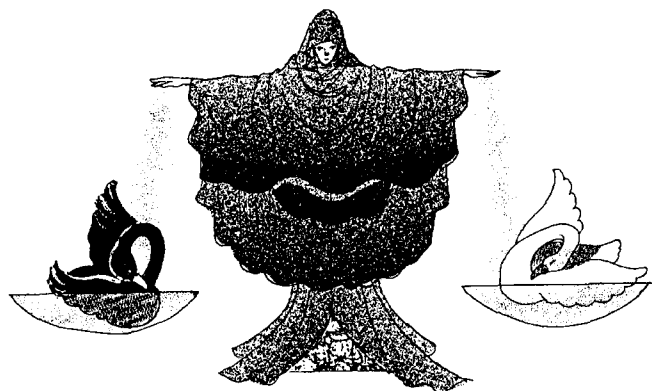
それなのに私が悩んだのは、被告人が法廷で公訴事実を否認したからだ。

被告人は供述した。

「私は代金を払わないでスーパードからポットを持ち出したことは間違いありません。私は考えごとをしていて、ついお金を払うのを忘れて店を出てしまったのです。盗むつもりはまったくありませんでした。私は当日ちゃんと代金を支払うのに十分なお金を持っていました」

長年法廷に立ち面と向かって証人や被告人の言うことを聴いていると、その人が正直に話しているのか、うそを言っているのかは「勘」で分かる。法廷という厳肅な雰囲気の中で裁判官の厳しい視線を浴び、しかも「良心に従って真実を述べ何事も隠さず、また何事も付け加えない」旨を、法廷内の全員が起立した中で宣誓させられ、そのうえ宣誓に反した場合には偽証罪として三年以上十年以下の懲役に処せられると警告されると（証人の場合）、大部分の人はうそを言いにくいし、うそを言う場合には顔の表情や言葉遣い、姿勢や態度のうちに不

自然で微妙な変化が必ず表われる。法廷に座って証人や被告人の顔をじっと見つめ、無心で話す言葉を聴いていると、裁判官の「勘」でその人がうそを言っているのか、正直に話しているのが大体分かるものなのである。



疑わしきは罰せずだが

この事件の被告人の場合、私は、どちらかと聞かれれば「うそはついていない、正直に話している」と直感した。

しかし証拠調べをしてみると、この被告人はこの事件のほかにも、かつて起訴された事件、起訴されなかった事件を五件（いずれも万引き）も犯していることが判明した。しかもそのうちの一件については、今回と同じような弁解をし、結局起訴されずに済んでいる。したがって意地悪く解釈すれば、今度もまた前と同じような弁解をして罪を免れようとしているのではないかと十分に考えられる。しかしその反面真剣なまなざしで私の顔をじっと見つめ訴えるように話す被告人の顔を思い浮べると、そうとばかりもいえないと、私の心にささくものがあった。被告人の演技なのだろうか。正直に告白する。私は判断に迷った。

被告人の万引きを目撃したという、元警察官のスーパードのガードマンを、証人として尋問した。当日被告人はスーパードの店内でキョロキョロ周囲を見回したり、何とな

く落ち着かない素振りを見せていた。ガードマンは万引きをするに違いないと直感した。そこで被告人に気付かれないように、見張りを続けた。そのうち被告人はポケットを手にし、急ぎ足でレジを通らずスパーを出た。三十メートルぐらい尾行し、そこで被告人に声をかけ、事務所に連れてきて万引きの犯人として警察に引き渡した。以上のようにガードマンは証言した。

ガードマンのこの証言を信用すると、被告人が万引きの犯人であることはほぼ間違いないことになる。

しかし被告人は警察署、検察庁での取り調べでは一貫して万引きを否認している。

私は最後に被告人を有罪と認定した。そして被告人に実刑の言い渡しをした。被告人は前の事件の処分との関係で、執行猶予をつけることはできなかったのである。迷いに迷った末の決断であったが、後になってみると確信を持った判断だったとは言い切れない。

判決を言い渡されたときの、被告人の恨めしげで悲しげな顔を、私は忘れることができなかった。

私は被告人に控訴（上級の裁判所で、判決の当否についてさらに判断することを求める手続き）するように強く勧めた。私も神様ではない。私の判断が絶対に正しいと

は言い切れない。ぜひ控訴しなさい。経験豊富な三人の裁判官がもう一度この事件について判断してくださるから……。

被告人は控訴した。しかし被告人の控訴は認められず棄却された。被告人は上告（最高裁判所の判断を求める手続き）しなかった。私の言い渡した判決に従い、被告人は服役した。

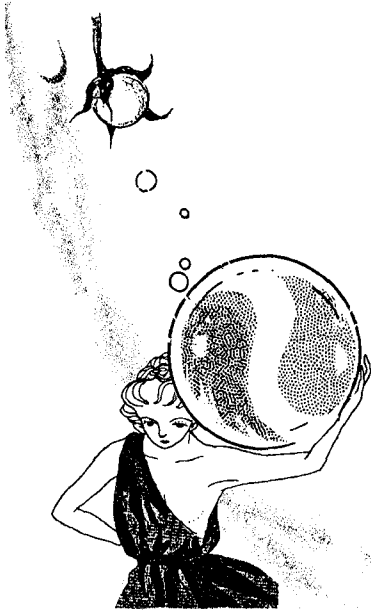
手の中にあつた本

それから数年後のことである。私はI県の人口五万人足らずの小さな町の裁判所に転動していた。いつしかあの被告人のことはすっかり忘れていた。

今度の裁判所は仕事が少なかった。私は屋休みになるとのんびり市内の二、三軒の本屋を回り本や雑誌を立ち読みしたり、時々読みたい本を買ったりした。

ある晩春の屋休みのことだ。恒例になった日課に従い、私は本屋回りをして役所に戻ってきた。

役所の玄関で中年の女性職員に出会った。彼女はここにこしながら私の手元を見つめて、



「何の本をお買いになりましたか」

私は思わず自分の右手を見つめた。私の右手にはしっかりと一冊の本が握られていた。

私はその瞬間、本の代金を払わないで本屋を出てきたことに気付いた。顔から血の気が消えて冷や汗が吹き出した。私は本屋のレジを素通りして、本を本屋の外に持ち出してしまったのだ。まさに万引きそのものではないか。これを万引き——窃盗といわないで何を万引きというのか。しかし私には万引きする意志はまったくなかった。レジを素通りしたときの心理状態を私は思い出せない。強いて言えば「ついでんやりしていて」とか「うっかりして」とかいうことになるのではなからうか。上着のポケットには本の代金に数倍する現金を持ち合わせていた。しかしそれも万引きしなかったことの弁解にはなるまい。人間の内心の心理なんて当人以外には絶対に分かりっこない。

私は慌てて本屋に戻り、主人に謝って本の代金を支払った。

役所の自分の部屋に戻ったとき、私は数

年ぶりで例の被告人のことを思い出した。

今日私が本屋を出て三十メートルぐらい離れたところで、「おまえは本を万引きした」と言われたら、私は何と弁解したのだろうか。私には万引きする気持ちはなかった。本の代金に数倍する現金を持っていたと弁解するに違いない。しかし本屋の主人なり店員が、あの人は店の中でキョロキョロして他人の目を気にするような素振りをしていて、外に出るときにも急ぎ足でしたと証言したら、私には反論することはできない。私の言うことはすべて犯罪逃れの単なる弁解にすぎないと言われるだろう。

私は有罪判決を受けたときの被告人のあの悲しげな顔を改めて思い出した。私は間違った判決をしてしまったのではなからうか。私より地位も高く経験も知識も豊富な三人の高等裁判所の裁判官でさえ、あの被告人の行為を有罪と認めたではないかと反論しても、私の心にはむなしさばかり残った。私の本の持ち出しが万引きや窃盗ではないと言ふのなら、あの被告人の行為も無罪でなければならない。

その日、私はやりきれない気持ちで家に

帰った。

私は良心に従った

絶対に無実の人間を処罰してはならない。どんなに疑わしい点があっても(限りなく黒に近い灰色であっても)、被告人の行為が有罪であるとの確信が持てないかぎり、被告人を有罪としてはならない。先輩から厳しく指導を受けたことであり、わが国司法の長い間の伝統でもある。無罪の判決をして、それが控訴審で間違ひであるとして覆され、有罪となったとしても決して恥ずかしいと思う必要はない。しかし信念を持って有罪の判決をしたのに、それが控訴審で覆されて無罪とされたら、刑事裁判官として恥ずべきことである。これもわが国司法のよき伝統である。

あの被告人の万引きは無罪だとは言いがたれないかもしれない。では、絶対に有罪だとの確信が持てるかといえば、今の私には断定できなくなった。「単なる弁解にすぎない」と、私は被告人の「万引きをする気持ちはまったくなかった」との主張を退けたが、それが絶対に正しかったかは神のみ

の知ることであろう。被告人は以前に何回も万引きをしている、だから今度も万引きしたに違いないと言いつけることは、余りにも安易に過ぎるのではなからうか。あときはほんとうに万引きする気持ちはなく、「ついうっかりして」代金の支払いを度忘れしたとも言える。殊にかつて何度も裁判を受けた被告人は、今度万引きをしたら刑務所に入らなければならないことを、十分に知っていたとも考えられるのである。

私は、本来無実であるべき被告人を有罪にして、刑務所に入れてしまったのではない。強い自責の思いに悩まされた。あの被告人が失った刑務所生活の歳月を取り戻す方法はどこにもない。

私は自信を失った。

昭和六十三年、まだ定年には残された期間が十分にあったが、私は裁判所を退職する決心をした。家庭の問題、上司との間の感情のもつれなど、ほかにも多少の原因はあったが、あの被告人に対する、だれにも話すことのできない判決が退職の決断の大きな引き金になった。

神でない人間のやることだから、少しの

間違いは仕方がないと人は言うかもしれない。しかし裁判に関するかぎり、絶対に誤りも間違ひも起こしてはならないのである。取り返しがつかないからである。

裁判所の庭の桜の老木に咲いた、北国の遅い桜が地上一面に真っ白に散り、光り輝く青葉に変わった五月初め、私は最後の任地である会津を妻と一緒にあににした。

長い間誇りを持ち、また情熱を傾けてきた裁判所の仕事に未練がないと言えば、絶対にうそになる。しかし誤判をしたのではないかとの疑いを持ち続け、また誤判をするのではないかとの不安を持ちながら、仕事を続けることは、裁判を受ける人にとって極めて失礼であるとともに、私にとっても限りなく苦痛である。

潔く職を捨てて今ではよかったと思っている。ただあの被告人のことを思うと、心にうずきを感じる。間違った判決をして、被告人を刑務所に入れてしまったのではないかとの疑いがぬぐいきれないからだ。もしそうだとしたら謝ったぐらいで済まされる問題では、決してない。

(え・小島佳子)

自費出版は

“わいふ” へどうぞ！

“わいふ” 編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実にお安いです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょうか。





これでいいのか資格と仕事

東京都渋谷区 田沼 千恵

フリーの相談員の仕事を得て、かれこれ十年あまりになる。

学生時代の友人に勧められて、コンサルタント養成講座を受講したのがきっかけで、消費者問題にかかわってきた。とは言っても、最初から順風満帆であったわけではない。

資格は取っても、仕事はなく、モニター会議の手伝いをしたり、頼まれて市場調査をしたりした。あるときは、折角企画したプランを大手企業に取りられてしまったりと、泣くに泣けない思いをしつつ、仕事探

しに走り回り、あちらこちらに電話をして就職依頼を試みた。が、どれもこれも骨折りに損に終わった。

そしてやっと見つけたのが、企業のお客様相談室の仕事。そこに三年いたあと、受験のチャンスを得て、行政機関に勤めることとなった。

スタートからの十年が、長かったのか短かったのかは定かではないが、十年間コツコツと種をまき続けた成果は最近になってやっと実を結んだようで、講師やら、ライターや、プランニングの仕事を頼まれるよ

うになった。仕事があるっていうことはうれしいことで、あきらめなくてよかったとしみじみと思う。

(ただし、中には資格習得と同時に、トントン拍子で仕事に恵まれる人もいる。

まさにツイテいる人、ということになるが、そういう人はやっぱり少なく、大抵の人は大なり小なり苦労して、自分で仕事を見つけるため歩き回っている)

現代はいかなれば資格の時代。犬も歩けば資格にあたる。消費生活コンサルタント、消費生活アドバイザーに、消費生活専門相談員。資格の数が多い分有資格者の数も多いから、資格を得たからといって、そう簡単に仕事は手に入らない。地域にもよるが、少数激戦である。しかし資格を取ったほうにすれば、仕事をしたいと願うのは当然のこと。思いがかなわなければ、愚痴も出る。

「ベテランの人はみんな掛け持ちで、仕事をしているのですね。少し新人に分けてほしい」

真剣な面持ちで言われたりする。その気持ち、よく分かる。わたしもかつてはそうだった。何でわたしのところだけに仕事がないの、とひがんでみたり、恨んでみたりした。友人たちもみんなおんなじことを言っていた。「仕事が欲しいよ」とわめていた。

確かに仲間うちでは、ダブルで仕事をしている人は多い。三カ所、四カ所、掛け持ちで仕事をしている。

相談員をする傍ら、体操のインストラクター、講師にモニター活動。専門学校の講師を掛け持ちしながら、消費者問題のフリーライターで頑張る人。テレビの相談員に、講師、ライター、プラス法律事務所働く人。みんな全開パワーで頑張っている。

でも、「いいなあ、うらやましいなあ」と言うことなかれ、どの人も一生懸命頑張って、努力してきたのだ。仕事を得るために自己投資をした人。無給のボランティアを経て仕事と巡り合った人。みんなそれな

りに苦勞をしてきた。

それに、ダブル、ダブルで働くにはそれなりのわけがある。第一の理由は税金だ。ちよつと仕事をすれば、百万円の非課税ワケに収まらなくなる。そうなれば、夫の扶養家族から外されるので、健康保険も国民年金も自分で払うこととなる。さらに、所



得税、住民税などなど、出ていくお金は増える一方だ。収入が百万円を出たが最後、うかうかしていられないのだ。税金やら社会保険などで引かれる分はちゃんと稼がなくては、一プラス一は二にならず、逆に赤字になってしまふ。まさに本末転倒。これでは何のために働いているのか分からない。

それにフリーの仕事というのは、突然何の前触れなしに仕事が終わってしまったたり、ドドーンと急ぎの仕事が入ったりして予測がつかない。だから仕事があるうちが「華」と受け止め、仕事がくるうちにしっかりと稼がなくてはならない。断ったりしたら、仕事はこなくなってしまうからだ。ただ単に、働いているのではない。その人なりの働く理由、働かねばならないわけがある。やみくもに古い者たちが仕事を占領しているのではないのだ。

パートにアルバイト。働く主婦は確かに増えた。世の中少しずつ変わってきているけれど、多くの主婦はパート減税百万円の選択をいまだに迷い続けている。扶養家族でいような、破れかぶれで仕事のワケを

広げてしまおうか、と悩んでいる。

百万円のワクにこだわれば、おのずと仕事は減らさなくてはならない。と、いうことは必然的に経済的自立から遠ざかってしまう。こうなったら、むしろ非課税ワクにとらわれず、自分のために働いて、自分の財産をしっかりつくっていったほうがいいとも思える。

そのためには、何と言っても、働き続けられる職場の確保と税金や社会保険など、社会資源の充実が必要だ。つまり、主婦パートとしての位置ではなく、働く女性としての位置が大事なのだ。百万円の非課税ワクを取り払っても、しっかりと働ける環境づくりや、今の社会保険の見直しなどを考えていかなくては、いつまでたっても、堂々巡りである。

非課税ワクは女たちを扶養家族のまま主婦パートとして、安く上手に使いたいがための策謀ではなかったのか。ふっとそんな気がするの、生来のひがみっばさか？はたまた考えすぎか。いずれにしてもこの問題、じっくりと考えてみる必要がある。

奥さんから外さんの間で

東京都葛飾区 平塚 幸子

平均寿命が延びた今、四十歳と言えば人生半ばである。よき夫と、まあまあのお嬢二人に恵まれ平均的な人生を歩んできたと思

っている。

でも一つ、今になって心残りのことがある。それは会社に属したことがないということである。学校を卒業後そのまま職員として働き、恋人であった夫の転勤が決まったので結婚した。

その後、三度目の転勤で夫は今、イギリスに住んでいる。子供の進学で八カ月前に帰国した私は、現在世帯主である。夫と別々に暮らすことによって今まで分からなかったことが分かったり、見えなかったことが見えてきたり……四十歳になったということも原因の一つだと思う。

ある日子供に言われた。

「お母さんは暇ね」と。私はうろたえてしまった。子供たちは高校一年生、中学一年生とそれぞれ学校にも慣れ、自分のことに忙しい。私だけがのんびりしている。

帰国直後は引越しの後片付けで忙しかっていたが、それが終わるとテレビばかり見ていた。そして飽きると今度は読書。新しい本を買うと高いので、古本屋で探してきた本を何冊も積み重ねて毎日座り込んで読んでいた。さて次は外へである。デパートを歩き、映画を見て……. どんどんお金は出ていく。ストップをかける夫は海外で目が届かず、私は自由にしたいことができず。もっとも限度はわきまえているけれど。

ちょうどこのころ区の主催する文章教室に参加した。そこで知り合えた人たちの年齢の幅の広いこと。もちろん色んな趣味、特技の持ち主が多い。残念ながら、私には車の運転免許しかない。茶道、華道、フラワーアレンジメント、水彩画、テニス、ゴルフとすべて中途半端のままである。でもこれらはまた先でチャレンジできる。文章教室で知り合った人たちの話を聞いて自信を持った。そこで今しかできないものは、と考えた。あった。それは就職だ。子供のことを考えるとフルタイムは無理だし、私の自由な時間も欲しい。週四日ぐらいならとあるスーパールのパートタイム募集に生まれて初めて履歴書を送った。

数日後、入社していただきますと返事がきた。あと何日かの自由人である。夫の帰国は十一月末ごろになりそうだと決まったのは、最近である。夏休みを利用してイギリスへ行ってきた。夫の様子が心配だったし、私の就職のことも相談しなかったからだ。夫は「大変だろうけど人生勉強になるから」と賛成してくれた。

今までは、夫を通して会社の内部をのぞ

き見するしかなかった。今度は対等には思わないけれど、今までなかった内容の会話ができるのを楽しみにしている。いたたくお給料の半分は学費に化けてしまうかもしれない。半分は私の現在の趣味のパッチワークに使いたい。たまには私のお金で家族と外食したい。まさにとらぬタネの皮算用の真っ最中である。こんな状態ではんとうに仕事ができるのかしら？ 働く以上楽しくやりたい。ほかの人に迷惑はかけたくない。そして家族、特に子供のことは最優先に考えたい。

仕事と子育ての日々

下の娘が幼稚園に通い始めて半年がたつ……。ついこの間までの子育ての日々が、遠い昔のことのように感じられる。子供を連れて公園に行ったり、お友達同士でお互

雇ってくださる方ごめんなさい。ちょっといいかげんかもしれないけれど、一生懸命働きますから。求人広告の年齢制限でひっかかる前に経験してみたい。

以前に比べると年齢制限が上がつてきているのは、平均寿命が延びたせいなのか、昔の年齢より肉体的にもみな若くなっているのか、それとも単なる求人難なのかしら？

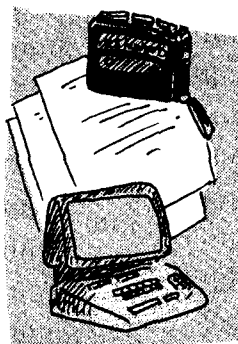
今までの人生はいつも受け身だった。この辺で積極的に自分の人生に取り組んでほしいのではないか、人生の転機である。

横浜市緑区 板山美枝子

いに行ったり来たりして、子供を遊ばせながらのお茶飲み話……。そして今、私は朝二人の子供を幼稚園と小学校へそれぞれ送り出した後、一人机に向かう。

二年前から始めた編集の仕事。幼児を抱えて身動きのとれなかったころは、テープ起こしやワープロ打ちくらいしかできなかった。子供から少し解放された今は、執筆、レイアウトなどの仕事もこなせるようになった。仕事としてはこちらのほうが断然面白い。

私はひとつのことに熱中したら、それ以外のことはすべて忘れてしまうという性格なので、仕事に取りかかると時間のたつのを忘れる。子供の「おなかすいたァ」の声で、ハッと我に返るともう夕方。慌てて夕食の支度に取りかかる。食事を終え、子供たちをふろに入れると八時過ぎる。子供たちがパジャマに着替えたころ夫が帰宅。「じゃ、子供たちの歯を磨いてやってネ」と言うと、私は再び机の前に座る。三歳の娘は今でも時々添い寝を要求するが、近ごろは幼稚園での疲れが手伝ってか、布団に横になるとすぐに寝てしまう。八歳の息子に至っては、一日中パワフルに遊びまわるので布団の中でももの五分ともしない。かくして、二人の子がスヤスヤと寝息をたてるのが九時半ごろ。夫は台所で一人、みそ汁



を温め直して夕食を取っている。

「今日中にこの仕事終わるかな? 今夜は徹夜かな」などと叫びながら机に向かっている私に、「そんなに自分の体を酷使して、一体何が面白いの?」との夫の声。「何をおっしゃるウサギさん、あんただって不良ばかりのどうしようもない学校でよく教師なんかやってられるよ」と心の中でつぶやく。

地獄の一週間が終わり、ようやく原稿を納めた日の午後、軽い疲労感とすがすがしい解放感に浸りつつ電車で揺られる。駅から出て時計を見る。「あゝ、幼稚園のお迎えまであと十分」解放感に浸っていたのもつかの間、すぐさま家に向かって早足で歩き出す。「あゝ間に合った。お帰り」娘

はうれしそうに私の顔を見上げた。

私は人生をかなり勝手気ままに生きてきた人間だと自分でも思うが、子供が生まれてからはそうはいかなかった。子育て真っ最中は、ほんとうに限られた世界の中で生きなければならなかった。家の中で、子供と二人でじっとしていることが嫌いな私は、とにかくあちこちへ出かけた。遠出しやすくするためにクルマの免許も取った。友達をつくるために育児サークルもつくった。育児講座と聞けば、どんなに遠くてもせっせと通った。幼児教育に関心を持ち、何万円もの教材を幾つも買い込んで子供に試みた。育児書は片っ端から読んだ。育児以外に何もすることがなくなった私は、いつの間にか子供の中に自分の持てるすべてを投入しようとしていたのだ。結果、育児に対する気負いが大きくなって、子供にはかなり厳しく当たってしまった。今考えてみれば、子育てだけに自分のすべてをかけたようとしたこと自体がおかしかったのだ。私は、知らず知らずのうちに母性神話に取り込まれ、その中に飲み込まれてしまったのかもしれない。

二人目を生んだころから、ようやく肩の力がとれた。それとともに、仕事というもう一つのエネルギーのはけ口が得られたことで、子育てが楽になったように思う。世間一般では、仕事を持ちながら子育てをしているお母さんは大変だろうと思われがちだが、実際は逆だと思う。子育て以外に自

分のエネルギーをぶつけるものがないお母さんは苦しくてつらい。子供をいじめ、その罪悪感で自らを傷つけていく日々……。それが私の最初の子育てだった。仕事を始めてから、私は元氣を取り戻した。まだまだ自分には何かできる。そんな気持ちだ。

根強く残る「女は家事・育児」という意識

東京都中野区 後藤 幸子

先日の日曜日、地域のお祭りで、小二の娘と同じ学童クラブに通っている友達のお母さんと久しぶりに会いました。彼女とは学童クラブの行事で知り合いになったのですが、最近行事に参加していないのが気になっていました。

「このごろ、学童の行事に参加していないようだけど、どうしたの？」

「学童には籍を置いているけど、子供が最

近行っていないの。私が仕事を午後一時までにしたから」

「ああそれで。でも何かあったの。土曜日も五時まで預けていたのに」

「子供が大きくなると色々あるわね。もう小学三年生でも万引きをする子がいるんですって。うちは万引きじゃないけど、色々あってね……。それで仕事を一時までにしたの。辞めようかとも思ったんだけど、午

前中は子供がいなし、家賃も高いからね」

話をしながら、夏休み前に中二の息子のことで、学校に呼び出されたことを思い出していました。学校からの帰り道、「私が仕事をしているから、子供が問題を起こすのかしら。辞めて家にいたほうが子供にとってはいいいのかもしれない。でも、仕事はしたいし、夫の扶養家族にはなりたくない」などなど、またいつもの思いがよぎってきました。

その夜、夫と息子と話しているとき、「やっぱり私が仕事をしているから、こういうことになるのかしらね」と聞いてみました。息子は「お母さんの仕事とは関係ない」夫は「おまえが家にいても、子供が一步外に出れば、何をしているか監視するわけにもいかないだろう」という返事でした。

第三子の妊娠中にそれまで続けていた仕事を辞め、専業主婦になりました。そのときは「女は家事もきちんとして、そのうえで仕事をしなければ」という思い込みで、相当疲れての退職でした。その後、第三子

を出産し七年間の専業主婦の間に、わが家は「夫は仕事、妻は家事・育児」という性別役割分業がしっかりと根付いてしまっていた。その間、私は「働きたい。夫の扶養家族になりたくない。夫にも家事・育児をしてほしい」という思いがだんだん大きくなりました。しかし、子供にとっては母親がそばにいるのが一番いいという思い込みもあり、忙しい夫には腹立ち紛れの愚痴しか言えずもんもんとしていました。

そういうときに地域の女性会館で、保育つきで連続の話し合い講座を受け、自分たちの今の状況を話し合う機会を得ました。講座やその後の自主グループ活動で仲間と話し合う中で、「性別役割分業はおかしい、家事や育児はできる人がやればいいのではないか。子供は母親だけでなく、保育者やお友達との関係の中で育つんだ」ということに気が付きました。そうすると、専業主婦で私ที่บ้านにいれば、家事・育児をする時間は圧倒的に私のほうが多いわけだから私がやるのが当然ということになります。こういう夫や子供との関係を変えるためにも仕事をしたいということを家族と話し、三

番目の子を保育園に預けて再就職しました。

私が忙しくなったことで、夫や子供も少しずつ家のことをするようになり、この五年間に関係は変わってきました。しかし、子供に何か問題が起きたり、病気をしたりすると、すぐ、「やっぱり私が仕事をしてい

退職しようか

今、私は退職願望に取り付かれています。

親しい友人に言くと、「もったいない。三十年近くも積み上げてきた専門職の公務員を五十歳で辞めるなんてとんでもない」「今度働きたくなったらって就職口はないんだから」とか「これからお金は幾らでも必要なのに考えが甘いヨ」とみんな反対する。でも疲れきってしまって、少しのんびりしたい。確かに未っ子はまだ高校生だし、

て、家にいないから」というふうに思ってしまう。夫は絶対「自分が仕事をしているから」とは思わないのに。自分の中に根深くある、「男は仕事、女は家事・育児」という意識からなかなか抜け切れません。夫や子供にとっては、私が働くということとはだんだん位置付いてきたように思うのに。

名古屋市長 山本もと子

ローンも相当額残っている。でも上の二人が就職すれば何とかなるだろう。結婚資金まで親を頼りにするなどは宣言してある。老後の心配などしたらきりが無い。今までだって行き当たりバッタリでやってきた。これからだって……と大変さがちっともピンとこない。

三人の子供を産休明けから共同保育所へ預け、学童保育の運動に苦勞しながら働き



続けてきた大きな理由の一つに、夫婦間の愛情がなくなっても経済的理由から別れられないなんてことの絶対ないよう、「離婚の自由だけは確保しておきたい」ことがあった。そしてしばらく前まで、私は離婚願望に取り付かれていた。「私一人だけなら仕事をもとのびのびと、楽しみながら集中してできるのに……夫も子供たちも私がいなければ日常生活を真剣に見直すのではないか。いらいらしてばかりの妻、母親ならいないほうがいいかもしれない……」などなど。

でも今は「もう離婚できなくてもいいから専業主婦になって家庭を整えたい」とい

う気持ちが強くなってきた。

夫はもう何年も、とてもひどい仕事中毒症にかかった企業戦士、幾ら注意しても改める気配なし。過労死は他人事ではない。共働きでは十分でなかった健康管理に目を光らせ、彼のと八年後に迫った定年時に粗大ゴミとか産業廃棄物とか言われるものにならないため、色々な働きかけを本気でしなければ……。

子供たちはそれぞれの道を歩き始めていくけれど、いつも慌ただしい、手拔きの母親しか見ていないので、家庭の安らぎ、ぬくもり、家族のきずなとか、家事のこなし方など教えないといけないと思うことがたくさんある（これから教えることが可能かどうか疑問はあるが……）。

私自身、無理をして定年まで頑張ったとしても元氣を使い果たしてしまっ、「時間はあるけど何もできなくなっていた」では困るのだ。一週間に一冊は読めていた本が近ごろはメガネをかけても根氣が続かないし、運動不足で肩凝り腰痛に悩まされるので山歩きをすればひざを痛め、水泳ならばとプールに通えば消毒薬に顔がかぶ

れ、今までなかったアレルギーまで出るようになり、シミ、シワ、白髪など加齢現象として仕方ないものも加わり悲しいことばかり。「今が一番つらいときなのよ。更年期を乗り越えればまた元氣が出るよ」と励ましてくれる先輩もいるけれどほんとうだろうか。しばらく休養して心身にリフレッシュできたならこんな後ろ向きの考えは消え、家族への愛情に満ちあふれ、仕事へも意欲的に立ち向かえる私になれるのだろうか。でも忙しい職場ではつきりした病氣でもないのにそんなことは不可能。今やりかけの仕事が一段落したらやっぱり辞めよう。

それとも退職したらすぐに専業主婦に向かない自分を発見して後悔することになるのだろうか。私がもしも男性だったなら、こういうとき、専業主夫になろうと考えるだろうか……。結婚するときにも、出産のときにも、子育てで大変なときでも仕事を辞めようなんて一度も考えたことがなかったのに、残念な気持ちはするけれど……。色々迷い、悩みながら、でも今度は辞めることになりそうだ。

嫁の生きがい

奈良県天理市 岡井美代子（67歳）

【明治生まれの姑の場合】

姑が嫁いできたのは大正三年、一人息子
の兵役を前に、家の存続のため跡継ぎが欲
しかったからだという。体格のよい姑は、
奈良盆地の中心、水田の村より東の山麓さんろくの
村へ人力車に揺られ嫁いできた。口も八丁
手も八丁の女丈夫であった。

姑は、東の山畑から盆地を見下ろして
は、実家を思い出していたようだ。手仕事
をしながら、嫁の私に当時のことを聞かせ
てくれた。「わしの実家ではな、ごっつお
（ごちそう）は男も女も一緒やったけど、こ

この家は男だけが別や。わしらには魚も当
たらへん。わしは何でもたくさんにしても
ろてきたさかい、寂しかったで。お客さん
にばかり振る舞うて、女にはなしや。男ば
かり幅を利かす細かい家やった。肉や魚は
とつきより（特別なとき）だけや、たまた
まの祭でも「肉ぎょうさん買うてきたか
ら」とお舅さんが娘夫婦を呼んで、わし
はかけらも食べへんだで。せやからわし
は、食べることに眠ることが満足でけた
ら、どんなことでも辛抱でけると思うて
た」

日の出とともに起き、日の入りまで働き

通す農家で、みな給仕の間に嫁は食事を
済ませ、ふろは近所の人がもらいに来た
後、腰までしかない汚れた湯に浸り涙をこ
ばすのだった。

何でも自給自足の農家は、現金の出費は
少なく、生産に励んだ。主な現金収入は山
麓を開墾した畑に桑を植えての養蚕であっ
た。お茶を摘み、米や麦、綿まで栽培して
機も織り、みそしょう油の手作りまで、嫁
の仕事はどんなに煩雑で忙しいことだった
ろう。人一倍働き者で男勝りの姑は、そこ
の姑に子供を頼み、精一杯、働きに働きぬ
いた。

「蚕さんはほんまにえらかった。蚕部屋も母屋もわしらの寝るところまで畳を上げて蚕棚をつくり、ゆっくり眠るところか納屋の隅で、ちよこっとうずくまるだけの夜も何回あったかしれへん。ええときはええけど、蚕が病気を起こしたらなんぼ働いていたかでもうあかん、気が気でなかったで。あのときの気持ちは忘れへん。もう蚕飼いはいらん苦労やったで……。せやけどな、繭が高う売れるのも蚕でなけりゃあかんね。宏（夫）を東京の学校へやるかて、月四十三円送れたんも蚕さんのおかげや。お舅さんは村の役ばかりで仕事せえへんの、蚕の金、山林にばかりつき込んでしもたときは、情けなかったで」

明治、大正のころ、農村の嫁は労働力であり、男女差別の中に人間性を無視した封建的な制度に押しつぶされるような悲しい時代であったことをひしひしと感じる。

姑たちの苦勞した養蚕業も時代とともに廃れ、三間続き二階建ての、暖房用温床や煙出しまでついた蚕部屋は、女の涙を秘めて今は納屋として道具入れになっている。桑山から日に何回となく桑を摘み込み、大

きなかごに入れて背負い、蚕の桑入れに追われ続けたという、おふるほどもあるその大かごは、重くてしんどかった女たちが名付けたのであろうか、「しんどかご」と呼ばれ、今もなおぎっしりと並んでいる。

「わしがおなか大きくなって麦こきしてたときや、『じゃがいも煮えたで、男衆に内緒で食べとき、女は給仕に追われて食べられへんよって』としよう油で煮たホッカホッカの芋を、小皿に山盛りにして持ってきてくれたええおばあちゃんやった」と優しくかった姑の話をしながら、「おまはんもおなかついたら、芋なっと、飯なっと、生まれるやのたためたと食べや」と氣遣ってくれた。温かい心の姑に仕えた私の姑も、優しい人であったが、自分の嫁時代の気持ちを私もそっくりそのまま持っていると思ひ込んで疑わなかった。時代も経過し、考え方も生まれた環境も違う私は、そのまま姑の願う嫁ではなかったのだが。

姑は農業を一筋に励み、桑畑をみかんやかきに植え替えて、果樹が大きくなるのを生きがいに、太陽とともに寝起きた一生であった。

【大正生まれの私の場合】

戦中戦後、姑は家と農業を背負い続け、やっと復員した長男に都会からの嫁を迎えた。

昭和二十二年、嫁の私に姑は優しく、慣れない土地での心労をいたわってくれたが、私の心は毎日が空白であった。目に見えぬ何かに縛られているような生活に、こんなはずではなかったのに、自分を生かした人生が過ごしたい、その場が欲しいと心に叫んでいた。

姑は東京から遠い地へ来た私をかばうつもりで大事に箱入り嫁にしてくれるのだが、姑の方言さえも分からず寂しさは募るばかり。近所の付き合いも一切姑が対処し、私は家から出ることも、家の人以外に口を利くこともなく過ごしていた。

大都會の商家で大勢の人の出入りの中に育ってきた私には、それは堪えられぬ寂しさだった。そして自分が自分のない人形であることがやるせなかった。

ある日「ごめんください、回覧板です」と隣の若嫁さんが玄関に立っていた。私は

隣に一週間ほど前来たばかりの人が、もう我が家に来られることがうらやましく不思議な気がした。私には隣家へ行くにも、外へ出るにも姑のひごの下に厚い壁があった。世間に出しても格好悪くないように、封建的な家風や世間体のために自分の自由な行動は許されなかった。

隣の嫁さんに羨望を抱くとともに、言葉の分からめ寂しさより一人前に認められぬことが情けなかった。ただおとなしく素直でなければならぬ嫁の立場に「自分の自由が欲しい」と思う私のさやかな望みも、時代の違う姑には、そのずれも分からず、私も家の嫁としてよき嫁になるべく堪えていた。

夫が「大阪へ行く」と家の中から出られぬ私を連れ出してくれたのは、嫁いでから一年半経て、夏期ボーナスのときであった。赤ん坊を抱き、心齋橋を歩いている白黒のスナップ写真が一枚、今もアルバムの中に収められている。当時繁華街には街頭写真屋がいて、撮ったものである。楽しそうなデートの姿は、夫と手を組むこともなく寄り添うだけのスナップだが、若いとき



の純情さがうかがえる。

私はうれしかった。ウインドーの流行服に目をやり、買ったかったものを買った。り、こんな服を、あんな服をと頭に描きつつ、好きな布地選びのできる楽しさを満喫していた。夫の愛情を存分に受けて、昼食は好きな料理に舌鼓を打ち、赤ん坊のおしめを替えながらも一日の外出は心の洗濯であった。和んだ気持ちで両親への土産を手に戻っていた。

農事のない雨の日、そして夜私は子供の寝顔を見ながら、出来上りを楽しみにミシンを踏んだ。もし好きな洋服で一生過ごせたらどんなによいかと思いつつ……。

学校時代、洋裁にはAの評価も多く、手芸にはデザイン賞をもらったことなど懐かしく思い出していた。あのころは将来デザイナーになりたいと夢を描いていた。その夢も女専の授業も戦争で中断され、戦後成り行き任せで農家へ嫁ぐことになり、いつの間にか母になってしまっていた。もう大きな夢は描けなくても、この子たちには自分の力を存分發揮できる女に育てたいと、我が夢を子に託し、服を縫っていた。私が夢中になるのを見て、姑は農業に専心してほしいと、私が洋裁をすることを嫌ったが、私は「洋裁だけは取り上げないで、百姓も精一杯するから、これだけが私の生きがいなの」と夢中で姑に懇願した。

長女が幼稚園に入園する日、手作りの服を長女と次女にそろいで着せ、私は娘以上に胸を膨らませていた。はしゃぎ回る長女よりも、初めて一人前の母親として認められ、世間に一人の女として行動できるうれしさに、大空をかける鳥のような自由さを味わっていた。友達もできた。

私はこうしてようやく、この土地に生きられる自分を見いだしたのだ。

連載③

わが青春の宝塚

東京都三鷹市 豊城 智子



初舞台。ここへくるまでの苦労は、本文をごらんください。

宝塚の酸っぱい日

「ねえ。宝塚って厳しいんですよ」

宝塚のファンの人はもちろん、嫌いな人、一度も見ただけのことのない人でも、宝塚の厳しさだけは聞いたことがあるという人が多い。

その厳しさをぎゅーっと圧縮して缶詰にすると予科時代になる。予科の一年を一言で言うことはとてもできないが、私の今までの人生の中で、最もつらい思いをした時期であり、でも一番充実していたときかもしれない。

朝は六時前に起きる。洗面、身だしなみ、朝食。六時半には寮を出る。この身だしなみがすごい。予科生はとにかくダサく、みっともなくしていることが一番である。もちろん、化粧はしない。まゆ毛も整えてはいけなくて、元々毛深い私などは、ゲジゲジまゆがつながり一本になってしまっている。

髪の毛には、「上級生にお辞儀をしたときに、一本でも垂れたら失礼に当たる」という理由から、まるで剣山のよ

うにピンが止められている。ショートのカットの子は、たいてい三十〜四十本は止めていたと思う。少しでも伸びてきたら二つに結ぶ。一結びでも三つ編みができる長さになったら、必ず三つ編みをする。

私は、身長が百五十八センチしかないで、当然、女役になるわけである。なんとか髪を伸ばし続けたいと思うのだが、朝の支度の大変さに、ついいつも挫折してしまう。それに、私の髪は硬い、太い、黒い、多いの四拍子そろっているの、二つにくくれば後ろにピンと立って、朝顔みたいに開いてしまし、三つ編みにすればくし団子みたいになってしまつて、ちっともかわいくないのである。

徹底した掃除

六時半に寮を出て、二列縦隊で行進のように歩いて六時四十五分学校に着く。校門を入るときには、立ち止まつてお辞儀をする。

予科ルームという、予科生全員の控

え室のような部屋で、もう一度身だしなみの点検。バッジは曲がついていないか、校章は正しいところに付いているか、髪の毛はハバリと垂れてこないか、お互いにチェックしあう。これは、舞台に出たときに役に立つという。つまり「予科ルームは楽屋で、一步廊下に出たらそこは舞台だと思え」というわけである。

七時から掃除。私は講堂分担だった。この掃除がともかくすごい。木の床なので、一本一本の溝に埋まっているほこりを、くぎで押し出す。ほうき、モップ、ほうき、ぞうきんがけ。その後に何とガムテープ。これで、ペタペタとほこりを取るのならまだ分かるが、これで目に見えないちりをふき取るのである。窓の棧は、絵筆を使う。毎日一時間半、徹底的に磨きまくる。

音楽学校は、つたの絡まる非常に古い建物なのだが、そこらじゅうがピカピカである。ガラスが入っていないと勘違いして、玄関のドアに頭をぶつけた父兄がいたというくらいだ。真鍮の



入学式。タカラジェンヌといってもまだダサイ。

ドアノブや、真っ黒なピアノには顔が映る。鏡の代わりになりそうだ。

それでもしょっちゅう本科生には「ご注意」を受ける。これも修業の一つである。タカラジェンヌが、よい嫁になれるという伝説もここからきているのだろう。

ところが私は、ここまで毎日掃除を続けたのにもかかわらず、いまだに掃除が大の苦手である。あのころやりすぎたせいに違いないと、自分勝手に言い訳をしている。

「注意」の連続

掃除の後、授業が始まるまでの三十分。ひたすら廊下に並ぶ。本科生に謝るためである。各自、必ず二つや三つの「ご注意」を受けている。掃除で、鼓笛で、個人で……。謝る理由は次から次へとわいてくる。

個人の「反省」で一番多いのが、「無視」というものだった。町のどこかで本科生を見かけて、あいさつをしなかったというのである。こんなに毎日、



「ご注意」を受けている本科生をだれがわざと無視するだろう。そんな度胸はだれにもない。

だけど、本科の見付け方がまたすごいのである。本科生が電車に乗っていて、予科生が踏切に立っている。動いている電車の中は外からは見えないが、乗っている本科生からはしっかり見えているというわけで、翌日呼び出しがくる。あいさつをしなかったというわけだ。その件があって以来、予科生は電車を見るとひたすら頭を下げ続けた。一事が万事こんなふうだから、廊下はいつも超満員だった。

「反省」は、一旦三回朝・昼・放課後。本科生がもうよろしいと言うまで、同じ件で何回でも謝り続ける。本科が黒と言えば、白い物でももちろん黒。どんなに悔しいと思っても、「ご注意をいただきます有難うございました」と言わなければならない。

この授業

授業が始まるとほっとする。授業中

は上級生だっが入ってくるわけにはい
かないからだ。芸事の一つ一つは、好
きで入ったわけだから当然楽しい。と
ころが、これもだんだん苦痛になっ
てくる。

私は六歳からバレエを習っていた。
キャリアは十二年である。私の習っ
ていた吉祥寺のけいこ場では、かなりベ
テランだったので、たまには先生の代
わりに見本なんかもやったりして、け
っこううまいほうだと思っていた。

ところが、ここでは全国のパレエス
タジオで、一番だと思っている子が集
まっているわけである。自分がいかに
「井の中の蛙」だったかを思い知らされ
る。

音楽は、高校二年から始めた。キャ
リアはわずか二年である。しかし、下
手だから、できないから、一生懸命勉
強しなきゃと思っていたことが効を奏
したのか、日に日に音楽の成績は上が
っていった。

一度もやったことのない日舞には、心
底苦勞させられた。小さいころからや



っていたという上手な人が踊るのを見
るのは大好きだが、私にはまったくそ
の才能がなかったようである。首をか
しげれば違うと言われ、足を出せば違
うと言われ、日舞の時間が恐怖だった。
花柳と藤間と重森、三つの流派をほと
んど同時進行で覚えるわけだから、頭
の中はこんがらがってしまう。

ほかに、演劇、タップダンス、ピ
アノ、琴、果てはお茶に至るまで、毎
日が芸事の連続である。

寮生活

学校から帰ると寮生活が待っている。
寮の規則も同じく大学ノート一冊分く
らい。おふろの入り方から、ドアの開
け閉め、洗濯機の使い方、などなど……。

おふろに入るためには、三十くら
いの規則があって、その一つ一つをクリ
アしていかなければならない。疲れを
取るために入るおふろで、神経を遣い
すぎて、疲労困憊してしまふ。予科生
は一度に四人しか入ってはいけない規
則なので、本科の帰ってこない早い時

間に入りたいと、おふろの順番を取るために走って帰ったりしたものだ。

ともかく、寮内を歩いていて、スリッパの音がしたといつて怒られるのである。「うるさい」ではない。「音がした」なのだ。リノリウムの床で、スリッパの音を一切たてないことは至難の業である。予科生は、足の裏に目一杯神経を集中し、日舞のすり足のようにして歩いた。まるで忍びの者である。

寮生活は、前述のとおり八畳の洋間に同期生と二人。ところが、私のパートナーは、それまでの私の十八年間の人生では、一度もお目にかかったことのないタイプだった。恐らく向こうも面食らったに違いないが、幾ら話しても理解しあえない相手がいるということとを、初めて知った。一緒に生活するということは、大変なことである。

十八歳で初めて親元を離れ、最初のうちは希望だけで突き進んできたものの、一カ月たち、二カ月たつと、だんだんにホームシックにもなってくる。東へ向かう飛行機を見かけるたびに、

「あれに乗ればたった一時間で東京に帰れるのになあ」と、東京出身者は集まると涙を流したりした。

初めての退学音

そんなとき、同期生の一人が学校を無断欠席した。寮にもいない。

朝四時ごろ、非常階段から寮を抜け出して、空港のロビーで一番機を待って、東京に帰ってしまったらしい。彼女は成績一番で入ったので、色々つらいことが重なったに違いないが、それにしてもである。

私は受験前から、彼女と同じけいこ場だった。みんな一緒に一生懸命おけいこに通った仲である。あんなに苦勞をして、あこがれの宝塚に入ったのに、わずか二カ月弱で彼女は辞めてしまった。二十六倍の倍率をくぐり抜けるためには、彼女のために二十五人もの人が、泣いているのである。やりきれない気持ちが残った。彼女が辞めてからも、退学者と病気で留年した子がそれぞれ何人か出て、本科に進んだのは

入学時から七人減り、四十五人だった。

洗濯機事件

入学して二カ月ぐらいたったころ、春の遠足があった。予科は日帰り、本科は一泊である。ということは、寮に本科がない日が、一日あるということだ。予科生は狂喜乱舞。スリッパの音をばたばたさせて歩いた。おふろだって、悠々入れる。

いつもは小さくなって使っている、憧れの洗濯機だって使い放題である。毎日のレッスンで、レオタード、浴衣、足袋、襦袢。どれくらい洗濯物が出るだろう。なのに、寮の予科生が使える洗濯機はたった二台だった。

この日は、内緒で、本科用の二台の洗濯機も使ってしまった。普段は触ることさえできないものである。

私の順番が回ってきたのは、夜の九時半ごろだった。たった洗濯物は、洗濯機二台使わないと間に合いそうになり。私も当然のように、予科の洗濯機を一台、本科の洗濯機を一台、二台を

同時進行で回した。

十時半の門限になると、寮長先生が回ってきた。

「いつまで洗濯しているの。消灯過ぎても洗濯していたって本科に言うよ」と怒られ、私は慌てて、本科の洗濯機を点検し、水の一滴までふき取って、証拠を隠滅した。つもりだった……。

ところが、一回で脱水できなかった二、三点の物を、もう一度脱水にかけていたことをすっかり忘れていたのだった。寮長先生に電気を消された真っ暗な洗濯室の中で、脱水槽の中には、真っ黒なレオタードがへばりついていたらしい。



本科になったのでパーマがかけられた！うれしい！

翌日、昼ごろ、早めに旅行から帰ってきた本科が洗濯を始めた。脱水しようとする何とそこには、黒いレオタード。しかもご丁寧にも、「予科Bクラス三沢」と大きな名札付きである。

休日で、部屋にごろごろしていた私は、突然のノックに飛び出した。本科生が洗面器を持って立っている。

「ねえ。これなあに」

ガン!!

逃げも隠れもできない。私のレオタードが、洗面器の中で小さくなっていた。

結局、私のほかに本科の洗濯機を使った者まで全員呼び出され、こっぴど怒られた。後で、仲のよかった本科生にこっそり言われた。

「毎年、この時期必ず予科生は本科の洗濯機を使うのよ。証拠さえ残しておかなければ、本科も黙認してくれたのに……」

後の祭りである。

— つづく —

(写真提供・筆者)

(え・小宅昌枝)

あるピアノ教師

①

千葉県銚子市 塚本 真理

六年ほど前から、私はピアノ教師として働いている。音大出身でもない専業主婦からの転身は並大抵でなかったが、私の個性を生かせる職業なのである。

私が子供のころ、今から三十年以上も前、ピアノ学習者は、都内の住宅地の小学校でも一クラスに一人か二人だったように思う。ここ数十年の間に、ピアノ学習者の割合は飛躍的に伸びた。一方で、ピアノ教師も毎年、過剰出現している。

しかし、大都市部とは裏腹に教師不足の地域には、「え？あのヒトが？」というような先生もいるので、要注意。先生の選択を誤ると、被害を受けるのは子供で

ある。

ピアノ教師は大きく二種類に分けられる。自宅でのみ教えている独立教師と、組織（ヤマハ、カワイなど）に所属する講師である。

ネームバリューのある音大出身者ならば、個人でピアノ教師を名乗って十分やっつけていけるわけで、自分の取り分を減らしてまで組織に所属する者は少ない。組織に集まるのは、その理念に共鳴する者か、自分一人では生徒を集めるのが難しい者ということになる。

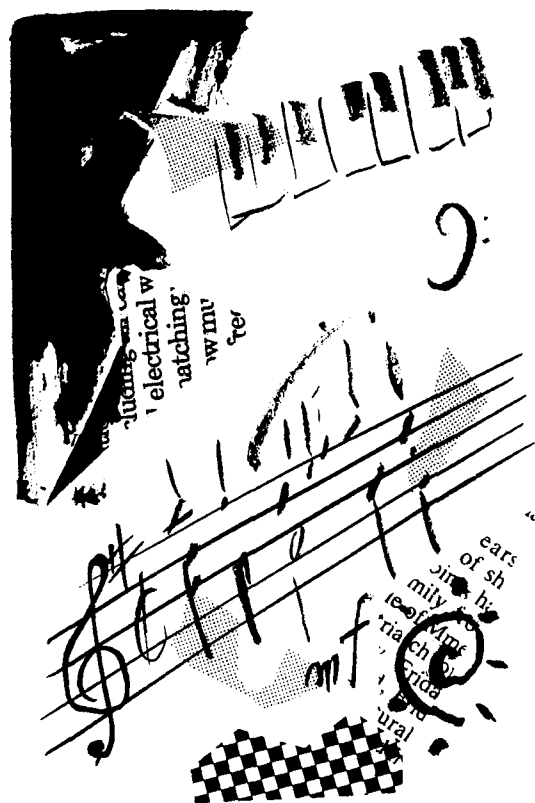
生徒を確保できるかどうかは、本人の能力や出身校ばかりでなく、地理的環境

やその土地に住んでいる年数などによっても大きく左右される。夫の転勤で引越さざるを得ない場合など、全国ネットの組織に所属するメリットは大きい。

適性について

私は学生時代から、教えることは嫌いではなく、ある外国語の教職課程も履修したし、バイトで塾の先生や家庭教師もした。しかし職業としての教師になるつもりはまったくなかった。当時の私は、企業に就職するほうが肌に合っていた。

都市銀行の窓口係を振り出しに幾つかの職業を経験し、結婚退職して専業主婦



となった。親とは離れた核家族で、子供が二人生まれた。

住宅事情が許すようになると、親の家に置いてあったピアノを引き取った。

今でこそ周囲には家がちらほら建っているが、十年前は野中の一軒家で、何度もきじや野うさぎを見かけた。最寄りの駅は歩いて二十分の無人駅、来る電車は、昼間は一時間半に一本の割である。

これは今も変わらない。

あんな寂しいところによく住めるわねと、友人たちはあきれた。しかし私は、野鳥の声とススキのざわめきに囲まれたこの場所が気に入っていた。自分の車を持たなかった最初の五、六年は、買物や子供の医者など、想像を絶する不便さだったけれど……。

主婦稼業に明け暮れる毎日、表面は大

過なく過ぎていった。二歳違いの子供たちは、母親が勉強や読書や自分の想念に集中するのを嫌がり、ことごとくじやまをした。豊かな自然環境に囲まれた母と子。はたからは心和む風景かもしれないが、私の中では何かが限界になっていた。

あれは高校一年のときだった。校内演奏会でショパンの幻想即興曲を弾いた私に、クラスメートが感心したふうにこう言った。

「よくまあ指が動くわね。どうしてあんなことができるの？」

しかし私にしてみれば、家中をいつも磨きたててきちんと整とんしている人こそ、驚異的である。どんな訓練を受けても、私には絶対に不可能だと分かっているから。

つまり、ことは適性の問題なのである。

大人になれば、好きなことだけやっただけで生きていけない。しかしまた、嫌いなこと、不向きなこと以外に出席のない人生ほどむなしいものもあるまい。そして

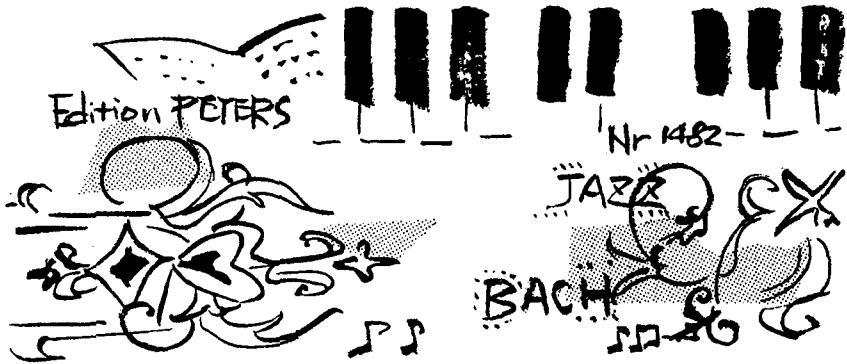
この「むなしい人」こそ、専業主婦の私であった。正確には、むなしいなどという生易しいものではなかった。

鬱屈が続いた。そのうち、音楽を聞くのでなく自ら音を出したくてたまらなくなった。ピアノが親の家から到着した日、全神経を指に込めて一つの音を鳴らした。私が望んだのは、もう聞けなくなってしまうオープンリールのテープに入っている、ジャズピアノ曲の出だしだった。

その日から、ピアノに深くかかわるようになった。下の子が幼稚園に入ると、毎日三、四時間は弾く時間がとれるようになり、十五年以上を経てピアノと再会した私は、めちゃくちゃにハッピーだった。

グレード受験

単線の電車で十五分ほど乗ると、市の中心街に着く。ヤマハのグレードを受けるため、私はその楽器店で月二回のレッスンを始めた。私を教える美智子先生は、ピアノ演奏グレード四級を持つ



幼児科講師で、私より十歳若かった。

この楽器店を紹介してくれたのはエレクトーン講師のHさんだが、ピアノ演奏グレードがあると教えてくれたのも、私がレッスンを受ける間子供を預かってくれたのも、彼女である。ほんとうに有り難かった。

ヤマハには、エレクトーンだけでなくピアノ演奏グレードもある。音楽指導者として該当するのは五級以上である（一、二級は言わば名誉級であり、試験はない）。指導グレード五級は、演奏グレードの五級かそれ以上を持っているいと受験できない。

試験の内容と配点は、以下のとおりである。

*ピアノ演奏グレード（三科目）

- 一 即興演奏 四十点
 - a 変奏 二十点
 - b モティーフ 二十点
- 二 初見演奏 二十点
- 三 楽曲演奏 四十点
 - a 課題曲 二十点
 - b 自由曲 二十点



(総得点七十五点以上、かつ各科目の得点が配点の五十パーセント以上であれば合格)

*指導グレード(五科目)

一 ソルフエージュ(実技) 百点

a メロディー視唱 五十点

b 弾き歌い 五十点

二 鍵盤実技(伴奏づけ、移調奏) 百点

三 楽典(筆記) 百点

四 コード進行法(筆記) 百点

五 聴音(筆記) 百点

(総得点三百七十五点以上、かつ各科目の得点が六十パーセント以上だと合格)

ヤマハのグレード試験は、どんどんと難しくなってきた。ここ十年くらいの出題例を見ると、即興演奏の五級はかつての四級に、四級はかつての三級レベルになっているのが分かる。早い者勝ちである。

受験のための個人レッスンを受けるうちに、長女に幼児科入会を勧められ、美智子先生のクラスではなかったが通うようになった。また、先生は私に、幼児科講師にならないかと言いつ出した。

実は先生は楽器店の関係者であり、不足している講師のスカウトや養成もしていたのだ。彼女は子供に教えることに情熱を傾けており、演奏技術だけでなく、教える技術についても私に色々伝授してくれた。しかし私は、講師になるなら演奏グレードと指導グレードの両方を取ってからのことだと考えていた。

東京のヤマハスタッフのM先生が月二回、楽器店でグレード受験講座を開くようになる、私はその先生のクラスに移された。すでに稼働している講師たちに

グレードを取らせようと、楽器店がM先生を招聘したのだった(先生不足の地域なので、グレードを取れる力のある講師は多くない)。

最初は教室一杯にいた受講生だが、四、五人にまで減るのに二カ月からなかった。

私は、ただ弾けるだけでなく、音楽人としてバランスの取れた人間になりたいかった。M先生は作曲科の大学院出身なので、私は先生を音楽に関するよろず質問所主任と見なし、和声法、作曲法、演奏解釈、様々な分野の疑問や質問を浴びせた。受講生が少人数であることの恩恵を、私は最大限に受けた生徒だったと思う。M先生とは別に、演奏の先生にもついた。

昭和六十年六月、ピアノ演奏グレード五級取得。

昭和六十一年十二月、指導グレード五級取得。

四級も取りたいと思い、レッスンは続けた。

採用試験

「もっと勉強しなければ、ヤマハの講師になるといいですよ。色んな研修もあるし、チャンスは多いですよ。グレードも取ったのに、もったいないでしょ……」

M先生のこの言葉はもっともだった。下の子も春には幼稚園の年長組だし、私は幼児科講師になろうと決心した。三十六歳の冬である。

演奏グレードと指導グレード五級を持っていて講師採用試験に落ちるのは、よくよくのことだと聞いていた。「三十六歳」が「よくよくのこと」であるのかなのかは、未知数だった。ただ、M先生

のクラスに無欠席で二年近く出席した実績が、結果として役に立った。

書類の志望動機欄には、確かこんなことを書いた。

「自分が子供のころに受けたような、忍の一字のレッスンをやるつもりはない。また、クラシック一辺倒も問題があると思う。基本的な技術と同時に、音楽の楽しさも生徒に知らせる先生になりたい。ヤマハのグレード受験の勉強をするうち、ヤマハの考え方に共鳴した。

私は、社会人、母親、生徒の保護者のすべての立場を経験しているので、子供の持つ可能性と限界についても、実態に近いところを把握できると思う」

ヤマハでは出身校は意味がなく、グレードがものをいう。グレード所持者は試験科目が半分免除される。私の場合、ピアノ曲演奏と弾き歌いがそれぞれ一曲、そして面接と筆記の適性検査だけだった。

面接での試験官は、三人とも好意的だった。私のほうから最後に思い切った言った。

「もし採用されて研修を受けるようなら、春休みに行なわれる分に割り振っていただけではないでしょうか。二人の子供を母に預ける都合があるので」

面接試験の場で、採用後の研修日程の希望を出す受験生など、前代未聞であろう。我ながらずうずうしいとは思ったが、研修を受けるのも大きな目的であるから、必死である。それに、あのころからすでに、中年という名の着心地のよいよろいを身に付けだしていたのかもしれない。

研修

さて、採用試験に受かり、実際に研修



に参加してみると、同僚の研修生たちの音楽力のなさに大変驚いた。彼女たちは音大出身であるにもかかわらず、である。

が、自分の学部時代のことを思い起こすと、妙に納得がいった。実は私はある外国文学部出身であるが、その専門知識たるや、お粗末の一語に尽きるのである。自分で強く希望した学部であるのに、入学した瞬間、なぜか情熱はアワと消えた。図書館にこもって読みふけた本はどれも専門外で、授業など身が入らなかった。結局、どの学部を出たかではなく、どれだけやったかで実力は決まるという当たり前のことだった。

私は初対面の人とでも楽しく話せる性分である。研修生仲間も講師スタッフも、三十六歳の異色研修生に興味を持ったらしく、お互いに色々話をし、知り合っても大勢できた。息つく間もないハードな研修が九時ごろ終わると、夜の宿舎で、身の上相談、失恋から立ち直る方法など、プライベートに楽しく盛り上がりたりもした。

ヤマハの研修というのは、すごい。あれだけの講師陣と設備と時間をかけて、無料というのはすごい。もっとも、素直に感激するのは私ぐらいのもので、喜んで参加する研修生など普通はいない。

終わってみると、タフでもない育児疲れ気味の私が、十歳以上若い同性に混じって互角か、ときにそれ以上に研修をこなしていた。これは、一にも二にも、やりたいと思ひ積極的にかわかったせいなのだろう。また、体力では劣るにせよ、ペース配分や総合判断力なら中年のほうが勝る。

泊まり込みの研修は合計八泊くらい、日帰りの研修は、最初の一年間で延べ何十日になったろうか。

仕事開始

ヤマハのパンフレットには、幼児科講師は夕方には仕事を終わると書いてあったが、地域によってはそうはいかない。

私の所属する楽器店の幼児科講師は、その後もピアノ個人レッスンを夜七時八時まで受け持たねばならなかった。ピアノ

の先生が足りないのである。しかし、小学二年と幼稚園のわが子を、そんな時間まで留守番させておくわけにはいかない。夫の帰りは遅く、まったくアテにならなかった。

楽器店との時間の折り合いがつかず、結局、自宅をヤマハピアノ教室に認定してもらい、そこで個人レッスンをすることになった。後に離れた別の会場をも一つ受け持ち、二か所で週五日ほど教え



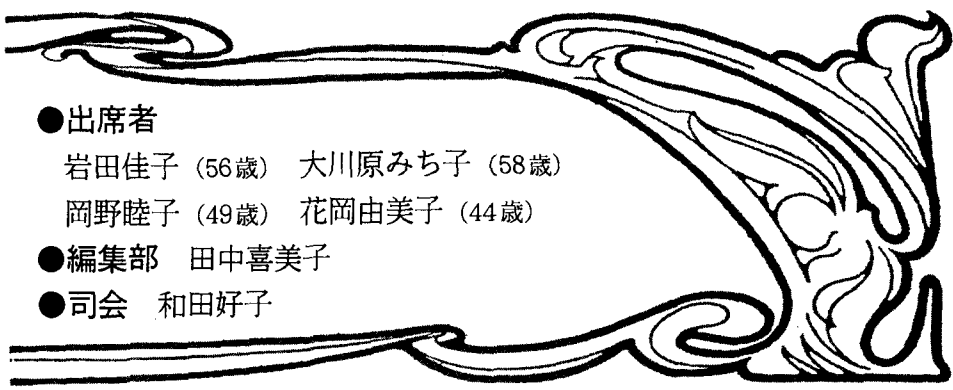
るようになった。

私は講師として稼働しながら二人の先生について勉強を続け、平成二年六月、ピアノ演奏グレード四級を取得した。

自分の子供を二人育て、よその大勢の子供たちにピアノを教えていると、考えること感じることは多い。

一 つづー

(え・カステラネンコ)



●出席者

岩田佳子 (56歳) 大川原みち子 (58歳)

岡野睦子 (49歳) 花岡由美子 (44歳)

●編集部 田中喜美子

●司会 和田好子

●生は死と隣り合わせ

司会 今日の座談会は「これからの老後」というタイトルですが、このところ「わいふ」には老いた親ごさんのことでよく相談があります。子供は全部東京に出てきている、親ごさんだけが田舎に残っていて倒れた、さあどうしよう、そういう話が多いんですね。

今日は、みなさんがみなければならぬ親世代のことも含めて、年を取ったとき将来どうしたいか、どうするべきか、今の福祉政策も含めて意見を色々出していきたいと思います。

花岡 私の場合はまさに和田さんが今言われたように、老夫婦だけが田舎にいて片方が突然死んだものですから、ほんとうに慌てふためきました。それまでは老後とか老人とかあえて避けてきたんですけれど、突然バァンと目の前に突き付けられて「老い」を真剣に考えざるを得なくなった、といううか。

兄が事故死をしましたので子供は私一人。親をみなきやいけないという気持ち

観念的にはあったんですけど、どこかで避けて通ってたんですね。でも老いと、死ということ、人は必ず死ぬんだということを忘れてはいけない、と。

司会 お幾つでした？

花岡 八十一です。八十一という年齢は、一般的に考えても、死ぬということを意識していると思ってたんですよ。ところが母に限ってはそうでなかったということが分かったんです。父が少しボケてますので、母が財産的なこと、家のことなど全部管理していたんですが、家の中は散乱しているし、整理した痕跡はゼロ。もう愕然として。だれだって死ぬんだし、死を考えて生きていけば、私自身だって別の生き方があるんじゃないか、というのはしみじみ感じましたね。

司会 そりゃそうだ。現代人は、そういうところがあると思いますね。死を避けちゃうといううか、考えない。

花岡 意識して避けていたのかもかもしれませんが、死を考えて生きるときには、おのずと生き方のスタンスみたいなものが違ってくると思うんです。母がデタラメな

女の時事放談

これからの老後



岡野睦子さん

生き方をしたというのじゃなくて。司会　ほかの方、いかがですか。

岡野　私は明日死んでもいいいつも思ってます。子供は娘が二人いますけど、口癖のように死んだら身の後始末だけはお願いい、と言ってるんですよ。要するに、今日やれることは明日に延ばさない。自分がやりたいことをそのつど消化していくという姿勢で生きてますのでね、明日事故で死んでも納得できる、といつも家族に言っています。

田中　老後ということとは？

岡野　老後になったときには、私はやりたいことをやってきたのでね、子供には私を足蹴にしてもいいよと言ってるんです。

司会　それはどういう意味なの？　具体的にはどういう生き方をしているんだろう

わけですか。今何をしたらいいわけですか。

岡野　いや、何もしていいですけど、日々の生活で、今日この座談会に出るにしても出たいと思ったら、あまり躊躇しないというか。

司会　足蹴にしてもいいよなんて、まるで家族に悪いことをしているようじゃないですか。

岡野　それはないですね。最低限のことはやっていますから。

田中　主婦で普通の生活をしていらっしゃるけど、自分のやりたいことを躊躇しないでやってらっしゃる。そういう意味じゃないの？　老後の準備としては、花岡さんがおっしゃったようなことは？

岡野　主人はサラリーマンで今会社勤めをしますけど、夢があるんですよ。囲碁行脚。趣味が二人とも共通してますのでね、できるだけ早く引退して旅行しようという夢があるんです。

結婚する前に主人に、自分のおふくろは無趣味な人間だったけど何か一つ一生の楽しみを持つといいよと言われて、何も思い

つかなかったんですけど、暮を薦められたんです。これは絶対面白いかからお薦めだというわけ。なかなか一人前になるのは難しかったんですけど、あきらめずに教えてくれて、私も性に合ってたんでしょとかね、今まで続いて、やっと一人前、というか。花岡 何年くらい？

岡野 二十五年になります。

司会 すごい、すごい。そりゃ大変ですわ。何しろ囲碁は親の死に目にあえないというくらいだから。

●老後五つのパターン

岡野 経済的には主人が全部管理して、まして、あなたが突然いなくなったら困るからちゃんと分かるようにしておいてねって、ノート一冊見れば全部分かるようになってあります。その辺は安心しています。司会 なるほどね。どのくらいあれば大丈夫だとか、具体的には考えていらっしやらない？

岡野 たまにはそういう話もしますが、まあ、大丈夫かな、と。もちろんぜいたくはできないと思いますけど。

大川原 私は今福祉相談員の講座を受けているんです。老後の生活には経済と生きがいと健康とが必要で、その三つについて四十時間ぐらい講習を受けるんです。

まず経済生活でいうとね、二人で七千万円は必要なんです、六十歳から二十年間と設定して。男は二十年、女はあと七年足して二十七年間。そのうち税金が八百万円くらいあって、固定資産税などは入れずに、消費税とか車の車両税とか。消費税はこれから値上げになるという話も出ています。これは生活費が月に二十四万として計算したもので、だから相当見込んでおかないと惨めな老後になる可能性があるんですね。

健康については、だれにでもできる、お金を使わない方法があります。一日一万歩歩くことと、体操を五十回、そして水かぶり。水かぶりができれば乾布摩擦でもいいんです。とにかくこの三つがピタ一文お金をかけないで、とても体を鍛練できる。

最後に生きがい。これが問題なんです。女の人はいいんですけど、男の人は企業と結婚しているような人ばかりだから、

退職したとたんにボケちゃうんですよ。それをどうするかというので、この講座が設けられたんですけど、受講していたのは六十歳ぐらいの男の人ばかり。女は二、三人。将来は企業に出向いていって、老後はどうしたらいいかというオジサマ族に遊び方を教えるんですが、私に言わせると、遊び方を人に教えてもらわなきゃならないような人は死んじやってもいいと思うんですけどね。

老人にも五つのタイプがあって、一億円ぐらいお金を持っている人はダンシングオールドといって、飲めや歌えで死ぬまで暮らせる人。キャリアオールドというのは、生きがいを持って毎日が充実して希望に燃えている人。コモンオールドというのは、ごく普通の一般の方。それからグレイオールド。これはウツ病になったりして落ち込んでどうしようもないタイプ。シックオールドというのは病気で寝たきりとか、体が大変な状態の人。五段階に分かれていますよ。

司会 確かに老後というのは条件で色々変わってくるね。



大川原みち子さん

田中 若くても分かれてるわよ(笑)。

岡野 老後のことも暗いことばかり考えないようにしているんですけど、お金がなくても楽しいことがあるんじゃないかと思うのは甘いでしょうかね。

田中 そうじゃないと思いますよ、それは。

司会 なさの程度だと思っかね。

●子供に引き取られるのは敗北!?

田中 私、ダンシングオールドというのがのみ込めないんだけど。

司会 それは何か遊ぶことがあって遊んでいる、ってことなの?

大川原 私の舅姑なんかまさにダンシングオールドなんです。息子からほとんどお金をせびり取って、毎日ガールフレンド

やボーイフレンドを十人ぐらい呼び集めて、ごちそうをたくさん膳の上に並べてカラオケを歌って、朝から晩までニコニコしてやってくるわけですよ。私たち嫁とか息子は裏で、早く死んでくれればいいのに、と思っている状態なんです。

田中 でも、よくみんな、お金を出しますね。

大川原 そこが結局私の一番腹が立つところで、夫が金を出すことについて嫁の立場だから文句が言えないんですよ。

田中 そりゃそうです。

大川原 だから、いつ、どのくらいお金を出しているのか、全然分からない。

田中 しかし、子供も親孝行だね。

司会 これ、江戸時代だったら当たり前のことよ。隠居というのは子供からお金を巻き上げて遊ぶもので、子供は自分が隠居になったら遊んでやろうと思って我慢するわけよ。

花岡 今の時代、世相的には逆の話が多いじゃないですか。普通は子供がお金を出さないで問題になる。

大川原 今はね、「親孝行、したくないの

に親がいる」という時代なんです。釣り上げた魚は子供にやるな、ただし魚の釣り方は教えろ、とおっしゃってた方がいました。

田中 つまり子供にお金をかけるな、ということです。これは。ではもう少しご自分の抱えている状況など出していただいて、老後問題を考えるスタートラインにしたいと思いますが、いかがでしょうか?

岩田 私は神戸に住んでいますが、母は世田谷で一人暮らしをしていました。足の骨を折った後、色々と後遺症があって、いよいよ私の目から見ても危ない状況になってきたので、無理に神戸へ連れてきたんです。私自身、母の老後を抱えていきながら自分の老後があるということで、今日は出席させていただきました。

母は、父が亡くなって三十年近くを東京で暮らしていたんですが、子供は私一人しか産まなかったんです。あの産めよ増やせよの時代に。母はそれをとて誇りにしていたんですね。少数精鋭主義だとか言っていた(笑)。私は全然精鋭じゃないんです。母の期待を外れてしまったんですけどね。

そういう考え方は非常に母の妹たちのひんしゆくを買いましたね(笑)。でも母は、あんなに産むから苦労するんだ、みたいなことで終戦直後の食料難の時代は威張ってました。それだけに絶対子供の世話にはならないって、妹たちの手前もあるし言っていたんです。ところが近所の人には、「娘が神戸へ来い来いと言っているのに、私はこうして一人でいるんです」って。母は今八十ですけど、世間体を繕うところがあるんですけどね。私の姑もそうですけど、一人で暮らしているということは世間体が悪い、やはり迎え入れられて子供と一緒に住むのがいい、という気持ちがあるんです。

私の娘の結婚式があったときに、式の間中岩田の親戚に「佳子ったらヒドインですよ。私を無理に連れてきて」と言っ歩いてるんです。岩田の母は寝たきりで老人病院に入っていますし、やはり岩田の手前ね、取り繕う。それと、私のところへおめおめと来たという……。

司会 なるほど、そういう状況ですか。
岩田 私としては、精一杯の愛情表現でもあるんですが。



花岡由美子さん

花岡 ヒドインですよ、と言いつつも内心はホッとしていらっしゃるんじゃないですか。

司会 欧米の老人はみんなそうだっていますね。子供に引き取られるとすごい挫折感を味わうんだって。人生がおしまいになったから引き取られた、という感じがしいますね。

岩田 それで母は急に老け込んで、入院しました。

田中 でも、特に悪いところはないんですよ。

岩田 やっぱり骨なんです。一度骨をやられたら次々と骨が弱ってくるんですよ。私が見たかぎりでは、周囲の人を見ていて、健康でいられるのは七十五歳までと

司会 思っています。
それが境目ね。七十代の後半から

八十代に入ると、今までのようにはできないってことです。七十五の前と後とじゃ、ものすごく違うと思う。

● “死に時”

花岡 私の母も勝ち気で、絶対子供の世話にはならないって、豪語していたんです。自費出版の本には書く、人には言うで、言い切っていたんですが、確かに生きている間は世話をしませんでしたけど、死なれてからどれだけ大変だったか。

大川原 死亡適齢期というのがあそうですね。あまり長生きしちゃうと周りが迷惑をする。

司会 “死に時”がある(笑)。

田中 やっぱり経済的に子供に負担がかかるような生き方だからね、今は。

司会 私、本をつくるために老人ホームを色々見て歩いて、ヘンなことに気が付いたのよ。寝たきりの人が入る特別養護老人ホームなどは、入居者の年齢がむしろ若いんです。要するに、八十歳まで無事に過ごす、病気をしたらすぐ死んじゃうのね。一番怖いのは六十代で病気をすること。六

十代、七十代で脳溢血^{脳溢血}なんかやって、半身不随になって助かることなんです。そうすると八十ぐらいまで寝たきりでいて、周り中に迷惑をかけることになっちゃう。

岡野 六十代、七十代はまだ生命力があるからね。

岩田 健康で老いていくためにはどうすればいいか。やはり自分だけでは生きていきませんので、週に一回とかだれかに助けていただくことによって、一人暮らしが成り立つ。自助と他助ですけどね、そういう守り方をすると、その人がきれいに生きていける。私もコープ神戸の助け合いの会で奉仕員をしているんですが、どの人も今住んでいる地域で終わりがあるように、今後はもっとそういうことを普及していかなきゃいけない。

司会 そうですね。

田中 それだと岩田さんが必ずしも自分の家にお母さんを引き取らなくてもよかった？

岩田 ええ。で、私、よっぽど“わいふ”に広告を出そうと思ったんです。週に一度母を助けてくれませんか、って。ほんと、

真剣に一年ほど前から考えていたんですよ。

司会 でもそれはね、そう長くは続かない。ある程度できたとしても火の問題とか、あるから。

岩田 近所の人が夜寝る前に上がってきてガス栓を点検してくれるとか。

司会 今はそういうことができない世の中ですよ。それに日本の老人なら嫌がると思う、他人に入ってこられたら。

岩田 その考え方を変えないかぎり快適な老後はおくれませんよ。

大川原 “ひと声牛乳”というのがあるんですよ。六十五歳以上の独居老人に牛乳屋さんが配って、前日の分がそのままになつていたら、ひと声かける。

岩田 ヤクルトがやっていますね。兵庫県下の村では、ヤクルトを使って県がやっています。

●人間の価値

岩田 やっぱ子供に遺産を残すとかいうことよりも、一番大切なのはいい老い方をするんですよ。キザなようだけれど

も、人格を高めるとか。

花岡 ある文章を読んだんですけど、老人が生きてきて、自分は人生で何もしなかったと思つたとしても、その人が存在するだけで、周りの若い人がその人のようになりたいと思うなら十分生きてきた価値がある、って。

田中 めったいませんよ、そんな人。司会 森田療法の本で、正確には覚えていないんだけど、人間の価値というのは能力でもないし、金でもないし、容貌でも地位でもない。身障者であっても寝たきりであっても、何よりも人に対して態度のいい人が価値の高い人だ、と言ってるのね。これ、私、ほんとうだなと思った。

田中 老若の関係で言えば、幾ら下の人がよくても上の人が悪いとだめなの。小学校でいえば校長先生が悪いとだめなの。嫁姑の仲でも、おばあちゃんがすばらしい人格を持っているのに嫁さんにいじめられるなんて話、聞いたことないもの。大体トラブルが起くるのは、おばあさんかおじいさんが悪いとき。頑固だとか、やたら我が強いとき。



岩田佳子さん

司会 だけど、日本で今難しいのは、価値観がころころ変わってきていることよ。そうすると老人てのは、バカにされるようになったちゃう。老人には分かんないのよ、今の若い人の考えていることが。だから態度をよくしようと思っても、老人の側にも難しいことがあるんじゃないかという気がする。

田中 今の時代は新しいものがどんどん出てくるわけけれども、人間にその情報を全部キャッチすることはできませんよね。若い人は古いものをどんどん捨てちゃって新しいものを取り入れているけど、老人にはできないいわね。でも若い人たちだってすぐ古くなるわけ。そんなもの、しょっちゅう追いかけていたら幾つ身があっても足りないし、ただ振り回されているだけでバカになるばかりなの。だから私、古

くなる、年を取るということは全然気にしない。私は、人間の価値というのは、人間が人間でなくならないかぎり一定のところがあると思うんですよ。人間の基本的な条件というのは変わらないだし、自分たちにとって何が一番大事か、最終的に動かないところがあると思うの。

● 老後のイメージ

司会 私が言いたいのは、みなさん、老人ホームへ入るとすぐ不自由でつらいんじゃないかと思っていらいっしやるようだけど、実際に見て歩いて、どうもそうじゃないな、って感じ。なかなかよいところなんですよ。とにかくこれからは、ああいうものが充実していかなかったらだめですね。面倒をみてくれる子供がいりゃあいいけどサ。だからね、一人暮らしでそんなに頑張るもんじゃないんですよ。

岩田 世の中には色んな人がいるわけですよ。赤ちゃんもいれば幼児も若い人もいます。私はその中でね、人々の暮らしの見えるところで暮らすというのがいいですね。

田中 地域でみんなが入り混じって暮ら

すとおっしゃるけど、地域って今は完全に崩壊していますよ。ほんとうにあるんですよ、か、そういうの。今住んでいるところでもし私がすごい高齢者になったら、若い人と接触する機会は完全にないですよ。

花岡 うちも田舎ですけど、やっぱり同じです。頼めませんよ、地域には。

司会 いかがです？ みなさんはご自分の老後をどうしようと思ってるっしやる？ 大川原 働けるだけ働いて、七千万の半分は無理だけど二千万ぐらいまではためて、あとの一千万は生活保護のごやっかいになるかもしれないと思っています。健康面では一万歩は歩いています。生きがいのほうは、新聞を毎日広げて集会やシンポジウムに出かけて充電しております。あわよくば、その中でライフワークになるようなものを見つけたいな、と。

岩田 私は地域で老いたいなと願っています。やはり私の母にしても岩田の母にしても、未亡人になってから、夫婦で暮らし続けていらっしやる方に比べると老いが早く進みました。ヨクヨクしながらも二人でいるほうがポツポツと死ぬんですよ。どちらか

が亡くなると後を追うようにしてね。できれば私もそういう生き方をしたいので、せいぜい夫と仲良く、今の家で老いていきたいなあと思います。

岡野 夫が引退したら、先ほど言った夢を實現できたらいいなあと思っています。

司会 暮さんまで、いいですね。

田中 うんと年を取ったら、どうします？

岡野 まだ現実的じゃないせいかしら、仮に寝たきりになってだれも面倒みてくれないでもいいなと思っているんです。

田中 今お幾つ？

岡野 四十九です。そういう決意でいるんだけど……。

司会 そうはいきませんよ、絶対に。周りがほっときませんよ。

田中 それは一種のロマンティズムなの。やっぱり無理無理。若すぎる。老後について具体的なイメージが浮かんでいないのよ。私だって昔はサハラ砂漠で野垂れ死にしたいと思っていたもの。

花岡 私は四十四歳で、この中で一番若いですけど、老後への備えはこの一年でだいぶんしましたよ。まず経済的には、保険に

バッチシ入りましたね。夫は公務員なのでもう恩給がつくんですが、安心料として年金タイプの生命保険に夫婦で入りました。健康については、食べ物に結構気を付けていて、添加物の多いものは避けて、自宅の畑で野菜をつくるようにしています。体操はラジオ体操的なものですけどやっていません。

生きがい面では、書く仕事でいきたいなという気持ちがあるけど、強まってきています。私は夫の扶養から抜きたいんです。今からじゃ遅いと思うとマイナス発想なので、才能があるかどうか悩んでいるんですけど、とにかく育てるだけの努力と情熱を費やそうかなあと思っています。

田中 私はね、六十二歳だけど、今でも激しく仕事をされていて、お手伝いさんを頼んでいるわけ。そうじゃなかったら死んじゃうから。だけどね、このごろビンのふたを開けるとか、そういう力を使うことが非常に苦痛になってきたの。力がなくなっているのよ。それから腰がね、前は二時間立ちっ放しで講演しても平気だったのに、最近ミリミリと痛くなってきた。これはも

う、完全に老人になりつつあるなというところが分かるわけ。そうするとかなり近い将来、だれかの助けを借りないと生活できないだろうなということが具体的に分かるの。あと十年して七十二になったら、それこそ……。

司会 そうだと思うよ。

田中 そうすると、亭主は私より必ず先に死ぬと思うから(笑)、すごく激しく働いているから、絶対死ぬ。酒とタバコもやっているから、もうだめ。

そういうことを考えてみると、私はいずれ一人になるんだ、と。息子は一人いるけれど息子のことは全然念頭にないわけ。まずだれかに助けてもらわないといけないからお手伝いさんを頼むとして、そんなにいいお手伝いさんをずーっと死ぬまで頼めるだろうか、ってことがあるのね。それはたぶんできないだろうから、どう考えても老人ホームだなと思うんですよ。

(まとめ・宮前 和)

(今回の座談会のおしらせは、一四一ページを「らんくさい」)

在宅介護の行方

埼玉県浦和市 佐藤 乃麻

敬老の日を目前にした、九月の中ごろ。小さな新聞記事が目にとまった。そして、思わず叫んでしまう。そんなこと言ったって……、と。

朝日新聞のデータースポット。老人の死亡場所の割合。一九九〇年、自宅が三割、病院が七割。「自宅で最期を迎えたい」と願う人は少なくないのではないか」と、記事は締めくくられている。

へわが家の事情

祖母は、自宅で息を引き取った。昔で言う中風（今でいう脳卒中）にかかり、容体

が悪くなると、通いの医者が来る。そんな中で、母の介護だけを頼りに、約三年半寝たきりの末、安らかに眠った。一九七一年夏。私が十一歳のときである。

母は嫁に來たその日から、祖母と一緒に暮らしていたらしい。物心ついてからの祖母は、いつも優しかった。どういうわけか、弟よりも私をかわいがり、その結果、私は典型的なおばあちゃん子になった。だが、そんな優しい祖母でも嫁である母が相手となると……。

嫁と姑の仲は突き詰めてしまえば、あんなものだろうと、今でもそう思う。やり方

はそれぞれだろうが、大体どこも似たようなものに違いない。何十年も家を守ってきた女とこれから守ろうとする女が、同じ屋根の下で一つの台所を共有すること自体、無理がある。ましてやあのころの家は、今で言う二Kのような小さな社宅だった。一つの部屋は結構な広さがあったように思うが、何と言っても仕切りがない。部屋数が少ない。ゆえに、逃げ場所がない。そこに、両親、子供二人、祖母の五人が入り乱れて暮らしていたのだから、何事も起こらないほうがおかしい。

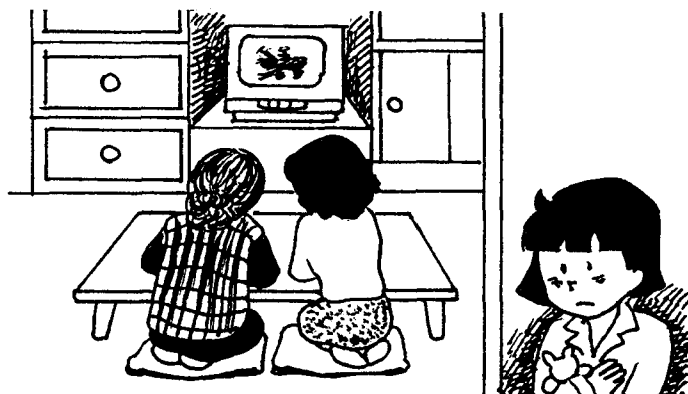
そのうえ、これが争いの決定的な理由な

のだが、祖母も母も折れるということを知らない。同じくらい気が強い。結果、ささいなことでも、すぐ事件になる。二人のけんかはすさまじい。母は泣きながらわめきたて、祖母は大声で騒ぎたてた。まったく今考えれば、何と近所迷惑なことか。私と弟はただひたすらふすまの陰で、嵐が過ぎ去るのを待った。

二人の言い合いの場面は、すぐに幾つも思い出すことができる。とすると、小さな小競り合いは、一体どのくらいあったのだろうか。

父は恐れをなしてか、それとも仕事が忙しかったのか、いつも夜遅くならないと帰って来ない。けんかの原因の一つは、この帰って来ない父のことだったのだが……。母はいつもため息とともにつぶやいていた。「お父さん、長男だから……」

ただ一つ有り難いことに、二人は忘れるのも早かった。子供を震え上がらせたけんかから数日もしないうちに、仲良くテレビを見てさめざめと泣き、楽しそうに笑っていた。祖母がつくったとうもろこしを母がゆで、何やらヒソヒソと語り合っていた。



女とは、何と感情的で不思議な動物なのか。私が妙にませた子になったのは、幼い時期にこの二人を見つめていたせいではないかと、今でもそう思っている。

〈祖母が倒れた〉

そんな祖母が倒れた。倒れたのは初めてのことではなかったのだが、いつもは多少のマヒを残しながらも、私には優しい、母には憎らしい、普通の祖母に戻っていた。だが、このときだけは違った。医者が家に通いつめていたけれど、いつまでたっても祖母は起き上がれない。リハビリどころの騒ぎではない。そうこうしているうちに、手も足も動かなくなる。あつという間の出来事。だれもが、「おばあちゃん、中風に当たったんだね」と、目を伏せた。

祖母が入院した記憶はない。それが当たり前の時代だったのだらう。医者の方は次第に見かけなくなった。そして、祖母と母の二人だけの闘病生活が始まった。

子供心に切ないことが、たくさんあった。悲しくてしょうがないことが、たくさんあった。祖母は気が強いだけではなく、プライドも高かったから。

ままならない手と足を使って、祖母は歩いてトイレに行こうとする。母が無理だと言いながら、わきの下を支える。祖母の体

は大きくて重い。引きずるようにしながら、一步一步と進む。そしてやっと、トイレにたどり着く。抱えるようにして、十歩足らずのベッドまでの帰り道を、汗だくになりながら戻っていく。だけど、それも長くは続かなかった。一步一步と進まなくなる。母がよろける。祖母が揺れる。そして結局、トイレまで間に合わない。祖母の下半身から、大量の液体が流れ落ちる。祖母が泣いた。母も泣いた。わけも分からず、私も泣いた。



父は高度成長期の中、相変わらず寝静まったころでなければ帰らない。その日から少したって、祖母は便器（おまる）を使うようになり、そしておむつをつけるようになった。

祖母はわずかに揺れるように動く手で、まくら元にある財布から小銭を取り出し何度となく私に与えた。私の知っている祖母は、いつもお金持ちだった。小学生の私が、お金の出所など考えるはずもない。ただ、小銭を握り締めて、弟と一緒にお店に

走り、お菓子をほおばる。祖母はただ黙って、私たちの顔を見つめていた。

病魔はゆっくりと、だけど確実に、祖母の体から力を奪い取っていく。寝たままにしていることが、もっと寝たきりになる。そんなことは、百も承知のはず。リハビリに近いこともやっていたに違いない。

だが、いかにせん、二人だけの闘病生活。限界がある。祖母の年齢もある。いつの間にか、どんなに頑張っても祖母の手がお金を取り出せなくなり、何とか動くのは首だけになってしまふ。

母は一人で、吐き出せない何かを、体の中にため込んでいたのだろう。だんだんキリキリするようになっていった。祖母に声を荒立てない代わりに、いらだちは私と弟にぶつけられた。声は低く小さかったけれど、どなる言葉は子供に対してとは思えないほど、冷たかった。祖母は少しづつあきらめていくかのように見えた。私は、ささいなことでも怒る母が、嫌いだった。怖かった。あのころの私は、母の怒りに触れないようピクピクしながら、毎日を送っていたように思う。

もうあれから二十年が過ぎた。子供はいつまでも子供のままではない。分らなかつた母の思いも分かるようになってくる。あのいらだちの月日さえもが、笑って語れるようになってくる。だれがあの母を責められよう。

大きな病院もない小さな田舎町では、動けない老人を入院させてくれる施設など、ありはしない。寝たきりになるのも抱えるのも、運が悪いと片付けられる、そんな時代だった。親をみるのは当たり前、例えそれが寝たきりであっても。そんな風潮の中では、もし遠くに病院があつたとしても、世間が入院を許さない。

母はあの小さな家の中で、祖母と一日中顔を突き合わせながら、汚れたおむつを取り替え、重い体を動かして背中をふき、流動食みたいな食事をつくり、スプーンで少しずつ食べさせていたのだ。外出もままならず、右手が動いた、左足に力が入った、とそれだけに一喜一憂して、三年半近く暮らしていたのだ。

人は、そう簡単に鬼にはなれない。そのかわり、お釈迦様になつてなれはしない。

多少いらだつたからといって、少しぐらい顔をしかめたからといって、一体だれがそれを責められるというのだ。

つらいのは母だけではない。あのいつもキリリと着物を着こなしていた豪快な祖母が、おむつをして食事を流し込んでもらいながら、少しでもと手を動かそうとし、そしてあきらめていく心中を察すると、今でもみぞおちの辺りがキュンキュンと泣く。

幾ら、心の底で祈り続けても、目覚めれば昨日と何も変わらない今日が始まる。もう嫁だの姑だの、好きだの嫌いだの、などとは言っていられない。ただ義理と人情と現実の中で、涙をめぐうしかない。だれも助けてはくれないのだから。

〈母が倒れた〉

新しい年を迎え、遅い春がやって来ても、相変わらず祖母は動けなかった。それどころか、意識がはっきりしなくなっていた。母の体力や精神力は限界にきていたのだろう。

あの日のことはよく覚えている。夕方、

近くの薬屋に買物に行くことに伝えて出かけた母。だけど、幾ら待っても母は、帰って来ない。北海道の夕暮れは早い。子供だけの夜はただ怖い。あのとき、ふと思った。「お母さん、どこかに行っちゃったのかな」と。夜に対してよりも強い恐怖が、全身を覆う。祖母がいるから、家を空けるわけにはいかない。そう考えたのだろう。弟に留守を頼むと、私は母を捜すために玄関を開けた。そして、走った。

母は帰って来た。町内会のおじさんと近くにある商店のお兄さんに抱えられて……。橋の近くで倒れていたという。紙おむつの形をした大きな白いビニール袋が、大事そうにお兄さんの腕に掛かっていた。母の顔は妙に青白かった。まるで、テレビで見る幽霊のように。私は、近所に住む元看護婦のYさん呼びに、また走った。

次の日の朝早く、Yさんに付き添われて、母は病院に行き、そして、その日から入院をした。

重度の胃潰瘍で、胃がぼろぼろになっていたと教えてくれたのは、だれだっただろう。父は看護婦の顔に戻ったYさんに、強

く、どなるように強く何かを言われ、ただうなだれていた。父の背中が、昔、飼っていた亀の甲羅のように小さく丸まって見えた。祖母は母の入院を理解していなかった。六月のことである。

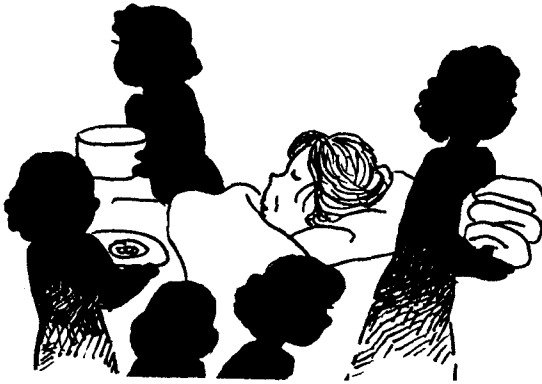
その後のことは、何が何だかよく分からない。ただだ、慌ただしい日々。まるでだれの家か、分らないほどに毎日、近所の人や親戚が出入りし、泊まっていた。知ってる顔も知らない顔もあった。私と弟は、だれかがつくった食事を食べ、だれかと一緒にまくらを並べたまま、朝を迎えた。そのときの父の様子は、まったく記憶にない。

祖母は、毎日変わる色々な人の手厚い介護を受けていた。熱いタオルで体がふかれ、「おばあちゃん」と話しかけられ、細かく刻まれたメロンが口の中に流し込まれた。

もうだけれど、母に見えていたのだらう。どの人の介護にもおとなしく身をゆだねながら、繰り返しはつきりしない口でつぶやいていた。言葉を覚え始めた幼児のように、何度も何度も。「みっちゃん(祖母は

昔から母をそう呼んでいた)」「みっちゃん、ありがとう」と。そして、家の中を走り回っていたどこの子供を見ても、私と弟の名を呼んだ。

正す者はいない。ただ、「みっちゃん」と呼ばれれば返事をし、手を握り締める。あんなに愛した自分の息子である父の名前よりも、あんなにもめた嫁である母の名前



を、祖母は最後まで呼び続けた。母によく似たおばが「お母さん、ほんとうに頑張ってたんだね」と、鼻をすすりながら言った。あのころのことを振り返ると、なぜか必ず、床擦れに当てられた白いガーゼと気持ちよさそうに目を細めた祖母の顔を思い出す。そして、母の入院は大変だったけれど、あれはあれでよかったのかもしれないと思う。

だが、何よりもほんとうによかったのは、祖母が母の入院を知らず、だれをも母と信じていたこと。その事実には、ほとと安堵し、そうしてくれた神様に深く感謝している。

好きで寝たきりになったわけではない。自分の涙も母の涙も気が付かないふりをしながら、生きていたに違いないのだ。そのうえ、母の入院を自分のせいだと知ってしまったのは、あまりにも祖母がかわいそうではないか。

〈在宅介護の行方〉

母が入院して二週間ほどたったころ、祖母は静かに息を引き取った。七十四歳だっ

中村桃子
**婚姻改姓・夫婦同姓
のおとし穴**

「たかが姓名」にメス! 2060円+310

金井淑子
フェミニズム問題の転換

女の生きる場へ向けフェミニズム
の明日を語り続ける。2369円+310

B.A.カー／清水久美 訳
才女考

〈優秀〉という落とし穴 人生に
意欲的な女性達に。2575円+380

江原由美子 編
フェミニズムの主張

性の商品化など4つのテーマを選
び、議論を尽くす。2781円+380

ハルダッハ＝ピンケ他 編
木村育世 他 訳
ドイツ/子どもの社会史

1700-1900年の自伝による証言
子ども時代の資料集。7725円+380

ベック＝ゲルンスハイム／香川 訳
出生率はなぜ下ったか

ドイツの場合 男女平等の上に築
く家族の未来を展望。3090円+380

現代女性作家研究会 編
現代イギリス女性作家を読む

①フェイ・ウェルドン／②アニ
タ・ブルックナー／③P. D. ジ
エイムズ／④バーニス・ルーベ
ンス／⑤アンジェラ・カーター
46判上製カバー装 ■内容見本呈
全5巻完結——2369円+310

*定価は消費税込みです。



勁草書房

東京都文京区後楽 2-23-15
☎3814-6861 (個) 東京5-175253

た。ちょうど昼のサイレンが鳴っていたこ
ろだという。学校から連絡を受けて、急い
で家に帰って見た祖母の死に顔は、いつも
と同じように優しく眠っているようだった。
お葬式のときも、母は病院を出ることが
できなかった。
すべてが終わって、私と弟が病院に行っ
たとき、母は点滴を受けながら、病室の白
い天井を見つめていた。
「おばあちゃん、死んじゃったんだよ」
私は母にその声をかけたけれど、まっす
ぐ見開かれた目を、動かそうとはしなかつ
た。
あのとき母は、何を思っていたのだろ
う。

死の間際に祖母は、何を考えていたのだ
ろう。
何分にも、昔の話である。
きっと今は、在宅介護の仕方にも変わって
いるのだろう。男の介護へのかかわり方
も、違っているのかもしれない。医療も発
達し、在宅介護の情報も数多く流れ、助け
てくれる専門家も増え、経済的にはともか
く、精神的には介護するほうもされるほう
も昔よりはずっと、楽になっていると信じ
たい。
だが結局、在宅介護はだれか一人の肩に
(ほとんどの場合、女)重くのしかかってい
る。そのうえで何とか成り立っている現
実。それは何一つ変わっていないような気
がしてしょうがない。

それでも国は、社会は、在宅介護を勧め
るのだろうか。それとも在宅介護が笑いな
がらできるほど、日本という国の住宅は、
医療体制は、福祉は、豊かだというのだろ
うか。
父が部長に昇進をした。母はその夜、懐
かしそうに目を細めた。
「おばあちゃんが生きていれば、喜んだろ
うね」
そして、しばらくたってから、もう一言
付け加えた。
「死ぬときは、あっさりいきたいねえ」
そのせりふは、介護する身になって言っ
ているのか、される身になって言っている
のか、定かではない。

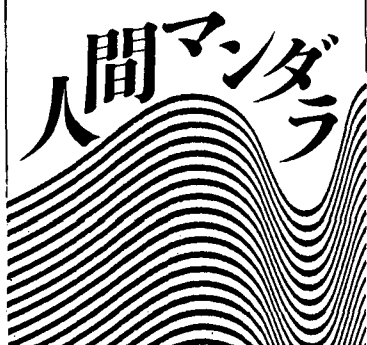
(え・小宅昌枝)

父と私

神奈川県中郡 石井しのぶ (33歳)

久しぶりに日曜日の午前中から実家に行ったときのこと。ちょうど日本シリーズ真っ最中で父は野球が見たくて仕方がない様子だった。私と子供たちを交えてみんなでお昼を食べ始めてからもずっとテレビに夢中だった。

すると突然母がつかつかとテレビの前にやって来て「まるで野球狂いだね」とか何か言いながらパチリと消してしまった。父



はテレビを消されても言い返しませんでした。黙って座っていた。一瞬「私はテレビがついていてもかまわないよ」と言ってあげようと思ったが、何でも自分の判断で決めつける母親の性格を考えると、何か言えば私までバカにされそうな気がしてやめた。

私にとってこの光景は、野球が相撲やプロレスに変わるだけで何度も見慣れたものだ。私は結婚する前は、母親の行動に何の

疑問も抱かなかった。それどころか心の中で一緒になって「テレビばかり見ているダメな父親だ」とバカにしていた。でも、結婚してからは、育ち方の違う二人が暮らすには、お互いの好みを尊重して譲り合っていかなければならないことに気付いた。

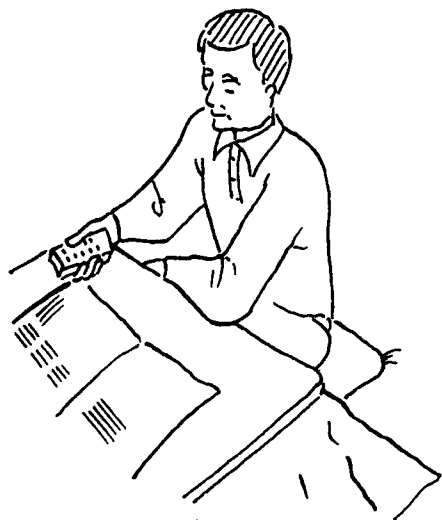
どんなに下らないテレビだろうと、好きなものを見る自由があってもいいはずだ。でも母親は自分が嫌いな番組を人が見ているとつい一言言いたくなってしまう人なのだ。

子供のころから私はずっと父親に反抗してきた。最初に何が原因だったのかも忘れてしまったが、いまだに素直に会話ができない関係にある。会ってもほとんど口をきかないか、けんかになるかのどちらかである。なぜこんなにも自分は父親を苦手としているのか分からなかったが、このごろ、ひょっとすると母親の父親に対する態度が影響しているのではないかと思うようになってきた。

母親は父親に「気が利かない」だ何だと文句を言いながらも頼りにし、二人はそれなりにうまくやっていたのかもしれない

が、子供の目からは母親だけがエライようにしか見えなかった。母親は口では「父親をバカにしてはいけない」と言っても、無口で何を考えているか分からずバカにされてばかりの父親を尊敬しろというほうが難しい。

父親は、母親に対して強い態度に出られない不満からか、時々子供をものすごい勢いでしかることがあった。小さなことで怒りを爆発させ、ベルトを持って追いかけて



くるのが恐ろしく、ますます近寄れない存在になっていった。

母親は反抗を続ける私に「もっと父親と仲良くしなさい」とも言った。でも一方で、少しでも口をきこうものなら珍しがって「しのぶがお父さんと話しているよ。こりゃ珍しい」などと言ってからかった。それがどんなに子供の心を傷つけ、父親との距離をつくることになるのか分かっていただろうか。私はまるでアレルギーのよう

に父親を避け続けた。

一般に、子供のころどんなに親に反抗的であっても自分が親になれば気持ちに通じて仲良くなるものだと言われている。けれど私の態度は昔とあまり変わらないままだった。ただ、子供として親を大切にしたい気持ちはあるので、優しい言葉はかけることができないけれども、子供と一緒に元気な姿を時々見せにいくことで、私なりの親孝行をしているつもりである。

定年も過ぎ、娘二人も嫁ぎ、現在七十歳を過ぎて娘から優しくされないでいる父を思うと、申し訳なさで一杯になる。でも会話を交わさないまま二十年以上過ぎてしまうと、どんなふうに言葉をかけていいのかきつかけすら分からないのである。もし優しい言葉をかけたら涙ぐんで大喜びするのではないかと思うと、余計に何もできなくなってしまうのである。

母は父親以外の人にはとても控え目で優しい。文句を言うことで父に甘えているのかもしれないが、二人暮らしになった今、もう少し、優しい態度で父に接してあげてほしいと思う。

(え・奥島千恵子)

アダルト・チャイルドたちへ

広野英理子

これは三三七号「ホリックファミリー（依存症家族）」の橘由子さんへの返信である。

私の前稿（三三五号「父―暗い絵―」）に対して、まさか特別寄稿という形でレスポンスがあるとは思っていませんでした。が、なるほど匿名ではこういう場合不便である。

そこで、ルール違反かもしれないが、本稿ではペンネームを使わせていただくことにした。

貴重なスペースを無駄遣いして申し訳ないが、本論に入る前に、なぜペンネームか、も説明させてほしい。私自身は、アルコール依存者の子であることを他人に知られるのに、もう何の抵抗もない（まず、そこを越えないと、アルコール依存症家庭に育った経験から回復できないのだから）。父や母の世間体も、私にはどうでもよい。もともと

責任は彼らにあるのだ。

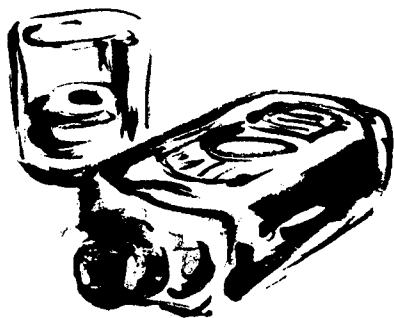
しかし、父の職業では、たまたま「信用」というファクターが極めて重要な役割を果たしている（橘さんのお父様と同じく、私の父も、表向きには立派に仕事をこなしてきたのだ。むろん前夜の酒のためにアポイントメントを当日になって延期することは多々あったが、それでも「ちょっと病弱だが腕は確かだ」ということで世間にはまかり通っていたのである）。大事な仕事をアルコール依存症の（疑いがある、だけでも）人間に任せていたとあっては、表向きの父の姿を信じて仕事を依頼してくださった方々の信用に傷がつきかねない。私個人にとっては書かずにはいけない文章であっても、第三者の信用を脅かす危険を冒すわけにはいかない。そのための匿名であったし、ペンネームなので、どうかご理解いただきたい。

家族の病

よく言われることだが、アルコール依存症というのは「家族の病」である。これは依存症患者の家族にとっては、実に腹立たしい言葉である。家族は被害者なのであって、だれも好き好んで病を得たわけではないのだから。

しかし、この言葉は正しい。風邪が家族に感染するように、アルコール依存者の家族も、その病の影響からは逃れられないのだ。幾ら体力のある者でも、家庭内で密着した暮らしをしていれば、しばしば風邪をうつされる。一番よいのは、患者と接触しないことである。アルコール依存症の場合もしかり。しかし、多くの場合、家族には、特に子供には、それは許されない。

前稿のテーマは「父」であったので、あえて母について



はほとんど触れなかった。しかし、橘さんが指摘されたとおり、家族全体のかかわりを述べなければ、この問題を書いたことにはならない。

母は父のヴァーバル・アビュースにひたすら堪えていた。言葉の暴力だけで手は出さない、という状況だと、他人にはえてして軽く見られがちである。しかし、その分だけ、問題は外部に理解されず、家庭内に潜在したまま悪化する。もちろん、心理的攻撃に加えて肉体的暴力による虐待を受けるほうが、つらいに決まっている。私は、自分の受けたチャイルド・アビュースは、例えば橘さんの経験されたものよりも軽かったと思っている。

しかし、「下には下があるのだから我慢しろ」（ちなみにこれは父がよく使った言葉である）では、問題は少しも改善されない。それに、今現に問題の渦中にいる人にとって、睡眠時間を確保することのほうが大事で、文章など書けるはずもないのだから、あえて私程度のレベルの話も書かせていただく。

黙っていると怒られる。何か言うと挙げ足をとられる。気に入るようなことを言っても「感謝が足りない」と責められ、感謝の言葉を口にしても「心がこもっていない」と決めつけられる。あなたは、何時間堪えられるだろうか？そして、何日？

普通の人なら、怒って席を立つ。家族であっても同様。だが、「おれがこの家の大將だ。おれが養ってやっている

んだ」と言われたら？　そして逃げ込んだ布団を引きはがされ、どなられ続けたら？

「出て行って自分で稼げ」と言われると、小学生程度の子供は無力である。そして母は、「あんたたちのために離婚しないのよ」と言って子供を育てた。

中学生になり、高校生になっても、私は自分の家出願望を実行に移すことができなかった。堪えている母を置いていくことになるのだから。母と一緒に家を出ようと頼むと、言い訳はご多分にもれず、経済問題であった。

「この年になるとねえ、保険の外交さんかビル掃除くらいしか仕事がないから。それに、あんたたちを大学にやれなくなってしまうし」と母は言った。確かに、私は母が三十五歳のときの子であるから、母は年を取っていたし、当時はパートの職なども大してなかったことだろう。しかし、例えば母子寮に入り、生活保護を受けても、と願う自分の心と、母の言葉とのギャップに、私の無力感は深まるばかりだった。

今、振り返れば、父と母は「共依存」の状態にあったのだと分かる。共依存については橘さんが説明してくださったが、「この人には私がついていないとダメ。私が我慢しさえすれば、この人は外では立派にやっつけていける」と、相手の問題を過小評価し、自らは、自己犠牲を払う被害者であると思うことで心のバランスを保ち、互いにぬるま湯に浸りきったような関係を続けることである。しかし実際に

は、それはぬるま湯といった甘いものではなく、むしろ底なしの泥沼と言ったほうがいい。そして、夫婦二人して、そこへ子供を引きずり込むのだ。

こういう家庭に育つと、子供はまず、それが当然の姿と思いつく。次に、世の中には違う家族の形があるのだ、と気付くが、まっとうな家庭に育った人には決して理解してもらえないので、子供は少しも楽にならない。むしろ自分の（子供はしばしば、家族の問題と自分の問題を同一視する）異常性になりつ然として、孤立感を深める結果になる（この辺りの事情も橘さんがお書きになったとおりである）。

加えて、私の母は、外部には父の酒乱をひたすら隠そうとした。本人は、父の職業上の信用のため、また子供の将来のため、と言っていた（子供がいずれ就職や結婚をするとき、身元調査をされて、アル中の子と思われては困る、と言うのだ）。あるいは母は、父の酒癖を自分の恥、と思っていたのかもしれない。父の酔い方を知っている親類ですら、「あれは嫁のせい。嫁が悪いからあんなった」と責任転嫁して、知らん顔を決め込んでいたのだから、無理からぬことである。母のそういう態度を見て、感じて育った私には、父の酒の問題を外へ漏らすことは禁忌であった。こうしてわが家は、一家として、対外的には「立派な職業のお父さんに、いつも家にお母さん、子供は二人ともいい学校へ行っている」理想的家族を演じ続けたのである（も

っとも夜中の父のどなり声が筒抜けの、すぐ裏のアパートの住人たちは、「あんな家に育ってもいい学校へ入れる」とかうわさしていたらしい。母は、そのアパートの人々は、決して付き合わなかった。

落ちた友人

橘さんの場合に比べて、私は自分が大変に幸運であったと思っていることが一つある。私は、かつてたった一人だけが、自分の同類に巡り会ったことがあるのだ。

彼は、中学二年生のときにたまたま隣の席に座ることになった同級生であった。

どうして互いの状況を知るに至ったか、今はもう覚えていない。他人には決して話せなかったことなのに、同類であるがゆえに分かってしまったのだろうか。親類も、近所の人も、あるいは私の睡眠不足に気付いて母や付近の人から話を聞き出した教師も、ただ問題の存在を知っただけで、決して理解してはくれなかったのに、彼と私は互いに登校してくる姿を一目見ただけで、分かり合ってしまうのだ。あ、ゆうべ荒れたな、と。

「ゆうべ、何時？」

「三時」

「じゃあおれのほうがまだな、十二時でつぶれたから。学級日誌取ってきてやるよ」

といった会話を交わした経験のあることが、私にとって、



当時感じていた以上の救いになっているのかもしれない。しかし、そのころの私たちには、まだ互いに助け合う力がなかった。とにかく、それぞれの家での生活をやり過ごしていくだけで、精一杯だったのだ。

彼の状況は、私よりずっと悲惨だった。父子家庭で、年の離れた姉と兄はすでに結婚したり就職したりして家を出てしまっている——つまり、アルコール依存症の父と二人きりで、まったく逃げ場がない生活。彼の父親もめったに手は上げなかったらしいが、自分の正面に息子を正座させ、戦争中の話やら昔の自慢話やらを、酔いつぶれるまで延々と聞かせ続けていた。マン・ツィ・マンはきつい。トイレに立とうとすると、「だめだ、そこで漏らせ」と言われたという。そしてひどいことに、その父親は、息子に酒を

飲むことを強いたのだ。

そうして、私が会ったときすでに、彼は、酒もたばこも覚えていた。

要注意生徒の彼と、委員を歴任していた私が、予想外にうまくやっているのを見て、担任の英語教師は、私に彼の勉強を見るようにと命じた。本来頭のよい子ではあったが、ずっと赤点すれすれの低空飛行を続けていた彼が、わずか一学期後には八十点を取ってみせたのには、教えた私のほうが驚いた。彼自身もそこに一筋の希望を見いだしたのかもしれない。父親が悪酔いしない晩に受験勉強を続け、合法的家出へと結びつけたのだ。彼は、全寮制の都立高校に合格した。

彼は私より悲惨な状況にいたが、それを逆手に取って――つまり、後に残る母や弟妹がいないので、罪悪感を覚えることなく、まんまと脱出に成功したのだ。たぶん、彼の合格を最も喜んだ他人は、私だったろう。

しかし、彼は逃げおおせなかった。

全寮制の高校では、生徒管理が厳しい。悪い芽は早目に摘んで、周りへの伝播を防ぐ、というわけだ。彼は喫煙を二度見つかかり、退学になった。

私は憤ったが、本人は存外に明るく自活を始めた。彼が働き始めたのは、新宿の大きな喫茶店チェーンで、社員寮があるため、彼は家へ戻らずに済んだ。「仕事は遅番にしようと思ってんだ。そうすれば人の遊ぶ時間は働いて、終

わったら寮で寝るだけ。自由時間は真っ昼間だから、こういう盛り場においても誘惑されなくていいよ」と言っていた。「昼は調理師学校に通ってる。バーテンダースクールにも行きたいんだ。ちゃんと資格を取らないと、バイトの仕事と変わらないから」とも言っていた。それが、私が彼に会った最後になった。

彼はある日突然、こつ然と姿を消してしまった。「寮に、服も荷物も何もかも置いたままで、何の連絡もなく。荷物も、その月のお給料も、みんな、もう結婚なさったお姉さんに取りに来てもらったんですよ」と、その店のマネージャーは、教えてくれた。

私は恐怖した。

とうとう、彼は淵から落ちてしまった。私が、アルコール依存症の父に追い詰められ、母からの助けも得られず、一人で懸命に踏みとどまっている場所。私よりも、もっとギリギリのところを立てていた彼は、ついに逃げ切れずに、落ちてしまった。

真相は違うのかもしれない。彼は何か理由があつて姿を消し、その後幸福になったのかもしれない。

だが、私には、彼がアルコール依存者の子という軛の重さに引きずられて、とうとう盛り場の喧噪のどこかに沈み込んでしまったのだ、としか思えなかった。私はおびえた。私もそういうギリギリのところに立っているのかもしれない。次は私の番だ。

自己改造

私は彼に感謝しなくてはならない。なぜなら、そのとき私は、何があっても私は落ちるまい、と決意したのだから。私は自己改造に取り組んだ。

私は、小学校高学年くらいのと時からすでに、父親の酒癖は病氣と見なすべきである、という認識を得ていた（なぜそうと知っていたのかは分からないが、これも橘さんより私が恵まれていた点であろう）。しかし、そういう認識



はあっても、幼いころから繰り返し植え付けられた（そして自らも植え付けた）根深い自己否定感覚は、容易には消えない。

きっと自分が悪いから怒られるのだ、こんな私が人に認められるはずがない、まして愛されるわけではない、孤独な

のも幸福でないのも当たり前、という感覚。それとバランスを取るために、私は外では徹底的に優等生をやっていた。幾らよい成績を取って、先生の信頼やクラスメートの尊敬やらを得ても、それは自分の内面とのギャップを拡大するだけだというのに、そうと知りつつも私は満点答案のコレクションをして自分を支えた。

それに、そうしていれば少なくとも成績を理由に怒られることはない。怒る理由などあってもなくても、やはり父は怒るのだが、それでも何とか怒られないようにひたすらよい子する、家での私。それでいて、心の内では、早く父が死なないものか、と願っていたのだ（後に、登校拒否とか自閉症とか、家庭内暴力とか金属バット殺人とかがマスコミに登場すると、そのたびに私は、そうか、こういう手があったのか、と思ったものである）。

外で家で、そして内面で——それぞれにガチガチに固まった自分の像を打ち破り、一つのトータルな自己に統一すること——それが私の命題だった。私は幼いころから自分にとって禁忌であった、ノーと言うこと、を独習することから始めなくてはならなかった。

今も、その自己改造プログラムは終わっているとは言えない。が、これまでで最もつまらなかったのは、最初の二、三年の、自分自身を直視する時期だったように思う。そこを十代のうちに通り返けられた私は、幸運だった。自らが親になってから、その作業に取り組まれている橘さんのつら

さは、私の何倍にもなるだろう。

私が、自分の子供たちを虐待せずに済んでいるとしたら（ほんとうのところは、いずれ子供に尋ねてみないと分からないが）、それは私の受けたチャイルド・アブュースが比較的軽かったこと、割と幼いうちから状況を認識していたこと、そして世の中には自分の同類がいるのだと知ることができたこと、の三つの幸運が重なった結果である。

カテゴリーゼーメン

自分が孤立した存在であると思うと、それだけでつらい。逆に、自分の状態が何かに分類カテゴリーされると、事態は何も変わらなくとも、どこか安心できるような気がする。ほかにも仲間がいて、社会に認知された存在であると確信できるせいかもしれない。

数年前に暮らしたアメリカで、私は、私の属するカテゴリーを表わす言葉を知った。ACOA（Adult Child Of Alcoholic）——もう大人になったアル中の子供——。さすが、日本よりも社会の病理が進んだアメリカである。こういう「言葉」ができていたということは、その前にかなりの「問題」が現出していたことを意味する。

アルコール依存症にかぎらず、何らかの形で親から子へ、肉体的ないし精神的虐待（チャイルド・アブュース）がなされ、その影響を引きずったまま大人になった、アダ

ルト・チャイルドたち。彼ら、否、私たちの問題をあえて一言で言うと、それはノーマルな家庭に育った人に比べて、虐待する親になる傾向が強い、ということである。アル中の子がアル中になる可能性が高いことは、よく知られているが、別の形のチャイルド・アブュースとして現われることもある。被害者から加害者への悪循環。

ちゃんと分類され、研究されると、問題はするすると読み解けるものである。極度に低い自己評価セルフ・エスティムというの、アダルト・チャイルドたちに共通の傾向である。さらに虐待を受けた娘たちは、加害者へと転じない場合、「愛しすぎる女たち」になりやすい、ということまで指摘されている。これは「アル中の妻症候群」に代表される、共依存に陥りやすい女たちのことである。

アルコールや薬物依存、あるいは暴力傾向や犯罪傾向の男たち（彼ら自身アダルト・チャイルドであることが多いという）に、多大な自己犠牲を払って尽くし続ける女たち。自ら共依存状態を求めて、そこにはまり込むわけだ。

かくして、アダルト・チャイルドたちは、加害者に転ずるか、被害者を装った共犯者になるかして、再び子供たちを泥沼へとからめ捕るのだ。

再び、母と父

しかし、私にも三十代になるまで直視できなかったことがある。母のことだ。この問題の答を見つけたのも、アメ

リカであった。

アメリカの多くの新聞に掲載されている、大変人気のある人生相談コラムがある。ディア・アビー—アビーおばさんへ—というそのコラムに、ある日こういう投書が載った。

自分の父はアル中で、ずっとヴァーバル・アビュースしていた。母はじつと堪えて、最期までみとった。そんな母を親類は聖女だという。しかし息子である私はつらかった。仕事で成功し、人生うまくいっている今だつてつらい。母がほんとうに聖女なら、なぜ子供の私は、いまだにこんなにつらいと思うのだろうか？

アビーおばさんの答は、こうだった。

それはあなたのお母さんが悪い。あなたはチャイルド・アビュースを受けていたのです。例えば自分も被害を受けていようと、大人は、そばで子供が虐待されるのを見過ごしてはいけない。お母さんは、あなたの受けた虐待に関しては、共犯者です。

この記事は、私が長年母に対して抱いていた割り切れない思いに、すべて答えてくれた。一番ひどい目に遭ったのは母だから、一番かわいそうなのは母だから、と思いつつも、なぜ私たちを連れて逃げ出してくれなかったのか、という消し切れない恨み。そんな恨みを持つことに対する罪悪感。父と離婚したほうがいい、するべきだ、と子供が確信しているのに、何の行動も起こしてくれない母への疑



問。答はこんなに明確だった。母は共犯者だったのだ。被害者でもある母を、共犯者として断罪してよいのだ。

むろん、幾らアメリカ社会でも、こういう見方に反対する人は多からう。しかし最もポピュラーな人生相談コラムに、堂々とこういう意見が載る、ということは、それが、アメリカ社会で認められた一つの判断（それも、かなりメジャーな見方）である、と言ってもいいだろう。

そういう社会が、あるのだ。

私は心底救われる思いがした。

アダルト・チャイルドたちへ

最近のアメリカでは、「アダルト・チャイルド」という考え方に対しての反省も出てきている。なるほど、同程度の虐待を受けても、何の後遺症もなく、大人になり親になっている人もいるのだ。それに、いい年をした大人が、自分の問題を何でもかんでも、子供のころ親から受けた悪い扱

いのせいにしていはいはずはない。

しかし、日本では、まだとてもそこまで社会の認識は進んでいない。遅れているだけでなく、個人的問題や家庭内の問題を表に出すことを嫌い、男に甘く酒に甘いのが、日本なのだ。だから、多くのアダルト・チャイルドたちは、例えば橘さんのように、孤立して、何とか悪循環を自分のところで断ち切ろうと闘っているはずだと思う。



「まあ酒のうえでのことは水に流して」とか、「悪気はないんだし」、「手を出すわけじゃない」、「何と言っても親子（夫婦）じゃないの」、「気の毒な人なんだから、家族くらいストレスのはけ口になってあげなくて、どうするの」などなどの無理解に、余計な苦痛を背負わせられながら。

私は、自分自身を改造してきたとは言っても、それは自

分一人のことであって、根本の問題は何も解決していない。私は父から、家から、逃げ出しただけである。父は相変わらず酒乱だし、母は「この年になってあの人を見捨てる、死ぬとき悔いが残るから」とか言って、相変わらず家にとどまっている。立派な共依存である。

私自身、年一回の実家への帰省（なぜそんな家へ帰るかという、私がA C O Aとして苦しんでいるからといって、祖父母と孫というきずなを切る理由にはならないと思うからである。余談だが、私はこの帰省を心ひそかに「地獄の家への帰郷」と呼んでいる）の折には、荒れる父の酒席にはべってしまうのだ。「私たちが来たことで興奮して荒れるのだから」「私が防波堤になれば、夫や子供に当たられずに済む」と思いながら。実家に一歩足を踏み入れたとたんに、病はしっかりと再発するわけだ。

そんな私だから大きなことは言えない。けれど、もし読者の中にアルコール依存症の夫を持つ方がいらしたら、どうか子供の手を引いて逃げ出してほしい。結局、家へ戻ることになるかもしれない。それでも、逃げるポーズを取ってくれるだけでも、子供は少しは救われるはずだから。

そして、私たちアダルト・チャイルドたちへ。悪循環を断ち切って回復する、という作業には、年単位の時間がかかるけれども、とにかく何とかそれを済ませて、さっさとこんなことから卒業しましょう。子供たちのために。

（え・佐藤瑞江子）

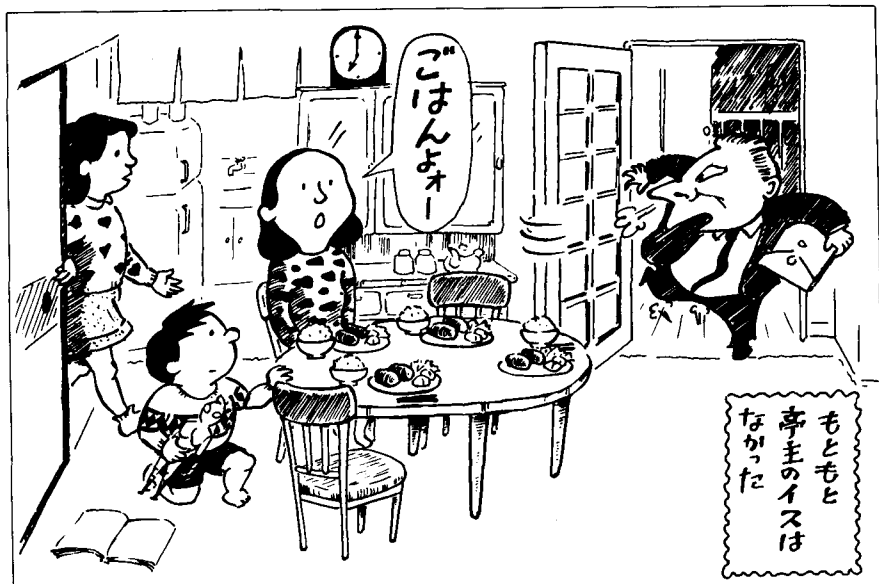


平成
おたけげ-ジョン

⑤ バブル崩壊で

亭主の帰宅時間早まる

西田淑子



私の愛する外国人

新井 ひふみ

「どうして離婚したの？」と、これまで何度尋ねられたことだろう。実はこれこれ……と理路整然と答えられればいいのだが、こと離婚になるとそうもいかない。けんかの原因や別居のきっかけなどを挙げることはできて、はてそれがほんとうの理由かと聞かれると自分でも分からない。ある友人が「火事の出火原因ではあるまいし、一言で説明できるわけがないでしょ」と言ったが、まったくそのとおりである。

夫へ無関心になつて

別居のきっかけになったのは、カナダに

来て三年目が終わろうとするクリスマスに、モントリオール、ボストンへ旅行したことだった。旅行中にけんかしたのでない。その反対である。数時間のドライブ中、すぐ隣に座っている夫に対し自分がひどく無関心になっているのに気付いたのだ。それまではどんなにもめても、大声で議論しどなり合うパッションがあったのに、ふと気付くとまるで高校時代に好きでもない男の子とデートしたときのように、共通の話題すらないような関係になってしまっていることを発見したのである。

ああ無関心の風が吹いた……そう思った

とたん、このまま一生を無関心な相手と暮らすことが、自分自身に対し、相手に対し、人生そのものに対し何たる冒瀆かと感じたのだった。あれから約二年がたち、多くの友人たちと結婚や離婚について語り合った末に思うのは、恐らくだれの結婚生活にもこうした無関心の風が吹くことはあるのだろうということ。ただ、無関心の風をすいすい乗り切れる関係と、そこで座礁してしまふ関係があるのだと思う。私の結婚生活は簡単に座礁してしまったのである。

一九九〇年の大晦日に私は家を出た。とありあえず居候できることになった友人のア



トロント キーンズパーク

パートへの引っ越しは、荷物が少ないだけに半日足らずで済んだ。トラックを運転してきた夫に「それじゃあね」とあいさつし彼がドアを閉めたとたん、思わず涙が出たが、別居自体は正しい決定だという確信があった。その数時間後に、友人たちとバーで新年を迎えたとき、「今年は幸せになってみせる」と年頭の誓いをした私である。

さて別居はしたもの、離婚が即座に決まったわけではない。その問題解決のために相変わらず私は週一度ドクター・スタインのところに通った。それまで七カ月にわたって受けていたカウンセリングと別居の関係は明らかだった。マリッジ・カウンセリングを受けるということは、結婚生活に問題があるのを認めることだ。そしてそれは、問題のある結婚生活は間違った結婚生活だという考えに基づいている。だからいったんカウンセリングに入ったら、問題を解決できないかぎり、婚姻を解消するのが当然の帰結だというロジックがある。

こうした北米的マリッジ・カウンセリングのロジックは、罪悪感から離婚せずに不幸な生活を送り続ける必要はないのだとす

る点では建設的だが、問題を抱えながら生きていくのが人生であるという真理を悟った人にとっては、逃避的に映るだろう。いずれにしても別居した時点の私はカウンセリングのイデオロギーに浸っていたから、別居は積極的な人生の第一歩だと感じた。

ところが、である。私は別居から三カ月目にしてカウンセリングのセッション中、こともあろうにスタインから暴行を受ける羽目になるのである。

カウンセラーのセクハラ

それは復活祭の金曜日の午前中だった。いつものようにスタインの自宅に出かけたのだが、その日は最初からどうも様子がおかしかった。日常生活の話をしているのに、話題が自然とセックスに移っていくのだ。しかし普段は話さないようなことを話すのがカウンセリングだし、スタインに対する信頼感もあって、特に警戒心を持つには至らなかった。三十分もしたころに、突然スタインが「君は何か隠している」と言い出した。「そんなことはありません」と答えると、「いや、君は僕のことを家具か何

かのように扱っている。僕だって人間だ」などと言うのだ。そのうえ自分は子供のころハンガリーでナチスの迫害に遭って母親が殺され、すんでのところで叔母に連れられて逃げた云々と、非常に個人的なことを語りだしたから私はとてつもなく混乱した。

何が一体どういう順序で起きたのか、はっきりと記憶はないのだが、気付いたときにはスタインのひざの上に抱かれていた。それは最初「赤ちゃんに戻ってお母さんの胸に抱かれたときのことを思い出してごらん」ということだったはずなのだが、スタインはいつの間にか私の母親役から兄役に変わり、そのうち昔のボーイフレンドになっていた。そして何と私の胸に触れたり、キスしたりしているのである。

どうしてそんなことが起き得るのかと尋ねられれば、一種の催眠術だと答えるしかないだろう。心理学の知識を使ってこちらを精神的に無防備にしたうえで、次第次第に頭を混乱させ、意識はあるのに意志はない状態に持っていかれたのだと思う。そんなばかなことがあるかと思われる方もあろうが、事実なのだ。スタインというのは五

十代も後半の太ったはげ頭の男で、しかも体臭がひどかったから、正気ならとてもではないがキスなどできない。実際唇が触れた時点でも、ぼんやりと「わあ臭い。わあ醜い。しっかり目を閉じて息を止めなくちゃ」と考えていたのだから、まったく妙な話である。

いずれにせよ、混乱した頭で「君のアパートで来週セックスしよう」というスタインの言葉を聞き、代金として八十ドル余りの小切手を切って家に戻った。どうも変だと感じだしたのは数時間たってからである。何が起きたかは覚えていないのに、どうしてそうなったのかは覚えていない。突然スタインと恋に落ちたのか、それともただ単にセックスしたかったのかなど二日ほどとも思い悩んだ挙げ句、日曜の晩になってやっと「はめられた」と気付いたのだった。結論から述べるなら、このトロント大学教授であり五人の子供の父親でもあるカウンセラーは、以前にも女子学生にセクシャル・ハラスメントで訴えられたことがある常習犯だった。もちろんそんなことは知らなかったから十カ月もカウンセリングを受

けたのだ。運が悪いとしか言いようがない。いずれにせよスタインから「暴行を受けた」と認識した時点で私はまず大学のセクシャル・ハラスメント担当官に報告し（彼女は即座に「これは刑事事件です」と言った）、同時にスタインに電話を入れて「法的措置を取ることも考えている」と伝えた。

その後の一カ月は学期末試験の時期とも重なり、カナダに来てから一番忙しい季節となった。連絡を取った先は、レイブ・クライシス・センター、トロント大学、ウイメンズ・センター、医師会、そして警察など十カ所ほどに上る。警察に電話を入れると、すぐに性犯罪担当者がパトカーで迎えに来て、数時間にわたり詳しい調書を取られた。その結果、スタインは六月に性的暴行容疑で逮捕された。幸運なことに担当の検察官も非常に理解があり（彼はゲイの活動家だった）、不愉快な思いは一度もしなかった。しかし残念ながら九月に行なわれた裁判では、物的証拠がなく、ほかに目撃者もないことから「疑わしきは罰せず」の原則に従い、無罪判決が下りた。

このほかオンタリオ州の人権擁護委員会



トロント ヨークビルの街並み

や犯罪被害者救済委員会などにも連絡を取ったが、事件から数カ月過ぎるころには当初の怒りも若干静まり、むしろ早く忘れることが自分のためだと思ふようになったため、これらの訴えは取り下げることにした。ウイメンズ・センターの弁護士を通じて行なったトロント大学との交渉では「有罪判決が出たら何らかの措置を考慮する」ということになっていたが、無罪判決のため、最終的にスタインは一学期間担当の授業から外されただけで、今も教授職についてたままである。

私がスタインに対して心底怒りを覚えたのは、具体的な行為の不愉快さもあるが、それ以上に数カ月にわたって培った信頼関係を台なしにされたためであった。カウンセリング料金として払った二千ドルはすべてパーになり、暴行事件の傷をいやすためにさらなるカウンセリングー通いが必要になるとは冗談にもほどがあるではないか。結局この事件で私はカウンセリングそのものに不信感を抱き、その後ほかのカウンセラーに行くことはやめにした。

事件後あちこちに連絡を取る中で紹介さ

れた「カウンセラーによる性犯罪被害者の会」で聞いたところでは、カウンセラーの一分割は患者と性関係を持ったことを認めているというのだから言語道断である。会合に現われた被害者の中には、十数年前のカウンセリング中にセックスした挙げ句、妊娠中絶して以来、男性と付き合うことができなくなり、にもかかわらずいまだに「いつか彼が私を愛してくれる日を待っている」などと口にした女性をはじめ、見るからに異常な人物がたくさんいて、吐き気がするやら同情するやらであった。カウンセリングを受ける時点で精神的に弱くなっているのだから、そこを利用して信頼している人から暴行されれば、極度の混乱から本格的に異常を来しても当然である。被害者の多くは学歴も高く、経済的にも恵まれた人たちだが、その彼女らが事件後精神病院に入院したり自殺未遂を図ったなどと泣きながら告白するのを見ると、社会の病を見せつけられる思いで、気分がめいいた。私もひどい目に遭ったのだが、何年間もカウンセリングに通うたび、オフィスでセックスした人などに比べればずっと幸運

だったと思う。

一人の自由

そういうわけで結局カウンセリングは何の問題も解決してくれなかったが、別居から数カ月するうちに私は離婚の意志を固めた。一人になって寂しくはあったが、結婚している間音信が途絶えていた友人たちとの付き合いが復活したばかりか、しばらく休んでいたライターとしての仕事も再開した。別居後初めて一人で映画を見に行ったとき、また一人でコーヒーショップに入ったときなど「ああ何て自由なんだろう」と監獄から出てきた人のような解放感を覚えたものである。人妻時代にはそんなことすらできなかったのだ。そしてそれは私の状況が特殊だったのではなしに、カナダで当たり前の結婚生活を送った結果なのである。さて離婚を決めたのはいいが、カナダでは日本のように簡単に離婚できない。キリスト教の背景を持つ社会で、以前よりはずっと法的に自由化されたとはいえ、最低一年間の別居を経なければ離婚申請できない規定になっているのだ。「申請」というの

は、協議離婚が存在せず、すべての離婚は裁判所への請願に基づき判決の形で許可されるからである。

私たちの場合双方が離婚に同意していたうえ、親権を争うべき子供もなく、問題になるような財産もなかった。別居の際に家財道具を分けて、私がコンピュータを取る代わりに向こうはエアコンを取る、といった具合ですべての分与も済んでいた。また結婚していたときから二人の財布は別々だったから、扶養の問題もなかった。にもかかわらず、カナダの慣例に従い双方の弁護士の間で交渉が行なわれた。離婚のための法的プロセスが煩雑であることに加えて、夫が叔父の弁護士に相談したことから私の側も代理人が必要だということになったのだ。いずれにしてもカナダでは、弁護士なし司法書士がかかわらない離婚は極めてまれである。

離婚の手続きはまず別居契約書（セパレーション・アグリーメント）の作成から始まった。法的に必要な手続きではないのだが、弁護士に薦められたのである。私は当時学生で大した収入もなかったから、費

用は「リーガル・エイド」と呼ばれる公的扶助組織から直接弁護士に支払われた。その意味で私の財布は痛まなかったものの、プロセスを複雑にすればするだけもうかる弁護士の存在によって、ただでも面倒な手続きが余計煩雑になるというのが実情だ。

結局弁護士のもとに五、六回も通い、何通もの書類にサインしたうえ、離婚判決の通知が郵送されてきたのは別居から一年三カ月たったからのことである。私たちは日本で結婚しカナダでは届けを出していなかったが、国際法の規定によりカナダでも婚姻が成立しており、離婚の際には居住地の法律に基づく解消が必要であるために、こうしたプロセスを取るようになった。簡単に離婚させないような法律にはそれなりの倫理観が反映されているわけだが、ただでも楽しくはない離婚のために第三者と何度も話し合わなくてはならないのはそれ自体が罰則のようなものである。離婚するなら日本に限るといのが実感だ。

こうして私の国際結婚は五年足らずで終わりを遂げた。その前に交際期間が一年半あったから、かれこれ二十代の半分以上に

及ぶ関係だったことになる。結婚の意味もよく分からないままやみくもに飛び込み、若さと未熟さで相手と自分とを傷つけた日々だったかもしれない。夫とはその後ほとんど音信のないままだが、一日も早く心の傷をいやして、再び友人と呼べる日が来ることを祈っている。

別れてから何人もの友達に「やっぱり国際結婚は難しいのかしら」と尋ねられる。個人的には国際結婚が必ずしも同国人同士の結婚よりも難しいとは思わない。結婚後何年も何十年も仲良く暮らしているカップルを見れば、異なる文化を持つ二人であってもうまくやっていくことは可能だと分かる。私たちの場合は、むしろ最初から結婚についての考えが甘かったのだと思う。「結婚しさえすれば何もかもうまくいく」はずがないのは相手が何人でも同じだし、「だめだったら離婚すればいい」と考えて結婚したら、離婚に終わるのは目に見えているのだ。

国際結婚の難しさ

ただ国際結婚に独特の難しさがあること



トロント ヨークビルの街並み

も事実である。別々の国で生まれ育った二人が一緒になれば、通常どちらかが「よそ者」として暮らすことになる。そして異文化の中での生活は常にストレスがたまるものだ。言葉については、ある友人が「ほかの人の言うことは分からなくてもダンナの言うことは分かるもんよ」と言ったように、障壁はそれほど重大ではない。大変なのは文化の違いだ。二人の意見が対立したとき、それが個人的な見解の差なのか文化からくる常識の違いなのかを見極めることは困難だし、仮に見極めたところで受け入れられるとは限らないからだ。

ある友人はエルサルバドル出身の男性と結婚している。付き合っているところから、はたから見ても愛し合っているという感じがするカップルだが、常識の違いはすさまじい。披露宴の日、新婦側の友人は日本人もカナダ人も開始時刻の六時には会場のレストランに顔をそろえたのに、新郎側は幾ら待ってもだれもやって来ない。出席者はもちろん新婦の心配は大変なものだったが、新郎は「そのうち来るさ」と動じる様子もない。結局彼の親戚や友達が来たのは

二時間以上も過ぎてから。空腹のまま待たされた私たちはあきれ果ててしまったが、当人たちにとっては当たり前のことだから謝るわけもない。「彼女大変ね」と新婦側友人一同はすっかり同情してしまい、彼女もこの日ばかりは相当頭にくたようだった。とはいえ、その後数年たっても仲良く暮らしているから、文化の違いが破局につながるかと決まっているわけではないのだ。

ただ異なる文化的背景を持つことで、男と女の間にいつもある断層にもう一つ別の断層が加わるのだから、何かがかみ合わなくなっただけには、加速度的に離れていきやすいということはあるだろう。その点で国際結婚は内在的に地盤が緩いと言えるかもしれない。

文化の違いの中で意外と大きいのは宗教の差だ。特に敬虔な信者でもなく、表面的には「無宗教」を名乗る人でも価値観に宗教的伝統が反映されているものなのだ。

実は私がこのことに気付いたのは夫と別居してからのことだ。それまでカナダ人はみんな同じような価値観を持っているのだろうと漠然と考えて疑わなかった。夫やそ

の家族が何の目に見えた宗教活動もしていないことが直接の原因だったが、より重要なことは、彼らの周囲はほぼ全員が同じ宗教的背景を持っていたためなのである。

多人種、多民族、多宗教のカナダだが、暗黙の了解により、大抵の場合同じ背景を持つ人たちが集まっているものなのだ。夫の周囲は今考えると、ほぼ全員がプロテスタントでも特に厳しいメソジストや、長老派を起源とするカナダ合同教会系の人々だった。彼らの特徴は一言で言うともじめで禁欲的。「ぐずぐず、うだうだ、面白おかしく」の正反対である。一緒にいるといつの間にか肩が凝って、くたびてくる。夫の場合、とにかくじっとしていることができず、いつでも何かしていなければ気が済まないようだった。土曜日は朝から太極拳のクラスでその後ボランティアの英語指導。たまの休みだからのんびりしたいという私をしり目に、時間があくと友人を招待するか映画に行くか、何かの活動をしなければだめなのである。

当時は単に性格的なものかと思っていたが、そうではない。プロテスタントが一樣

に早飯食いなのに対し、同じカナダのキリスト教徒でも、カソリックはゆっくりご飯を食べるというように厳然たる差があるのだ。こうした生活態度は、別に神の存在とか死後の魂の行方とか、いわゆる「宗教的」な理念とは直接結びつかないが、その中に存在する倫理観の反映なのである。

さて国際結婚に破れた私は、これで外国人の男に懲りてしまったかというところ、それがまったくそうではないのである。別に外人のほうが日本人よりいいと思っているわけではない。それどころか「外国の男性はもっと進歩的で自由でいいでしょう」などと言う人々には、いつだって「そんなことはありません。こと男に関するかぎり西方浄土はないのです」と自信を持って答えるくらいだ。

実際、長所短所色々合わせて考えてみると、日本の男女関係は世界の中でもそれほど悪くはないとさえ思う。そもそもエデンの園の昔から女の性に懷疑的なユダヤ・キリスト教文化と比べたら、天照大神に発し、女系社会の伝統を持つ日本のほうがどれだけ女性に優しいかしかない。昨今日本

でも耳にする「ウーマン・ヘイティング」を英語では通常「ミソジニー」と言うが、これなど語源はキリスト教以前の古代ギリシャ語にさかのぼる。日本語には直接対応する言葉のない西洋独特の概念だ。これ一つでも西洋文化がいかに歴史的に女嫌いかを察することができらるだろう。カナダに数年住んで日本に帰った女友達なども、口をそろえて、「男に関しては日本のほうがいい」と言っている。もちろん、何がどういいのかについては、ことがことだけに個人的な経験による個人的な統計の結果でしかあり得ず、科学的根拠などない。

いずれにしても外国人の男一般が、日本人の男一般よりも女にとって好ましいわけではないことだけは強調したい。もっとも私の場合、前にも述べたように二十歳過ぎてから日本人の恋人を持ったことがないので、実体験からくる説得力がないのは困ったものだ。そして私が懲りずに相変わらずその後も外国人の男とばかり付き合っているのも、結局は慣れの問題にすぎないのかもしれない。

たまたまカナダ人と結婚したために住み

着いたトロントだが、ここで日本人と知り合う機会は多くない。ときに仕事で会う駐在員は企業の方針もあってほとんどが既婚者である。まかり間違って独身者がいても、何しろ大学時代以来外国暮らしが通算七年にもなってしまうので、日本人の男とのきっかけのつかみ方も知らない。自然自然と個人的な知り合いは外国人になっってしまうのである。

夫と中国で知り合ったのが二十三歳のとき、結婚生活三年半を経て別居したのがそろそろ二十九になるころだったから、かれこれ六年ぶりにシングルシーンに返り咲いたわけだ。もちろんカナダにはヨメに來た私だから、トロントでのデートは経験がない。貴重な二十代のブランクの結果、別居後の私はまるで十六歳に戻ったかのように胸をドキドキとさせつつ新しい出会いを求めることになったのだが、次回で私のシングル・アゲイン生活を報告して拙文のまとめとしたい。

(写真提供・カナダ・オンタリオ州政府観光省)

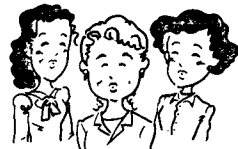
一 つづく

20歳の頃、50歳の私を想像することはなかった。

50歳になった今、80歳の私を想像してみる。

20歳の目でみれば、30年はまるで永遠の長さに等しいのに。

50歳の今、それは隣の駅のように近くていとおい。



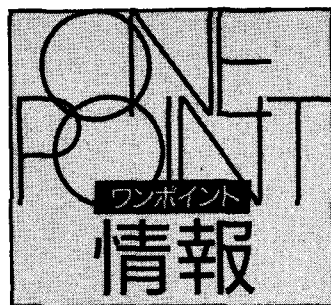
11月1日から東京海上は年金払積立傷害保険を発売しています



くわしくは「わいの」あて
電話で資料請求して下さい

わいの指定代理店
東京海上火災保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771



●私のコンパニオン・アニマル●

わが家の アイドル

埼玉県越谷市

嶋田たい子

娘が学校の近くで子猫を拾ってきた。数年前、シーズー犬を飼っていたが朝晩の散歩や食事の面倒、排泄などすべて私一人で大変だった。その犬は近くのスナックのママが私が仕事で遅くなったとき、連れて行ってしまっ

て結局あげたという苦い経験がある。
抱き上げたり、はおずりする

のはだれでもできる、子供たちはそういうことしかやらないのでペットを飼う資格はわが家にはないと断固反対した。しかし紙袋から出てきた白地に黒の毛が少し混じった、十センチくらいはまだ目が見えないのかヨタヨタした子猫を見てしまったら、何も言えなくなった。牛乳を温め哺乳びんで飲ませるとチユーチュー吸う。寝るときは娘が抱っこして寝ていた。

それから四カ月、今では私の布団の中に入り丸くなって寝ている。来たばかりのときは家人の頭や肩にヒョイと飛び乗っていたが、大きくなってきた今は高いところに乗って家を見回している。買物に行ってはだれ彼となく猫のためにオモチャを買ってきてしまい、まるで赤ん坊のいる家のように玩具が家のアチコチに置いてある。肝心の猫はそれらにまるつきり関心を持

たず、小さな紙切れやヒモを相手にたわむれている。夜勤で遅く帰ってくると、家人がぐっすり寝ているのにトントンと二階から下りてきて、玄関のマットの前で座ってお出迎えしてくれる。その姿を見ると疲れも吹っ飛んでしまう。とりわけおふろが大好きで、入浴しているとひっそりと湯殿に座り、お湯や水を浴びても逃げようとせず、シャンブーされるまでじっと待っている。

八月には娘が運転する車で私が助手席に乗り、後部座席に夫が抱いて新潟まで行ってきた。初めての長途のドライブなのに泣きもせず、窓の景色をながめていた。雌と思っていたのに小さなオチンチンが出てきた。「ニャン子ちゃん」から「ニャン太ちゃん」と最近、呼び名が変わった。夫は「チビ」「ビー助」「ゴン太」と毎日名前を変えて

呼んでいるので振り向こうともしない。わが家はニャンちゃんに振り回されている。情が移るの怖いこともあるが……。

ヒメの手を借りて

東京都足立区

須賀まり子

膠原病に悩む私はどうしても家にこもりがちだった。その私を散歩に連れ出してくれたのがボクサー犬のヒメ（雌五歳）である。ヒメは私の家の近くにいる、兄の会社の番犬。三年前には、東日本チャンピオンの荣誉に輝いた実績を持つ。

ところが、今年五月、私が久しぶりに兄の会社を訪ねたとき、ヒメは過去の栄光も薄れ、汚れた犬舎にはこりだらけの体、何とも痛々しい姿であった。その日から私はヒメにかかわるようになる（見過ごすことが

できなかったのだ。二日がかかりで犬舎の掃除。それからヒメの体をシャンプー。みるみるうちにヒメは輝きを取り戻す。よく訓練されているので、散歩に出てもぐいぐい引っ張ることは



ない。ヒメは私をエスコートするかのようにならなかに寄り添い、時折私をちらりと見上げる。初めはすぐ裏の公園へブラブラと。私の体が慣れてくると、その先のもっと広い公園に行ってみようという気になる。二ヵ月もたつと今度は自転車ですることを試みる。私とヒメの行動範囲が少しずつ広がっていく。気が付けば、ふわふわと頼りな

げだった私の体が、両足でグンと踏ん張りの利くほどになっていった。

さらにヒメは、私にささやかなボランティア活動を思い立たせる。公園で気になるのが取り残された犬のフン。そこで、歩きながら目についたそのフンの始末を始めた。一人ではとてもする気にはなれないが、ヒメと一緒にならぶつぶん文句を言いながらも何とか続けられる。私とヒメの歩いたところだけでもキレイにできれば、と思っ

る。今やヒメは私の相棒。単調になりがちな私の生活に潤いを与えてくれる。

夕方、ヒメは私の姿を見つけると、全身をバネにして何度も跳び上がって喜ぶ。そんなヒメの笑顔がこのうえなくうれしくて、私は毎日いそいそと犬舎のほうに向かってしまう。

息子とザリガニ

横浜市戸塚区

万江 初美(34歳)

小学一年の長男は、幼稚園の通園バスでは味わえなかった寄り道の楽しさを覚えてしまい、ピカピカのランドセルは、朝、家を出ると、鉄砲玉。花を摘んだり、石ころを拾ってきたり、その日も、泥だらけで帰ってきた。

「ほら、見て、見て」と、上機嫌で差し出した空容器の中には、三センチメートルくらいのザリガニの子供が一匹、丸くなっていた。

「やっと、捕まえたんだ」と、得意満面。彼にとって、ザリガニを見るのも、捕まえるのも、生まれて初めての経験である。

親ばかな私は、早速水槽を用意して、飼い方の本を子供と一

緒に見て、お勉強。ザリガニのえさは、煮干しとか、野菜の切れ端など。あまり手間がかからないのが気に入った。それに、とても静かである。静かすぎて、存在感も薄れかけてきたころ、

「あれ、なあに」と、息子が水槽を指差した。つられて、のぞき込むと、抜け殻が転がっていた。ザリガニは脱皮していた。一回り大きくなったザリガニを見て、息子の目が輝いた。三月生まれの彼は、ことあるごとに早生まれのハンディキャップを思い知らされていた。大きくなりたい気持ちが一匹強い息子は、嫌いな野菜を食べだした。「僕の服は、大きいのにしてね。もうすぐ脱皮するよ」

幾ら口で言い聞かせても直らなかつた野菜嫌いが、ザリガニの脱皮のおかげで、少しずつ直っていく。ザリガニに刺激さ

れ、ザリガニと競争している息子
子が、何ともこっけいで、いい
らしい。

どうか、バルタン星人もどきの
ハサミを振り上げて、暴れる
ことだけはまねしないでくれ
と願いつつ、キャベツを一切
れ、水槽に落とす。ザリガニの
成長は、息子の成長でもある。
情も移って、わが家の食卓から
エビ料理は消えつつある今日こ
のごろである。

犬はかすがい

東京都北区

安村 豊子（28歳）

真っ黒な真ん丸の目に、べっ
たんこの顔。

ふさふさした薄茶の毛なの
に、口の周りだけまあるく黒い
のが泥棒みたいで聞かれて見え
る。それがわが家に来て三年目
の「お犬サマ」カイちゃんであ

る。

ペキニーズという小型犬で、
昔は中国の宮廷で飼われていた
というだけあって動きはおつと
りしている。が、一たび食物を
目にするや、たちまち^{ぞんざい}強猛な生
き物に変身し、とても高貴なお
生まれには見えないのである。

カイちゃんが来て変わったこ
とといえば、旅行しずらくなっ
たこと。一泊なら家に置いて、
だれかに様子を来てもらおう
が、それ以上になると預け先を
考えなければならぬ。いつか
会社の保養所を借りようとした
らそれが一泊二千元で、犬のホ
テルは三千元。もう大笑いであ
る。そんなこんなで預けても、
旅先で「カイちゃんどうして
かなあ」と寂しくなったりし
て、飛ぶように帰る。

大きな目は涙目で、目やにが
よく出る。いつかしきりに顔を
こすりつけていると思ったら、



目ははれて「ものもらい」にな
ってしまった。子供のころ、母
がしてくれたことを思い出し、
薬局でホウ酸とガーゼを買って
きて、毎日ぬるま湯で洗った。
嫌がってしきりに顔をブルブル
するカイちゃん。はれは間もな
く引いたが、黒目が白く濁って
いる。獣医に電話したら「多少
あとが残るかもしれないが、大
丈夫」と言われ一安心。幸い完
治して元の真ん丸黒目に戻っ
た。まさに親の心境であった。
散歩はなるべく毎日するよう
にしている。犬連れ同士で自然
に、あいさつもする。共働き二
人家族の中でひたすら待つ身の
習性か、だれが来ても真っ先に
跳んで行きしっぽを振る。

番犬にはならないねえと笑
い、ふと見るともう無防備な格
好でグーグー寝ている。

たまに夫婦で険悪な雰囲気にな
ると、カイちゃんがまさに
「おろおろして」こちらを見て
いる。その様子がおかしくて、
もうけんかにならない。駄犬の
ように見えても（ほとんどそう
だが）カイちゃんは家族なの
だ。

母の思案

東京都足立区

加藤 洋子（50歳）

八月十四日の夜更けに実家の
近所の犬がけたたましくほえ、
そのときから猫の鳴き叫ぶ声が
三日も続いていたそうだ。

雨が降る中、何度入れても犬
が家から飛び出して、いつの間
に家庭に紛れ込んできた子猫を
前足でかき寄せているので、つ

いに帰省していた姉が母と相談のうえ保護したそうだ。

お盆にやって来た黒い子猫はえさを食べることもできず、二時間ごとにミルクが必要だった。

母は、入退院を繰り返している病弱な三女と二人暮らしであり、八十一歳の高齢。脳梗塞の後遺症もあり、とても猫を飼える状況ではない。それでも十六歳で亡くなった伯父が愛犬を猫の姿に変えて、送り届けたのだと言って飼うことになった。

その犬の名前を取って「ベリ」と名付け、妹と二人がかりでミルクを与え育ててしまった。直接拾い上げた姉も金曜の夜は職場から二時間もかけて子猫の世話に通った。

今では、お座敷犬になっている雑種の雌犬「マリ」も、数年前は野良犬だった。昔飼っていた猫が出産すると、子猫の目が

開かないうちに川へ流した罪滅ぼしだと言って猫の名前を犬に付けたのだったが、聴導犬ヨロシク耳の遠い母に來客や電話を知らせてくれる。

病人と老人の、ともすれば暗く沈みがちな家だけれど、この犬と猫が私たちを招き寄せる。

「哺乳ビンを両手で抱えて飲む子猫の姿がかわいい」とか、母が腰を痛めて長く寝ていたとき、寝たまま教えたので、「お



手！」と号令をかけるとコロんと横になって手を出す犬が、おかしいとか、にぎやかな笑い声があふれる。

近々再び妹が長期に入院する予定だが、母は犬や猫と独りで

暮らすという。子猫が来てから、母は体の不調を訴えることが減り、元気になった。二匹のために遺産を幾らずつにしたらよいかと母は今思案中である。

犬との歴史

神奈川県藤沢市

関 米子

今、わが家にいる犬は三代目である。最初の犬は三人の娘がまだ幼いころ、知り合いの家に生まれた子犬をもらってきて育てた。芝犬の雑種で、白いソックスをはいているようでかわいからというこだった。

来たばかりのころ、ゴローと名付けたその犬の首に手をかけている、幼い娘と一緒に写真を撮る。今も飾ってあるが、ほんとうに白いソックスをはいたように見え、傍らにひざをついている娘の足にも、転んだらしい傷跡が

しっかり写っているのが愛敬である。

そのゴローは六年ほどいてヒラリヤで死んでしまったが、それはおとなしい犬で、子供の相手をよくしてくれた。

三年ほどして、今度はマルチーズと暮らすことになった。子供のいない弟の家で飼っていた犬だが、待望の赤ちゃんの誕生で困っているという話なので、連れて来ることになった。赤ちゃんを見に行き、その犬のかわいらしさについて、そういうことになってしまったのである。ペペという名が付いていた。

ペペは九年ほど一緒に暮らし、春の初めに死んでいった。そのころ長女の結婚が決まりかけ、私はナーヴァスになっていた時期でもあって、犬がだんだん弱っていくのがとても切なかったことが忘れられない。今で

も静かな雨の日など、じっと寝ている犬を見守って雨の音を聞いている、あのころの自分を思い出すことがある。

そして今はロンというヨークシャーテリアで、この子は十二年の老犬になるが、三代目ともなると家族の一員としての存在が一層強くなっている。娘ばかりなので犬はみんな男の子だが、三匹の犬はまさにわが家の歴史でもあった。喜びも悲しみも、日々の生活にはいつも犬の姿があった。そしてこのロンが多分わが家の最後の犬になるであらう。

コンパニオン・アニマルを育てましよう

横浜市鶴見区

清水 宏子(37歳)

二十一世紀に向けて、私たちの環境は、今まで以上に「心のあり方」が希求され叫ばれるの

ではないでしょうか。その基本は、家庭の安らぎ、人との交流、マナーの確立だと思います。「もしもし、戸塚トラ吉の母ですが……」と、産まなくても母になれるこの心境にホレボレしながら一日が始まるわが家は動物病院。ここ数年、日本でもベ

ットからコンパニオン・アニマルと呼ばれるようになってきている動物たち。過日、世界小動物獣医師会でカナダを、世界放射線学会でオーストラリアを訪れる機会があったのですが、そのとき感じたことは、日本に比べ、動物のしつけが大変行き届いていることでした。人に飛び付かない、かまない、むやみにほえない、人と同じ步調で散歩するなど。臨床に携わる私たち獣医師は、病気の治療だけでなく、コンパニオン・アニマルに対する基本的な考え方やしつけを含めた飼い主への指導

も、行なうべきだと思っています。さらには、動物を飼った経験のない人にも、動物が社会に果たしてくれている有用性を理解してもらい、社会に受け入れてもらえるよう働きかけ、にかにはやり出すという一過性の意味のブームを越えて、コンパニオン・アニマルのいる暮らしが定着していけるような社会にできた……と考えています。

価値観の多様化している今日、子供の環境はというと、五感をたっぷり育てる前に情報過多に感わされ、恐ろしくいろいろな一化した非個性的な教育を外部に委託し、学歴や偏差値を競っています。その結果、心を病



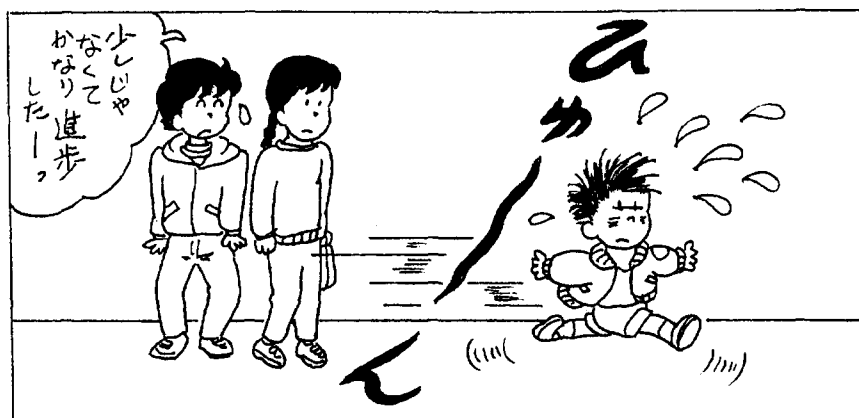
む青少年が増えています。また、文化の都会化・格差族化に伴い、住宅事情や勤務条件などの様々な制約により、カギっ子や一人っ子が増え、自然や動物に触れる機会も少なくなっています。小四・小三・小一の母としても、こんな時代こそ動物を飼うことで、言葉は話さなくても信頼できる相棒との交流を生かし、心の豊かさをはぐくみ、命の大切さを体得してくれたら……と思います。

動物を飼っていらっしゃる方は、ぜひ正しいしつけをして、家族だけでなく周りの人にもかわいがってもらえるよう、つまり自分たちだけでなく社会にとつてのコンパニオン・アニマルになれるような飼い方をしていただけたら……と、これが人間とコンパニオン・アニマルとの橋渡し役をしている一女性獣医師の願いです。

(え・早乙女光子)







読・ん・で・み・ま・し・た

イラスト読本

性の歴史

生物として、動物として、人として

黒田 弘行 著

東京都中野区

鈴木由美子



いよいよ新指導要領による性教育がスタートしたが、性を言葉で語る経験の貧しい日本の教師や親は困りはてている。従来のオシベとメシベを精子と卵子に変えるだけでおろおろし、性行為を教えるとなると途方に暮れるありさま。

この本は、公立小学校教諭である著者が、豊かな性教育のために、自然史の中での人間の性の位置を解きあかそうと試みたものである。

同心円の外から中へ入っていくように、「生物としてのヒト」に始まり「陸上脊椎動物として」「哺乳類として」「直立二足歩行をするヒトから社会的人間へ」

と、解説は進む。読むうちに、人間がしている性行動や出産育児が、生物の壮大な進化の、どんな段階にあるかを把握できる。

たとえばサケのメスが産卵すると、オスは精子を卵にふりかける、これは体外受精。陸に上がった爬虫類からは、オスのペニスをメスの膣に挿入して精子を放出する体内受精に進化する。陸上脊椎動物である人間の性交も、当然それを引き継いでいる。この流れをみると、性行為を教えるなど主張する性教育保守派の考えは何と姑息で非科学的なことだろう。添えられたふんだんな鉛筆画は、デフ

オルメを排しているのに、生きとし生けるものをいとおしむタッチを感じさせる。日ごろ爬虫類や両生類とはつきあいたくはないと思っている私が、からみ合う雌雄のイモリを見つめて飽きない。

最終章で人間の性が子づくりから独立し、愛情の性、商品の性を派生させたことに触れている。また一夫一妻制は男性の女性に対する抑圧であることを指摘し、男女平等が進めば結婚の形が大きく変化する可能性があることも示唆する。

結婚制度に固執する他の性教育論者にはない、視野の広がりを感じる一冊。

農山漁村文化協会 一五〇〇円

私は「水玉のシマウマ」

カンボジア女性の日本奮闘記―

ペン・セタリン 著

川崎市宮前区 刀祢 啓子

著者は十八年前に留学生として来日し、現在はカンボジア料理のレストランを経営しながら、大学のカンボジア語講師や市の教育相談員をし、在日カンボジア人救援などボランティア活動もしている三十七歳の女性です。

この本には、子供のころや留学生時代、その後、日本で就職し結婚した彼女の日常と、その中で考えた日本と日本人のこと、また、祖国のことが語りかけられるような文体でつづられています。書名は、どんなに日本に慣れても、やはり自分を「シマウマの群れの中の水玉のシマウマ」のようだと感じるという意味です。

彼女が日本に来て一年たったころ、祖

国では、ポル・ポト政権支配のもとで多くの人々が虐殺されました。彼女の両親も、七人の弟妹のうちの四人も、連れ去られたまま行方不明になったり、強制労働の果てに悲惨な死に方をしたりしました。固有名詞で語られる人々の受けた悲惨な事実は、新聞やテレビによる報道よりも、一層強く胸に迫ります。

そのほかに、大変強く憤りを感じたのは、彼女の子供モニカが二歳のとき、保育園で先生から言われた言葉です。「おかあさんがカンボジア語でしゃべったら、絶対に返事しちゃだめだよ！」何というひどい言葉でしょう。一つの民族の文化の否定、モニカとセタリンさんの人格の否定にはかならないではありません

か。日本語を早く覚えてほしいとの願いを、こんなゆがんだ形でしか表わせないとは情けないとしか言いようがありません。

こんな経験をしながらも、日本を第二の祖国と呼び、「もし日本の自衛隊の人たちがカンボジアに派遣されるとしたら、武器などは一切使わずに、優しさと明るさで人々に接してくださるよう心から願っています」と言う彼女に、私たちは日本人は、ほんとうの国際人になることでこたえなければと思います。その第一歩は、自分たちの文化とは異なる文化があることを知り、それを尊重することでしょう。

講談社 一五〇〇円



このままではほうっておけない 日本の子育て

自治労連保育部会編
協力・保育研究所

川崎市多摩区 岡田 美幸

今日の国民生活と子育ての実態。そこから出てくる保育要求を自らの手で把握し、今後の公的保育のあり方を明らかにしようとする報告書です。一九九一年に一年間かけて約二万人の保育者により、全国の地域乳幼児実態調査を約十万家庭を訪問するという大規模な調査を繰り返した結果の分析なのです。

調査項目も多岐にわたり、調査家庭も乳幼児のいる家庭を無差別抽出したものであり、現在の子育てを巡る状況がくつきり浮かび上がってきます。都会でなくとも、大自然に恵まれた環境にある地方であっても、子供を大自然の中で遊ばせられない時代に驚きます。

中でも興味深いのは保育所に入所させたい理由についての回答によると、「働きたいから」「子供に友達がたくさんできるから」「子供の知的情緒的発達のため」「生活習慣を身に付けさせたいから」「子供集団の中でのびのび育てたい」など、子供に豊かに育ってもらいたいという親の願いが強く、そのためになら働くという傾向さえ見られるということなのです。入所させたくない理由のほうは「親自身の手で子育てをしたい」「働くつもりはない」「保育内容に不安」「保育料が高い」「保育時間・入所基準など条件が合わない」などです。膨大なデータを様々な角度で分析しており、興味深い内容に

なっています。

ベビシッター業界の繁栄、英才教育など子供を対象にしたビジネスがにぎわい、子育てに悩む新米ママには情報が多すぎ、自主保育グループができたり、生協でも保育共済プログラムの研究がさされていたり。

保育需要があるにもかかわらず、今ある保育園を最大限に生かす努力が足りないのではないかなどと日ごろ感じている私にも、何かのヒントが得られた感じがしています。

ひとなる書房 一五四五円



ふたりで家事を

「仕事」と「家庭」の新しい関係

尼川 洋子 著

神奈川県海老名市 中西 景子



二三七号に、「これでは子供を生めない」のテーマの子育て会議が載っていましたが、偶然見つけたこの本には、新しい家族の生活スタイルがあって、勇気を得ました。

と申しまでも、私もう五十歳を過ぎ子育ては一応卒業しました。私自身は結婚と同時に仕事をやめ、結婚二十五年来専業主婦で過ごしてきました。地域の文化活動(文庫や親子映画)、生協活動、婦人運動、ほんの少しのパートやアルバイトもしましたが、基本的に夫がかりの生活でした。でももっと違うライフスタイルがあったもいと思ってきたよ

うに思います。

性別役割分業から解き放たれた男女の生き方のモデルが、この本にはあります。若い方が読まれたらきっと結婚、家事、仕事、育児、生き方について、すばらしい指針を得られると思います。

育児だって一人でやるからシンドイけれど、夫婦でやれば楽しく切り抜けられる。そして仕事も続け、保育所や学童保育や様々な地域のネットワークの中で、親も育ち、子も育ち合う。そんな例が幾つか載っていて、家族の在り方って幾通りもあっていいものだと思います。結婚して子供が生まれたら女だけが損をす

る、子供を生むのは損だみたいな男女の関係でなく、一人よりも二人がいいという関係になっていかないかしらと思います。

働きすぎのお父さんの仕事時間を減らし、働くお母さんを応援する条件を整え、子供は社会みんなの財産としての地域づくりなど、子育てや家事の在り方を通して色々なことが見えてきます。

女性問題懇話会を十年続けている著者尼川さんの生き方に、たくさんのご教えられました。

創元社 一四〇〇円

ちょっと変じゃない？

「女らしさ」「男らしさ」って何だろう



青木やよひ 著
磯田三雄 絵

学校の出席簿は、どうしていつも男子が先で女子が後になっているのか。女の子はジーンパンはけるのに、男の子はなぜスカートをはけないのか。自然のこととして受け止められている「女らしさ」「男らしさ」が、実は

社会によって作られているという事実を、具体例をもとに十代の子供たちにときあかしてくれる貴重な一冊である。女は男よりも弱くて、おとなしくて、社会性に乏しい、などという思い込みを、著者は豊富な

歴史的・文学的知識を駆使しつつ、平易な語り口で打ち砕いていく。
生き生きとした女の子を育てたい、とのぞむ母親は、ぜひこの本を子供に与えてほしい。

小峰書店 一二〇〇円(田)

エッチ・ジャーナリズム



衿野未矢 著

読み終えて、思わずうなってしまった。主婦として、母親として、そして女として、世の中にあふれる、性売り物にした商品について知ってはいただけど、実際ここまで研究してみたことはなかった。

四苦八苦して、その方面の雑誌を手に入れたり、ビデオを見たりと、著者の努力と勇氣には脱帽する。
といっても、眉間にしわ寄せて読むような本ではない。肩の凝らない軽いノリで、性売り物にするジャーナリズムを切り刻む。

あの手この手で「性品」を安売りしようとする業界の様子は、さながらスーパーの安売り合戦のようで滑稽でさえある。
その安売り合戦がどこまでいくのか、女としては目を光らせておく必要があると思う。
リベルタ出版 一五四五円(服)

不妊と向きあう

生殖技術・わたしの選択



宮 淑子 著

以前なら、子供のできない夫婦は、あきらめるか養子をもらうかのどちらかだった。今、体外受精や代理出産にみられるように、生殖技術は進歩している。しかし、それは生殖、男女、親子の概念を変えようとしているこ

とにはかならない。男女の性愛があって、その結果として起こる妊娠の意味をガラッと変えたのである。
本書はあまり知られていない生殖医療現場のルポ。
不妊治療と称する生殖技術は、

ほんとうに不妊女性にとって福音なのか、不妊状況を生きるとはどんなことか、どう向きあい、乗り越えたらいのかという、不妊女性の声をすくい上げるものである。
教育史料出版会 一六四八円(藤)

性のユマニズム

エロスと結婚のゆくえをさぐる



佐藤和夫 著

副題に「エロスと結婚のゆくえをさぐる」とある。結婚という制度が、エロスへの追求という、最も人間的なものと相反する矛盾を抱えていることを、愛妻家を自認する著者でさえ持て余している。

また、文豪、徳富蘆花も愛妻家でありながら、身辺の女中や小間使いに執拗なほどの性欲を感じ続けるというエピソードなど、なかなか興味深いものがある。人の心はうつろい、変化を求めている。そのうつろい深さには当人自身がうんざりしている。

若い世代の「恋愛できない症候群」・女装・サド・ビル解禁・AVギャルの本音など、様々な例が取り上げられている。性は、あくまでも個人的な問題で、自由な表現で語られるべきだ。あえて語りにくいことを書いて、性についての意識変革をねらうのが本書の目的であろう。特にパートナーと、性について様々なことを話し合ってくれたらいいと著者は言う。しかし、東大の哲学科卒、現在国立大の助教授であるという著者だから、いささか専門的で、私のようなミイハーにも、もっと楽しく読めたらさらに有益な本だと思う。はるか書房 一五四五円(豊)

彼岸花の鎮魂歌

女性医師の世界



大森安恵 著

ある日、病院で診察室に入ったら女性医師だった。一瞬、「あ、女医さんか」と軽い不安を覚える人は多いと思う。

医師の仕事に女性も男性もなはずだが、長い間の男性優位社会の繁栄は、今なお「女医にはかかりたくない」という偏見を残しているらしい。

著者は東京女子医科大学出身で、同大学糖尿病センター主任教授及び所長。

「女医が、妊娠、育児というハンディを背負って、男性と対等に認められるためには、男性より三倍多く働かねばならない。子育てと仕事の両立なんてとんでもない。子供を自分で育てながらは働けない」と言い切る。

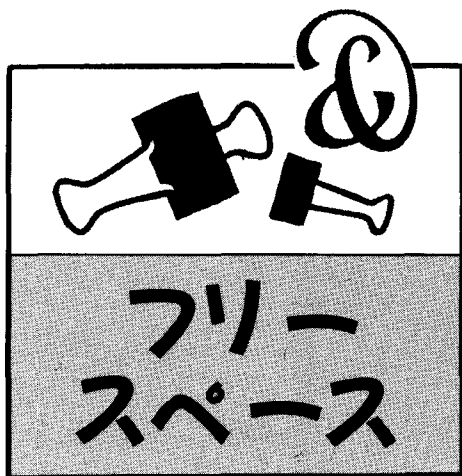
医学の世界で男女平等を実践するのは大変しんどいのだ。

著者の専門は糖尿病。自身自身が陣痛の痛み、死産の苦しみを体験したことにより、産科医

にはもっと女性がなって欲しい、そして、糖尿病妊婦を死産の悲しみから救わねばならないと痛感する。

様々な出会いをつづったエッセイの中で、繰り返し、糖尿病であってもこれまでダメだと言われてきた妊娠、出産は可能であると、熱意を持って語るさまは、女性の糖尿病患者に大きな希望をもたらしてくれる。

時空出版 一九〇〇円(花)



思い出の課長

千葉県松戸市●島津まこと子（45歳）

毎日が同じように過ぎ去っていくが、時折ふっと思い出す人がいる。恋人でも友人でもないのだが、思い出すたびに恥ずかしさで一杯になる。

現在はのんきな主婦をしている私も、六年ほど前まで、ある大手の製造メーカーに

勤務していた。今でも思い出すと私を赤面させる男性は、コンピュータ室の課長だった。

私の職場はコンピュータ室のそばだった。

今では中学二年生になる、次女の産休が明けて間もないころだった。二度目のお産だったせいか、母乳がよく出た。毎日、就業中二、三回、トイレの片隅でお乳を搾って捨てていた。

ある日、おっぱいが張って仕方がなかった。廊下を歩いていて、ちょうど湯沸室の前を通りかかった。何気なくそこに入った。

だれもいなかった。湯沸室には、流し台、ガスコンロ、戸棚など置いてある。正午前は、昼食用のお茶を入れるため、各課の女性たちで混雑するが、ほかの時間帯は閑散としている。

営業部門でないから来客も少ないのだ。めったに男性社員も来ない。

私は大胆にも事務服のボタンを外し、ブラジャーをずらしておっぱいを哺乳ビンに搾り始めた。プラスチックの小さな哺乳ビ

ンは事務服のポケットに忍ばせてあった。

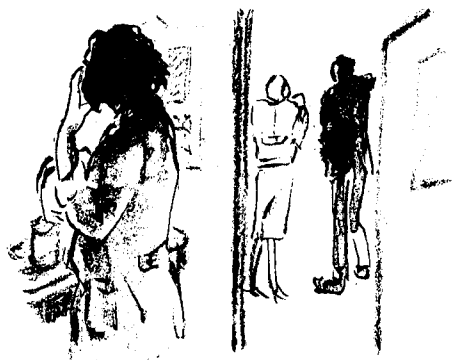
大きく張った乳房をギュッと指で押すと白い液体が流れ出た。「二、三分あれば済むし、早く終わらせてしまおう」と手に力を入れたとき、腕まくりをしたコンピュータ室の山崎課長がサッと入って来た。流し台のほうに向いていた目を私のほうに移した。そこには哺乳ビンを片手に、胸をあらわにした女が立っている。

山崎課長は、一瞬何が起ったのか分からない様子だった。瞬時に、事情を察知したらしく、「あっ」と一言漏らすと急いで向きを変えて出て行った。

こちらもバツの悪さで心臓がドキドキしてきて、搾ったお乳を流しに捨てると、急いで身なりを整え、湯沸室をあとにした。いつものように洗面所で搾ればよかったと後悔しても後の祭。

山崎課長は汚れた手を洗おうと湯沸室に來たらしかった。私のほうは、子育て真っ盛りの授乳期だったから乳房を人目にさらしても恥ずかしさは少なかった。

ただ場所もわきまえずに、するべきでない行為をして山崎課長を驚かせてしまっ



た、恥ずかしさと申し訳なさで顔から火が出る思いだった。その後社内で山崎課長と会うと、そっと目をそらした。

一カ月くらいして、コンピュータ室の庶務係の年配の女性に「私ね、恥ずかしいことをしちゃったのよ」と、ことごとくまづを初めて打ち明けた。その人は「ふふ」と笑い、「でも山崎課長はそんなこと気にかけてないし、だれにもしゃべらないわ

よ。あの人は他人のうわさなんてしない人よ。頭のいい人だから」

山崎課長は仕事のできる、頭の切れる課長として有名だった。一度だけ口をきいたことがあるが、ユーモアとウィットに富んでいた。

部下にも信望があった。

その後一年ほどして山崎課長は退社して、コンピュータのソフト会社を自らつくってしまった。

前途有望な人物なので、会社の上層部は引き止めたが、それを振り切った。

バブルがはじけて世の中が不景気になり、倒産の記事を新聞で見つけると、時々山崎課長を思い出す。

会社経営は順調なのだろうか。頭脳と人格の備わった人だからきっと成功しているに違いない。

湯沸室で見せつけられたおっぱいはきつと記憶にないだろう。

それにしても、あのとき私はどうしてあんなことをしてかしたのか。目の回るほどの忙しい日々だったから神経も疲れていたのだろうか。

何歳に見えますか

横浜市港北区・織田裕子

町を歩いていたらアンケートのおばさんに声をかけられた。この通りは、あちこちに市場調査をする人たちがいて、その日の商品に合う人に声をかけるのだ。

アンケートは、これから世に出る商品が分かるのが面白く、時間があれば応じる。その商品の値段が幾らだと買うかとか、色はどれがいいかとか、物によっては味をみたりする。アンケートを受けてしばらくするとテレビでその商品のコマーシャルが流れてくる。その日の商品は室内の芳香剤だった。

専用の部屋へ行くとまず年齢を聞くのだが、その人は紙を出して、私が返事をする間も与えず「それ以外」のところを指した。「エッ」と見ると二十代、三十代、四十代、それ以外となっている。まさか十代に見えるわけではないので五十代だと言っているのだろうか。アンケートの間中面白くなかつ

た。まだいささか間があるのに。

大体二十代から四十代までを購買層だと思つて、あとは一くくりというのが面白くない。

それにその数日前、誕生日が一日違いの友人が勤務先の高校生に「三十五歳くら



い？」と言われたと、得意げに電話をしてきたばかりだから余計に面白くない。

だがアンケートから数日後、通勤帰りのラッシュの電車の中で、小学三年だと話していた男の子が「〇〇駅にきたらドアのそばに行くんだ」と連れに私の立つ場所を指差してしゃべっているの「おばさん、今度降りるから」と声をかけたら「お姉さん

が今度降りるんだって」とまじめな顔で言うではないか。魚屋のおじさんのだれ彼かまわすの「お嬢さん」と違つて私はすごく気恥ずかしかつた。はき慣れないロングの花柄のスカートが、若作りに見えたのだらうかと気になった。でもあのアンケートの日もこのスカートをはいていた。

女性は何歳より五歳くらい若く言われるのが真実味があつてうれしと、雑誌で読んだことがあるが私もそうだと思ふ。

前のアンケートの日から二週間くらいして、また別のアンケートの女性に声をかけられた。商品はポンプ式の液体石けんだった。やっぱり年齢を聞いたが、その人はまっすぐ三十代のところを指差して「ここですか」と問うた。

一人人はどこを見て年齢を計るのだろうか。いつだったか殺人事件の被害者女性の身元を捜すビラに、三十代から五十代と書いていたが、二十歳の開きがあるということとは外観から実年齢を計るのはよほど難しいらしい。

数年前までは、若く見えても年を取つて見えても、実際の年齢に何の変わりもあり

やしないと思つていたのに、せめて二、三歳は若く見られたいとこだわるのは、気持ちが年を取つたのだと思ふ。

姑の形見の着物

大阪府豊中市・中松ミナ子（56歳）

一カ月あまり娘の出産手伝いで東京暮らしを余儀なくして帰ってきた。

まだ残暑の厳しかったところから秋風がひんやり身にしみる十月中旬までの季節の変わり目であつたから、出発前あれほど言い置いたにもかかわらず夫は夏物を重ねて着ていた。

ともかく留守の間に山と積まれた雑用を片っ端から整理しなければ……。冬布団を出したり夏物衣類と合・冬物を入れ替える作業に取りかかった。

夏の間、重宝したＴシャツや木綿のパンツ類もすっかり色あせて見えるけれど……。

この中で思はずひざの上に置いて丁寧

畳み直したのは、亡き姑の形見の着物をリフォームしたルーズシルエットのパンツだった。

モスグリーンのちぢみの手触りが今となつては妙によそよしく感じられるけれども。

夏の始め、十数年ぶりに夫と九十歳になる伯母（姑の姉）を訪ねた。

若いころからしつかり者、働き者と言われた彼女は、大柄で色浅黒く姑とはあまり似ていなかったから、私は近寄り難い印象さえ持っていた。

だがにこやかに迎えてくれた伯母は、この数年足腰を悪くして自室でテレビだけを相手に暮らしているらしく別人のように色白で肩の線さえなだらかに優しく見えた。

老人特有の昔話には記憶も確かでとどまるところなく話し続け、夫と私はただ「まあ」「そうですか」「へえ……」の相づちのみの二時間あまりだった。

ふと伯母は立ち上がって、押入れからふろしき包みを出してくると私の前に置いた。「おまはんが昔、おミネに買うてやってくれた着物やヨ。おミネは体が弱くて早うに

死んでしもうて……。わしはつらかったよ」と目頭を押えた。姑がこの着物を着て

伯母の前でくると回って見せながら「ミナチが買うてくれたんやよ」と得意げに言ったそうだ。スラリとした姑が姉妹の前で

少しはしゃいで見せた様子が目に浮かぶ。伯母が「わしは形見分けのとき、この着物

だけでもうてきたんや……。そうやのウ、一回だけ着たやろうか……」

そしてもうこの着物を着て外に出ること

もないので、いつか私に返そうと思っていたと話した。確かに遠い記憶の中に残っていたひとえの着物はしょうのうのにおいが



しみ込んでいた。

これを抱えて私たちは伯母の家をあとにした。その後、正直言って古い着物のことはすっかり忘れていたが、うだるような暑い日、少しでも涼しく身に着けられる服をつくらうと思いついたのが姑の着物のリフォームだった。

早速、解きにかかったが長い年月に糸は朽ち果てわずかな力を加えるだけで音もなく裂けてしまうのだ。半ばあきらめつつ何とか分解完了、水に通し真夏の日に干した。アイロンで布地を整え再生可能な部分を寄せ集めて仕上げたのが、この夏大流行のルーズなパンツ。

苦勞のかいあって、ちぢみの肌触りは抜群であった。

姑は二十八歳で連れ合いを、当時不治の病と恐れられた結核で失った。そのとき五人の子供が残され、末っ子の夫はまだ生後六カ月の赤ん坊であった。それだけに母親の様々な苦勞を見て育ったので、夫の母を思う優しさは心とむものがあった。

私は夫のまねをしてきただけに、ささいなことでも喜んでくれる姑の人柄は大

らかであり潔さのある、私から見てもすばらしい女性であった。

いつかの「母の日」にたくさんさんの感謝を込めて贈ったごく安物の着物が、この夏、三十年ぶりで町をかつぽする変身をしたのである。

ようやく収納箱に納めてふたをすると秋の日はすでに傾いていた。

走馬灯

大阪府貝塚市 ● 北 恵美子

「光陰矢のごとし」というように、気が付けば、夫に先立たれて丸二十年たった。結婚してわずか二年目、私が二十四歳になったばかりで、息子が一歳半の春だった。

「今こそ、あなたが自由に羽ばたくとき、経済的な援助はさせてもらうから、あんな実家には戻らないで、子供と二人で暮らしていきなさいよ」

四つ年上の姉のような存在だった友は、そう言って励ましてくれた。

だが、あえて実家に戻る道を選んだ私。生後すぐにもらわれてきたその実家は、私にとって、必ずしも居心地のよい場所ではなかったはずなのに――。

友が「あんな実家」と言ったように、家庭的に暗い環境であった。父は酒癖が悪く、外でけんかをして帰っては家の者に当たる。母は絶えずイライラして怒りっぱい。物心ついてからの私は、親の顔色ばかり見て萎縮していた。(何で、こんな家にもらわれてきたんだろう)と、悲しかった子供時代。

夫を婿養子に迎える気なかった父は、散々私をなじったが、結婚を口実に家を出られるだけで、私は救われた気持ちであった。

だが、ほんとしたのもつかの間、幸せは長くは続かなかった。

夫は肝臓病で、私が出産を控えた一カ月前に入院してしまったのである。不安とショックで夜も眠れなかった私を心配して、病床の夫は両親に頭を下げて頼んでくれた。「自分がこんな状態なので、実家で世話してもらえないか」と。それでも、父は

聞き入れてはくれなかった。

初めてのお産は実家だと、世間一般のいうようにさせてもらえない私の立場のなさ――。仕方なく不安なまま臨月を迎え、無事、長男を出産した。夫も私も久しぶりに笑顔を取り戻し、喜び合い、人並みに親となった幸福を味わえたのである。しかし、一年半もの闘病のかいもなく、夫は病に勝てなかった。

お葬式が済んで、私は身の振り方を考えた。(娘が不幸な目に遭って、実家に帰るんだ。今度こそ、同情して優しく迎えてくれるはず――)「未亡人」と言うには、若すぎた私は、心のどこかでやはり、すがっていきなかった。両親の愛が欲しかった。

実家に戻って三年ほどたったころだろうか？(いつかまた再婚でもして、子供ができたときのためにっておこう)と思っ、小さくなった子供の服を整理していたときだった。「そんなもの大事そうに置いとかなでええ!」と母からどなられた。頭から水を浴びせられたような冷たい口調に、母の本心が見えた気がした。紙袋にその古着を全部詰めて、友の家へ持って行っ

た。「もういらなから、あなたの子供に
着せてー!」と言って、ワーワー泣い
てしまった。

子供が保育園に通っていたころ、「父の
日」にお父さんの絵が書けなくて泣いてい
たという話を人から聞かされた。子供の父
親になってくれるなら、と私も再婚を考え
ていた。だが、そういうわけか、父は私の
再婚話を持ってくる人を、怒りをあらわに
して追い返した。

小さな会社の事務員として勤めて七年、
仕事にも充実を感じ、人間関係もうまくい
って落ち着きたときだった。父が脳い
っ血で倒れ、二カ月後亡くなった。看病の

ため仕事も休まねばならず、会社も認めて
くれなかった。で、職を捨てることになっ
た。それからが転職の繰り返しで、挫折感
を味わった。

上司のセクハラ、同僚のいじめと、中年
おばさんの職場環境は厳しい。

私も三十代に入った。息子が小学四年の
とき、再び再婚話があった。「自分のお父さ
んなら欲しいが、ほかの人をお父さんと呼
ぶのはイヤだ」と言った。子供が望まない
のなら、「再婚」は私にとって何の意味も
なかった。

母子家庭の母と子、肩寄せあって二十年
たった。私も、地元母子福祉会の代表者の



大役を引き受け、会活動をやってきた。
「自分一人が不幸を背負っているのではな
い」という仲間の連帯意識が、母親たちを
支えている。昔の「未亡人」というどこか
暗いイメージはなく、経済的不安を除け
ば、みんな様に明るい。

子供が二十歳になれば、母子家庭とは言
わず、寡婦家庭になる。つまり、子育てを
卒業した一人の未亡人の家庭である。

母親の私が、子離れに手間取っている間
に、息子は大学入学をきっかけに、早々と
手元から果立っていった。今は年老いた母
と二人暮らし。この母の余生をしっかりと
みとることが、他人の子を育ててくれた恩に
報いることだと思っている。

不幸な生い立ちも、うっ積した過去の感
情も、時の流れとともに、私の中で次第に
「風化」しつつある。母親としてのみ生き
てきた歳月は、もはや過去のものとなっ
た。最近話題の「冬彦の母」のようになら
ないためにも、精神的自立が必要である。
そして今、「これからの私の生き方」が問
われるときである。

母の忘れ物

東京都大田区●村上恵子

引越しの一カ月ほど前から家の中を少しずつ片付け始めた。二十年前に悪性リンパ腫で亡くなった母のノートとメモ、最後の二年間の家計簿が出てきた。約三十六年前に母が書いたものを手にして、これをどうしようか迷っている。

ノートは娘時代の日記、新婚当初の日記、料理、和裁、編み物などの切り抜きとつくり方が書いてあるものなど全部で七冊。メモは二冊あり、初めの入院と再入院の記録がそれぞれに記されている。

昭和三十一年から始まる日記。和裁のノートは傷み方からそれよりもっと前に書かれたものだと思う。家計簿には日々の雑感や記録が詳しく書かれ、母が日常を丁寧に生きてきたことが分かる。

新婚当初の日記には、父との交換日記のようなのがあり自分の両親が書いたと思うと読んでいるのが恥ずかしくなる内容

もあるが、舅、姑、小舅、小姑、先妻の娘（十歳）がいる家に嫁いだ母は、住宅事情や性格から自分の気持ちを夫に直接言えなかったのだろう。

母は二十八歳で父と見合い結婚し翌年に姉を、年子で私を産んだ。十二年後、発病から八カ月でこの世を去った。

長女（異母姉）とは当時色々あったよう



だが、今私たちは三人姉妹としてそれぞれ家庭を持った後もとても仲がよい。

私はこの母が残したものをどうしようか夫に相談した。「義父さんに返せば」と言われたが、再入院の記録は今読んでもらったもので、七十に近い父には見せたく

ない。全身に転移したがんと薬の副作用のために腕がむくんで書くことが困難になり筆跡が変わってしまった文字。記録は亡くなる二週間前で終わっている。

十二歳だった私は詳しい病状は知らされていなかったが、見舞いに行って会う母や父の疲れた様子から母との別れが近いことを感じていたように思う。

告知など考えられなかった当時母は自分の病状についてどう考えていたのか。記録に母の思いは記されていない。悪くなる病状とその日受けた処置、処方された薬、排泄回数、体温、血圧、見舞い客のことが書いてあるだけだ。二度目の入院後母が食事を取った記録はない。医学の知識がなくても自分の病名を知らされていなくても、命が短いことを感じていたと思う。

告知しなかったことで、父は母との率直な会話、心を開いた夫婦の話し合いを避けたことになる。死の床で母が孤独に堪えていたのではないかという想像は、胸を締め付けることだがそのことをいまさら父に問う気はない。

日ごとに書くことが困難になっていく中

で母は何のために、だれのために記録し続けたのだろうか。母の気持ちは記されていないのに無念の思いをその文字が伝えている。

今、二人の姉には三人ずつ子供がいるが、六人の孫たちはだれもおばあちゃんを知らない。私が母のところへいくとき持つて行くしかないのかもしれない。

妊娠したくない……

東京都世田谷区●匿名

ひょっとすると妊娠してしまったかもしれない。危険日の避妊に失敗したのだ。

現在子供は五歳と三歳。来年四月から下の子ども幼稚園か保育園に通う予定。ようやく育児だけの生活から逃れられる。その日が間近なのだ。頭を抱え込んでしまう。

私は二人の子供のことは心から愛している。が、はっきり言って、育児は嫌いだ。来る日も来る日も同じことの連続。かわいらしく思えるときなんてほんの一瞬で、憎

たらしいことがほとんど。怒ってばかりいる自分にへきえきする。

それでも最近、下の子が三歳の声を聞いたところからだいぶやりやすくなった。自分の時間を少しずつ持てるようになってきた。

一年ほど前からライターになりたい、という気持ちが強まり自分なりに行動。幻にすぎないのかもしれないが、チャンスかな？ と、思える現実も目の前にある。保育園に入れることを真剣に考え始めたこのごろ。

つい先日まで避妊の失敗なんて人ごとだと思っていた。友人との話でその話題が出ることもたびたびあったが、「四人目だったらおろすかもしれないけれど、三人目なら生むしかないわね」これが大勢の意見だ。三人の子を育てている人は多い。普通のことだ。

それを大した理由もなしに、こちらの勝手で命を奪うわけにはいかない。四人なら珍しいので、言い訳ができるだろう、というこらしい。まさか自分に巡ってくるなんて考えてもいなかった。理屈の通ることではないが、深く考えることもなく私も友

人たちの意見にうなずいてきた。そして今……。まったくもって困ってしまった。私は妊娠したくない。折角終わったと思っていたのに、またマタニティを着て……出産して……オッパイをあげて……夜泣きに付き合っ……。やりたくない。想像するだけで、気が遠くなる。

二度の妊娠は、人並みはずれた激しいつわりに始まった。その後も最悪の体調続き。そして、二度とも一カ月早い早産。さらに、幸い大きな問題は残していないが、二人とも別の理由で、生後すぐにICUのお世話になっている。一人目のときはおまけまであった。後産が残り、退院一週間後に掻爬。散々な妊娠期間だったが、一人っ子よりは、二人のほうが……と考えた。

意を決してもう一度妊娠。どうにか無事出産。そして妊娠にこりこりした私は下の



子を生んで退院した直後、マタニティーウェアはすべて捨ててしまった。私にとって妊娠期間は想像しただけで、地獄に近い。まだまだ手のかかる二人の子供。頼れる身内も近くに住んでいない。夫も毎晩遅い。当てにできないばかりか、サラリーマンのストレスから体調も崩し気味で、しょっちゅう寝込んでいる。そして私は自分のしたいことが見えてきて、それに向かっている最中。

仕事を探すとき二人の子がいるということさえ、頭にくるほどの障害となった。どうして、と思えるほど世間は冷たい。もう一人人生だならほんとうのところ自信がない。妊娠期間の体力にも自信がない。恐らく今から最低二年は手も足も出せない状態に陥るだろう。

どうなんだろう。どうしても生めない理由がないのに、勝手に命を断ち切ることは許されない行為なのだろうか。それとも、私の人生を優先させてもいいのだろうか。が、もしそんなことをすれば……一生大きな汚点として心に残るような気がする。避妊に失敗したからにはその責任をしっかりと

ととらねばならないのかもしれない。子供が欲しくてもできない人がいっぱいいる。そんな人から見れば私の言っていることは、この上ないわがままに聞こえるだろう。

それにしても、避妊の主導権を握っていた夫が、私の心配なんてお構いなしで毎晩高いびきで寝ているのには腹が立つ。

妊娠におびえる私に彼は物分かりのいい良夫の顔で「生んでも生まなくても、どちらでも君の好きにすればいいよ」と言う。私一人に責任を押し付けられないでよ！私は怒るが彼はそれ以上何も言わない。自立を唱える女性は避妊も男任せにしていけない。私はそれを怠ったばかりに、殺人を犯すことになるかもしれない。

一週間が過ぎた。妊娠検査薬を買うに行こうと思った日の朝、生理がきてくれた。正直言って「助かった」という心境。私は殺人を犯してまで今の生活を守ろうとしていた。相手は幸いに空想の世界の赤ちゃんであったが。その子へのせめてものおわびとして、気を引き締めて、真剣に生きていかなければと思う。命を奪う行為に比べれば、どんなことも頑張れそうな気がする。

(え・佐藤江子)

お友達に△わいふ▽をおすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。(六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

△わいふ▽年間分をプレゼントにお使い下さい

●ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

「わいふ」の新刊

子育てはつらい!

● こういうと叱られる時代が長く続きました。

紙おむつ、離乳食、いろいろ便利なものだらけ、ちっともつらくないじゃないか、という人もいます。でも、そうじゃないんです。

● 楽な世の中で、つらい子育てに母親を追い込んでいるものは何か。母親の現場を知っている「わいふ」なればこそ生まれた一冊です。

市販していませんので、直接「わいふ」に電話でご注文ください。四六判 二百ページ・千五百円

核家族のための子育てガイドブック

● 幸せな子どもは幸せなおかさんから生まれます。子どものために、と自分自身の飛ぶ力をなくしたおかさんがどんなに多いことでしょう。

● 何がしつけなのか、人間らしい母子関係とは何なのか。この一冊は、まったく新しいかたちの子育てのガイドブックです。A5判三十二ページ・三百円

ご注文は(株)グループわいふへ

〒162 東京都新宿区市谷加賀町二一五一三

☎〇三―三六〇―四七七二

田中喜美子・木内 信胤

エロスとの対話

女は男を知らず、男は女を知らない

女はいつも、男というものが自分の欲望や利害の色眼鏡を通じてしか女を見ていない、と怒っているくせに、自分たちも同じ色眼鏡をかけて男を見ていることに気付いていない。そのくせ女は、男が勝手気ままに女を論じているように、やはり男を論じているのである。しかし男にほんとうに女の望む「いい男」になってほしいのなら、そんなやり方では到底ことは済まない。

この本を書くことを思い立った理由は、そこにある。(田中)

新潮社・1300円

硬骨の明治男と現役のフェミニストが情熱と叡智を賭け、赤裸に語る愛・性・結婚



連載小説最終回

契約結婚

山影 冬彦

「それに、ミチはやっぱり鬱病よ。この前雇った時に精神医からもらってきたパンフレットがあったでしょう。そのパンフレットの中に、鬱病に罹っている時には離婚したいだと転職したいだとか転職したいだとかいった、人生上の重要な選択を患者が口にしたがるけれども、これは病気がそう言わせているのであって、もし実行してしまうと、人生選択を誤る重大な結果に陥る危険度が高いから、罹病中はこうした選択は実行させない方が賢明であるといった意味の事柄が、患者の家族に対する注意事項として記されてあったでしょう。それよ、それにぴったりのよ、ミチの今度の教師をやめたい衝動は。だから、教師をやめたい理由にしたところで、自分の妻子にまともに説明がつけられず、納得してもらえないわけなのよ。でも、病気では、まあ、仕方ないわね。ゆっくり養生するしかないわね。また、前の時のお医者さんのところに通ってみたら。漱石を読むのは少し我慢す



ることにして。漱石は本当に毒だから、こんな時は」

「……そうかな、俺にはそうは感じられんが。前の時は確かに自覚症状があつて自分で医者へ飛んで行つたんだが、今はそんなの全然と言っていいほどない。病気のせいに出来ないし、して欲しくないと思う」

「それでも、やっぱり心配だから、定期検診のつもりでいいから、行ってみたら。この契約更新の話は、お医者さんの診断の結果が出てからにしましょう。それでも遅くはないんだから」

「行くだけは行ってもいいが、検診の結果、もし異常ないと出たら？」

「その時話を再開すればいいでしょう。もっとも、その場合には結論はもう出たようなものだけれども」

「どういうふうに？」

「ミチは教師を続ける、わたしは大学院に通うって」

「そうかなあ」

「それ以外にないでしょうが。残念ながら、ミチが教師をやめることに賛成する家族は一人もいなかったんだから、諦めて続けるしかないでしょうよ。逆に、わたしの大学院通学希望についてはこれに反対する家族は一人もないんだから、これは叶えさせてもらえるのよ」

「……」

28

一家言ある伶子は自「の利害をきちんと通す女でもあった。

「それなら、検診の結果がもし再発たと出たら？」

「その時には、いくらわたしたって、鬱病の夫を見捨てて大学院に通い出すなんて不人情な



ことはしないでしようよ。心配しないでよ。治るまで待ってあげることさ」
「ふむ、そういうことか」

道也は複雑な顔をしてみせた。

「でも、だからといって、鬱病と診断結果が出た方がいいなんて思って、そう振る舞おうなんていう料簡を起さないでよ。ミチってその点どうも安心できないところがあるんだから。これは夫婦間の信頼問題ですからね」

「そんなに疑い深く見なくてもいいじゃないか。俺がそんなに信用できないか」

道也はちょっとむっとしたように言った。

「出来る出来ないの問題ではなくてね、たとえ夫婦の仲でも盲信は危険だっていうことよ。だからこそ、わたしたちは結婚を契約結婚にして、お互い契約違反のないように監視しあってきたんだし、契約期間も設けてこうして契約更新の交渉をもっているわけでしょうに」

「うん、まあ、そうだったっけ。……そういえば、もしこの契約更新の交渉がうまくまとまらなかったとしたら、その時は俺たち夫婦はどうなるんだろう。そんな場合を想定していたっけ？」

「そういえば、そうねえ。どうなるのかしら？ ひょっとして離婚なんてことになるのかしら？ それも極端な話ねえ」

「離婚！ いくらなんでもそれは極端だ。第一、契約更新交渉がまとまらなかったから離婚では、離婚理由として変だ」

「あら、でも、ミチって、極端な話が好きなものではなかったっけ？ この教師をやめたっていう要求だって、随分極端だったんだから」

怜子が道也をからかうように言った。

道也の顔色に翳りが出た。

「冗談よ、心配しなくていいから。鬱病の疑いのある夫を見捨てて離婚に走ったのでは、女が廃るわ」

「……女って、そもそも廃れるものだったわけ？」

「気を取り直したように道也が食いついた。」

「廃れるわよ。当今は女だって廃れる程になったんだから。むしろ、男なんかよりずっと廃れる可能性のあるものよ。それは昔は廃れるのは男の専売特許みたいなものだったけれど、今では廃れることがそもそも可能な骨のある男がいなくなってしまっ、みんな骨なしのクラゲ人間みたいになって、いざ廃ろうたって、もはや廃りようもなくなってしまうているじゃないの。わたしの職場の男子職員なんか、みんなそうだから。おとなしい生徒には横柄に威張るくせに、ちょっとこわそうなツッパリ生徒には及び腰なんだから。管理職にだって面と向かって文句を言える男なんか、いはしない。そのくせ、酒の席では悪口を言っ、鬱憤を晴らすんだから。ああいうの、男の腐ったみたいというんだわ」

「なるほど」

「まあね、ミチは別かもしれないけれど、でも、ミチは鬱病の因子があるんだから、廃れるものかなんていう気はおこさない方が無難だよ」

「まあね、今はもう全然そんな気力なんかない。何しろ教師をやめて妻さんに食わしてもらいたいと思ひ出したくらいだから、男なんか廃れるだけ廃ってしまっ、構わないっていう感じする」

「それも極端で、ちょっと困るわね」

「いいんだ、どうせ俺は極端なんだから」

「だったら、契約交渉がまとまらなかったら、離婚ということにするの？」

「いや、それはまた別だ」



「ずいぶん都合のいい論理だこと」

怜子は呆れたように道也の顔を見た。

30

「ふむ。……すると、話を戻すと、俺たちの契約更新交渉が妥結をみなかった時は、離婚でないとなると、どうなるんだ？」

「その時は、話のつくまで交渉を続ける以外にないでしょうね」

「そういうことかな」

「そういうことね」

「すると、根比べだな」

「そうね、根比べね。粘った方が勝ち。痺れをきらした方が負け」

「結婚とは忍耐することとみつけたり、だな」

「ミチもつまいこと言うじゃないの。わたしなんか、ずうっと忍耐のしっ放しだよ、全く。少しは妻さんを労ってちょうだい」

「……」

「あれっ？ 返事がない。まあ、いいかっ。……ミチも、あと少しの辛抱よ。なにも定年が来るまで目一杯働けとは言わないから。あと十年もたてば、生徒もたいぶ減るでしょう、教員もたいぶ余ることになる。その時よ、やめ時は。人員整理の必要からいい条件がつけられるに決まっているから。図体のでかい高校生相手に保育園の保父をやっているみたいになような、ちっともやり甲斐のない高校教師なんか、その時にはさっさとやめていいから。それまでの辛抱。それまでは石に食らいつついても頑張ってちょうだい」

「十年か、それにしても、十年とは長いな」

「ちっとも長くないわよ。わたしとの生活だって、もう十五年もたっているのよ。」



その三分の二ではないの。あと十年で、結婚も丁度二十五、俗に言う銀婚式ではないの。丁度いい潮だから、二人で一緒に教師なんかやめてしまつて、新たに出発し直そうか」「レイは駄目だよ。俺より後れて教師になつたんだから、俺の方は丁度その時共済年金の受給資格ができてゐるけれど、レイはまだだ。あと数年というところでそれを逃す手はない。受給資格が生じてからやめるべきだ」「あれっ？　ちゃんと損得計算が出来るんじゃないの、わたしのことだと。自分のことだと、なぜそれができなくなるのよ？」「自分のことだからだよ」「なあるほどね」

二人は顔を見合せて微笑んだ。

この日の交渉は二人の微笑をもって終了した。この微笑が今後の二人にどれ程訪れてくれるものかは定かでなかった。或いは、この種の微笑はもはや二度と訪れることがないのかもしれない。けれども、これが飾り気のない二人にとって結婚十五年の記念を飾るに相応しい添え物となつたということは、確かだった。

— 完 —

(え・鳥居禎子)



楽しい保育教室へ どうぞ

私たちの住んでいるこの地球、この街、この道を幼子は一歩一歩自らの足で歩きます。あぜ道に飛び交う小さな虫たち、真っ赤な柿、友と見る白い雲、街で出会う人の心、子供は肌で感じ、何が大切か発見します。公園の一面に朝九時に集合して三時まで、三歳から就学前の幼児十人と保育の私とで、まだ残る自然を訪ねるのあちこちに出かけます。時々電車にも乗って知らない地へ。雨の日も風の

日も冬もたき火をしたりして、まったく外での生活をしています。月々金の保育で一カ月、一万二千元の保育料です。参加をお待ちします。

▼幼児教室 てんと虫

▼吹田市山田西 本多和子
☎〇六―八七五―二七二三

所沢サークル へのお誘い

わいふ所沢サークルでは、昨年四月発足以来、毎月一回集まっています。『わいふ』誌合評会をはじめとして、女性の生き方など様々な話題を心置きなく語り合える仲間づくりを目指しています。関心のある方、ご連絡を待っています。

▼問い合わせ先 藤井雅子 ☎〇四二九―四五一二五五七
葉田野妙子 ☎〇四二九―二四一八七五二

▼場所 小手指公民館分館(西)

武池袋線小手指駅そば)

わいふ名古屋交流会 へのお誘い

わいふ名古屋交流会は七年目を迎えました。毎月一回女性会館に集まり、本誌の合評、会報の発行を行っています。一緒に語り合いませんか？

▼連絡先 吉田 ☎〇五二―一八三一―八四三七

使いやすい J・O・ダイヤリー

幅七センチ、タテ十七センチ、薄くて軽いのを書くスペースはたっぷりです。女性に役立つ情報満載。

価格九二七円、送料実費三〇〇円。注文は〒162新宿区神楽坂六―三八五〇五 ミクロスタジオまでどうぞ。



「八路軍とともに」 の続編が出ました



以前に『わいふ』に連載した法村香音子さんの「八路軍とともに」は単行本「小さな长征」として社会思想社から発売され、大好評でしたが、今回その第二弾「優しい同学 愛しい中国」が同じ出版社から発売されました。親の手元を離れ、女学生として学びながら成長を続けていく少女の姿が、中国人との友情や恋愛を取りまぜて描きだされ、青春の健康さとドラマのスリルを満喫させてくれる力作です。ぜひ一読を！

「わいふ」編集長 田中喜美子

わいわいがやがや

クリスマスの思い出

奈良県奈良市 ● 田中慶子（46歳）

毎年クリスマスが近づくとわが家の娘たちが合唱する。

「私たちサンタさんを信じられなかったかわいそうな子供よ」

私は、クリスマスチャンではないからという理由で、クリスマスプレゼントを子供にしたことがなかった。周りの友達がサンタ

さんからプレゼントをもらっているのに、なぜもらえないのか娘が私に尋ねたとき、私は夢のないことを言った。

「あれはキリスト教の人たちの宗教的な行事で、ほんとうはお父さんやお母さんがサンタさんになっているの」

それでもプレゼントをせがむ。私は自分の考えをとうとうと述べた。

「キリスト教徒でもない者がそういうことをするのはキリスト教の人たちに失礼であり、冒瀆である」

挙げ句に、

「どうしても言うなら、お釈迦様のお誕生日の花祭りにプレゼントあげる」

と言った。厳密に言うとなん個人は仏教も信仰しているわけではないが、実家には仏壇もありこちらのほうがまだ抵抗が少ない。

とはいうものの、周囲がクリスマスでお祭り気分になっているのに、わが家は何もしないのは子供たちにとっては寂しいだろうという思いもあった。それでさやかながら小さいツリーを飾り、二十四日は鶏の照り焼きをして、食後にはクリスマスケーキにろうそくを立てた。これは、几帳面で融通の利かない私の精一杯の妥協だった。ツリーのライトが点滅するのはうっとりするほど美しかったし、お祭り気分というのは楽しいものだ。

私自身賛美歌が好きで、賛美歌を聴くと理屈抜きにクリスマスちゃんになりたくなるほどである。しかしクリスマスプレゼントまでは、私の論理のうえですうしても譲歩できず動弁してはしいという気持ちだった。

毎年十二月になると娘たちの不満の声を聞き、かといって花

祭りにプレゼントをするでもなく、何年かが過ぎていった。

上の娘が小学校の高学年になったとき、私は娘たちに本物のクリスマス体験させたいと思い、クリスマスイブに友人の通っている教会に連れて行くことを思い立った。

その教会では食事もあるというので、私も娘たちもクリスマスのごちそうに期待を膨らませていた。教会に着くとまず地下の食堂へ案内された。大きな七面鳥の丸焼きに豪華なクリスマスケーキを想像していたのに、ごちそうは何と豚汁だったのだ。ダイナミックに切った大根、にんじん、ごぼう、そして大きな里芋が印象的で、あのおいしさは今でも忘れられない。その後は一階の礼拝堂で薄明かりの中、お祈りと賛美歌が続いた。ろうそくだけの明かりで聖書に書かれた歌も分からず、

私は難儀した。立ったり座ったり
のタイミングが分からないので、
周囲の人たちにワントテンポ
遅れてみんなのまねをした。

最後にキリスト生誕劇があり、
締めくくりのバイオリン独奏が
すばらしかった。つましく厳かな
クリスマススイブの行事に私は感
動していた。私たちが教会を出る
ときは聖歌隊が夜の街に繰り出す
ところだった。

私は大いに満足であったが、娘が
納得できたかどうかは今でも疑問
である。

彼女らは自分の子供にはクリスマス
プレゼントをするという。

「夜の間に靴下にプレゼント入
れるの、今から楽しみ」と目を輝か
せる。それを聞いて私の自信も揺ら
ぎ多少の後悔の念もある。サンタ
さんの存在を信じた子供時代を持
つことは幸せなのかもしれない。

東京暮らしは

ひっしきの静けさ?

東京都八王子市●村田玲子

“わいふ”を知って早八〇七年
になる。あつという間だった。
この間何度か“わいふ”に投稿
もした。それは、私もいつかわ
いふの仲間入りをするだろうと
思い、前もって実体験に備えて
勉強をしておこうと思ったから
である。ふと入った本屋さんの
前で“わいふ”を手にしたその
ときから。

ところで、ふと立ち止まり本
を買ひ込んだ私。今から思えば
随分早とちりだった!!何を隠そ
う、いまだに独身……。独身の
延長戦をやり続けている真っ最
中なのである。

東京暮らしから群馬の田舎に

戻って、この家の敷居をまたぐ

ときは“結婚する潮時”と考え
ていたのだが、何の!!あつさり
!!また東京へ舞い戻ってしまっ
た。“女一人の生活なんて……”

とコリゴリしていたのだが、東
京暮らしは結構快適。親も近所
もないが、やけにそれが、平凡
な生活風景なのである。帰った
ころは、親や近所があつて平々
凡々と見えたのだが……そうで
もないようなのだ。

今また東京一人暮らし。いま
だに大学の中で学生をやり、何
を間違えたのか論文っていうも
のに追われているのである(私
本人はうそのような現実)。世
間から見れば“結婚もせず、子
育てもせず、家庭も持たず半端
な人生”と映るだろう。そう、
私本人もそう思う。六畳一間で
ワープロに向かい人生の大半の
時を費やしている。どうも、女
の自立をし損なったくちの人間

のようである。

人生こんなに気楽でいいの
か、いつか大きなしっぺ返しが
くるのではないかとヒヤヒヤし
ている。思えば、数年前、激流
の中で“ひっし”とかじ取りを
していたことを思い出す。する
と、これはひとときの静かな波
間なのだろうか。何とも不思議
な人生なのである。

わが家の同居白書

東京都足立区●千田百合子

買物から帰ると、姑が庭でザ
リガニを散歩させていた。「ほ
らほら、どうしたの。歩き方を
忘れちゃったの?」割りばしで
つついて歩かせようとする
が、はさみを振り立てて怒るだ
けで前へ進もうとはしない。

姑は結構、生き物が好きなの

うである。ザリガニは春に小学生の息子たちが、荒川土手で捕まえてきたものだ。「捕るのが面白いだけで、飼育係はいっただっておばあちゃんだから」と、時々孫にぶつぶつ言いながらもよく世話してくれる。えさやり、水の取り替えはもちろんのこと、置く場所だって目の当たり具合を見て、日に二度、三度と変える。

芝の上ではバツが跳ねている。姑によると、今年はいナゴが三匹、シヨウリヨウバツが一匹いるそうだ。数までちゃんと知っている。何しろ、しその葉なんかに止まっていると「稲のほうがおいしいのに」とポリバケツの田んぼへ連れ戻してやったりするのだから。

先日、朝食の用意をしていると、新聞を取りに行ったはずの姑が外から呼んでいる。何かしらと慌てて飛んで行った。ほら

と指差すのを見れば、小錦の握りこぶしほどもあるうかというガマが二匹、郵便受けの下で仲良く並んでひなたぼっこをしていた。「まだいたんだね。このところ姿が見えないから、死に絶えたものと思ってたよ」と懐かしげである。面白い姑だと、その横顔を上げしげと見てしまった。

けれども、だからといってわが家の嫁姑関係いつもこう平和なのではない。私の雑な家事にあきれ返って姑は色々と教えてくれる。「畳にだって目というものがあるんだよ。掃除機は——ワイシャツはね、生乾きのうちにしわを伸ばすといییよ」お布団だって干せばいいってもんじゃないよ。季節によって時間も考えないと」などなど。言葉少なにハイと返事するが、腹の中は煮えくり返る。(そんなことぐらい、言われな

くたって知ってるワイ。こう見えたって、主婦十年選手なんだから)



それは別に威張れることでもない。姑と仕事の丁寧さを比べたらとても太刀打ちはできない。

(そういえば夕べのぎょうざ、ひどかったな。子供たちも味はいいなんて言いながら、しっかり形のいいのを選んで食べていたっけ) だんだん落ち込んでく

る。

(だけどさ、手早いってのも才能よ。おさんどんで日が暮れたんじゃたまらないもの) と不利な形勢を必死に立て直す。

しつけのことでカチンとくることがある。二人の息子はいたずら盛り。取っ組み合いのけんかをしては泣きわめくやら、暴れ回っては物を壊すやら。そのたび「うちにはこんな子いなかったねえ」とため息をつかれる。

(今はどこの子だってこんなものよ。それにさ、この子たちだって間違いなくうちの子だもんねえ。ま、私の血の気が多いところを多分に受け継いでしまったくらいはあるけど……) こっそり悪たれる。

たまらなくよそ様がうらやましくなるときもある。今年の春から同居をし始めた知人がいる。どうしよう私、などと大騒

わが家の名字

大阪市鶴見区●家守恭子（62歳）

ぎしていたが、よくよく聞いてみれば何のことはない、デーンとした二世帯住宅を建てただけのこと。（何よ、何よ。そんなの同じマンション内のお隣同士ってとこじゃない）私は、一人ブリブリしてしまった。

「植え込みには入るんじゃないよ、迷子になるからね」ザリガニの散歩に弾みがついたらしい。

「あれ、おばあちゃん、ザリガニ遊ばせてんの」と、次男が学校から帰って来た。「そう。水槽の中だけじゃかわいそうだもの」「それもそうだね。じゃあ、友達とこ行ってくるね」「気をつけて行っといで」

孫もかわいがってくれる。七十八になるがしゃきつとしていて、あちこち掃除も受け持ってくれる。サークルだ何だと出歩く嫁に嫌な顔一つしない。

文句も言えまい、この同居。

客足のまばらな朝のD百貨店内を時間待ちのためにぶらついて

いると「ヤモリさん、ヤモリさん」と呼び声がした。声のほうへ目を走らせると、白いワイシャツ姿の見覚えのない男性が私の後方に視線を向けて呼んでいる。振り返ってみると同じようなスタイルの男性が、離れた距離を身ぶりを交えて返事をしており、どちらもその百貨店の社員のようなのだ。

売り場のコーナーを回って、そのヤモリさんにさりげなく近づき胸の名札を見ると「矢守」と書いてあった。うん、あの字なら必ずヤモリと読んでくれると心の中で納得した。

私の場合、まずイエモリと読まれる。最近はどうか知らないが、父が大正十年ごろ大阪へ出て来て以来家守姓はわが家一軒しかない。家森があるのは郵便物の誤配で知ったが、それとてヤモリかイエモリかは分からない。

公衆の中で自分以外にヤモリさんがいたのは初めてであった。田中さんや、鈴木さんがいつもフルネームを聞くまで自分か他者かと迷うのはさぞやっかしいことだろう。

新学期に先生が名簿を見て名前を呼ばれるのには小学校のときから、緊張した。

先生「いえもりきょうこさん」私「あー、やはりやすこです」小さなざわめきを覚悟しなればならない。

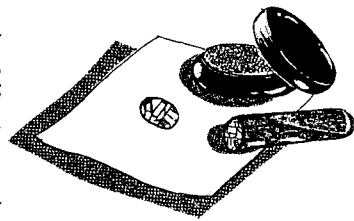
昭和二十年の春、父の郷里へ疎開した。地元の女学校ではだれもがすんなりヤモリさんと呼

んでくれるのがとてもうれしく感動したものである。その地方には家守姓が何戸もあり、学校には同姓の人もいた。

姓氏研究家、丹羽基二氏の学説によると、……家守姓は公家から出た武家で、古来勤皇家を輩出している……とのことである。

どうもご立派なご先祖様で恐れ入る。そもその始まりはそうなのかもしれないが、わが家としては系図はないし、せいぜいさかのぼって六代しか判明しない。それらしい言い伝えも聞いたことがなく、祖父の代まではごく普通の農家である。

その祖父の家から坂を下り、



野道を少し行くと小さい森があった。そこには朽ち果てそうな社があり隣にはお地蔵様が祭られていた。祠の後ろに古い石柱が建っていて、石のくぼみをたどってみると、「家守福松之奥城」とようやくに読みとることができた。

奥城とは大きな、少し行くと川がありものの二キロも下がると海に注いでいる。大昔と地形が変わったとしても海のそばであり、奥城とは言い難い場所である。それに福松という幼名とお城はどうにも結び付きにくい。

ところが、最近になって私は大きな思い違いしていたことを知った。

「奥城」は「おくつき」であり、神道での墓所を指す。お公家さんなら神ながらの道を奉じていたことに合点がいく。

近年その辺りは道が広がり一変したが、家守姓の屋敷が昔ながらに続いている。

わが家守家はずっと仏教で、村の共同墓地の一隅に先祖は眠っている。

D百貨店の矢守さんのご先祖様はどちらなのだろう、あのさわやかな容姿からすれば京のお

公家さんが弓矢を手挟んだ、その子孫というのが一番ふさわしく思う。

私の理想とするところ

東京都世田谷区●福地園子

「今日、学校でS君にひどいこと言われちゃったよ」

夕方、家に帰って来た小三の息子が思いっきり暗い声で言った。

「うん？何を言われたの」「お母さんショック受けないでよ。あのね……、「福地君のお母さんって、不良っぽいよな」って言われたの。隣にいたN君も「そう、そう」って」

何じゃ、そりゃ。私はこれまで「不良」だったことは一度もない。中学、高校とマジメで通した。まあ、大学時代は授業をサボって遊んだこともあったけど（しばしば）。三十六歳にして初めて「不良」呼ばわりされるとはね。ウーム。

「そんなこと気にしなさんな」とサラリとかわしたふりをした

自然食通信54

■隔月刊（奇数月下旬発売）
定価五七〇円

特集Ⅰからだしみじみ秋・冬の野菜料理

特集Ⅱ給食廃止で子どもは救われるか

豊かになったと胸張る陰で、農薬・添加物づけの貧しい食べものが学校給食をも支配。（安全）で（より自然な）食材を供給できない仕組みを追うとともに、補助金で縛りつつ強化される食の管理から子どもたちを解放する途を考える。

十二月一日発売

写真集 定価2266円

発売中

せんせい
はほーっと
宙に舞った

宮澤賢治の
教え子たち

撮影・塩原日出夫 文・鳥山敏子

自然食通信社

東京都文京区本郷 2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026



がら、その実ひどく考え込んでしまった。

いわゆる奥様ふうのファッションをしないせいだろうか、口紅も赤いしなあ……。パーマも今回ちょっときつくかかってしまったし、顔立ちも上品とは言えない。ウーム。

しかし、ちょっと待て。それがどうした。

自分の小遣いぐらいは自分で稼ごうと、週に三日アルバイトをし、趣味は読書とハイキング、区の手話講習会にせっせと通い、気に染まないPTAも「お務め」と参加している。そんな私のどこが「不良」なのよ。納得がいくようにキッチリ説明

してもらおうじゃないの。(なあんて言う勇氣ないけど)

息子はS君やN君とその後もこれまでどおり仲良く遊んでいる様子だ。要するにS君の言ったことは子供のたわいない感想だったのよね。

そういえばあの日は授業参観で、あいにくアルバイト日だった私は「雑貨屋の店員さん」らしく(私はアンティーク雑貨店で働いているのです)、古着の黒ずくめの服のまま、わっせ、わっせと学校に駆けつけたんだ。周りのお母様方の間にあっては確かに浮いて見えたと思う。よしよし、気にした私がおとなげなかった。まあ、いいわ。一件落着。

と、済まそうと思った。が、随分前にこれまた人から言われたことを思い出し、再びふつつといらだちが膨らみ始めてしまった。

「ねえ、福地さん、この間一人で〃P〃(喫茶店の名)に行ってたんでして。〇〇さんたちから聞いたわよ」

それがどうした。〃P〃は紅茶のおいしい明るく気持ちのよい店だ。月に二、三度、「今日は何も用事がない!」という日に、図書館で本を借り、帰りに〃P〃に寄って昼食を取りながら本を読む、というのが私のちょっとしたお楽しみなのだ。

それが何で「聞いたわよ」と意味ありげに言われなくちゃいけないの。エッ、エッ、納得がいくようにキッチリ説明してもらおうじゃないの。とまた同じセリフを吐きなくなるではないか。

説明されるまでもなく、私の推察するところによるとこうなる。

つまり、「みんな一緒!」ではないとダメなのね。外で食事をす

るにしても、お茶を飲むにしても「みんな一緒に楽しくおしゃべりしましょ」というのは〇。一人で行動すると×、という感覚なのだな。世間のおおかたの主婦は。

ファッションにしろ、ヘアスタイルにしろ、主婦的許容範囲があって、そこから外れると「ちょっとあの人はねえ」的な見方をされる。コワイわ。ああ、こんなところに大昔から綿々と受け継がれる農耕民族村八分意識が生きているのか、とヤケクソ気味に感心してみたりする。

私だって友人と過ごす時は好き。どうでもいいような話をしてハッハッと笑うときには気も晴れる。でも一人一人違う人間なのだから、いつとも一緒というわけにはいかないじゃない?

(え・小島佳子)

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二四〇号の特集テーマは「夫の家族とのつきあい」です。

家族制度から解放されたとはいいいながら、妻にとって夫の実家とのつきあいは、何かと煩わしいもの。結婚したときは対等な女と男との結び付きのつもりだったが、思いもよらず「嫁」の身分におしこめられている自分を発見、居心地の悪さ、うっとしさを感じられている方も多いと思います。

しかし人間は木のまたから生まれるわけではなく、最愛の？夫もまた、彼を生んだ姑の子、その家庭の産物。夫の実家とのつきあいは欠かせません。

あなたはどんなふうに、夫の家族とつきあっているのでしょうか。明暗とりまぜて、どうかその実態をリポートしてください。

四百字詰原稿用紙十〜十五枚前後。

●ワンポイント情報

次号は「できあいいかずおいしさ比べ」というのをやってみたいと思います。

できあいいかずというと、昔は煮豆とつくだにくらいのもので、漬物も東京など大都會では、たくあんを売っていましたが、あとは家庭の手づくりでした。

それがいつのころからか、様々なおかずをデパートやスーパーで売られるようになりました。専門店もできています。

年寄りには「おひたしを売っている、女は何してるのか」とびっくりしますが、職業を持ちたり、家事以外に自己活動をした女性たちには、とてもありがたいことです。

考えてみれば、昔はハタ織りだって家でしていたのですからね。今の女は料理ができない、と文句言う熟年以上も、ハタ織りした世代から見れば、無能といわれるに違いありません。順送りだから今やできあいいかずも、市民権を得ていると思います。

さて、あなたの買って食べた、おいしできあいいかずはどこのだったのでしょうか。推薦してください。条件は、

・添加物が少ないか、入っていないもの

・塩分控えめのもの

です。煮物焼き物、おひたし何でもけっこう、日本、西洋、中華、朝鮮、エスニックと、国籍は問いません。

どういう場所の、何という店の、何かを必ず明記（なるべく店の電話番号も）し、その店の様子も描写してください。一人でもいくつ（何店）でもけっこうです。

八百字以内。締め切りはどちらも十二月二十五日です。

●座談会のおしらせ

今号から始まった「女の時事放談」は、次回「永田町の常識・国民の常識」というテーマでいたします。

政治スキャンダル花ざかりの今日（いつでもですが）、あきれ返っているだけでは主権者の資格が泣く。与党の汚さ・野党の無能さ、どうしたらよくなるのか我々女性の常識で、議論を尽くしてみましよう。

政治は常識が大事です。なぜならフツウの人の生活を扱うものなのですから。

・日時十二月十六日午後二時編集部にて
・出席申込十二月十四日までに電話で

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

◆エッセイスト・クラブ

(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

◆ズバリ一言

(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービス、その他目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

◆奥さんから外さんへ

(一六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって、何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの、失ったもの etc をお書きください。

◆マイ・ジョブ／マイ・プロフィール

エッション

(一六〇〇字まで)

あなたのしていращるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも。

◆サーブレシーブ

(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

◆人間マンダラ

(一六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよいのです。

いのです。

◆親の言い分・教師の言い分

(一六〇〇字まで)

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かっては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的に書きください。

◆フリースペース

(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

◆わいわいがやがや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。

◆読んでみました

(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

◆情報コーナー

(三〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、捜し物、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまと

めてください。

◆サークルだより

(八〇〇字まで)

“わいふ”には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたいう、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号までとなります。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思えます。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

【コラム以外の投稿募集】

◆特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

◆ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定し

ますので、募集欄をごらんください。

◆特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。

ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

【注意】

●投稿は一人一篇に限りま

す。ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サブレシープ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みですので、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直

すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。

ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきたい、ということです。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

編集だより

●このところ毎号充実したご投稿が多く、編集部ではうれしい悲鳴の上げ続けです。投稿が集まることは何よりも有難いことなのですが、胸の痛む思いがするのは、かなりハイレベルの原稿でも、これまでです

に同じようなテーマのものが掲載されていたり、同じ号でち合ったりして落ちこぼれてしまうことです。どうか気を落とさずに再挑戦なさってください。ちなみに投稿の掲載率は約六十パーセントくらい、半分以上のものが掲載されています。

●ついに十一月から書籍小包が二五〇グラムまで二四〇円、と三〇円の値上げになりました。そこで「わいふ」の郵送料は年間で一八〇円増えています。

何とかご迷惑をかけたくないと思いましたが、年間で計算すると百万円近い郵送費の増加になりますので、到底切り抜けることができません。

大変申し訳ありませんが、二三九号からの郵送料を現在の年間一二六〇円から一四

四〇円に、年間購読料を四〇二〇円から四二〇〇円に値上げさせていただきます。どうぞよろしく願います。

●「契約結婚」今回で最終回を迎えました。新しい結婚の形態を模索する男女の現実に立脚しているだけに、ある種の新鮮さといくりものではない面白さがあったと思います。ご愛読ありがとうございました。

●新井ひふみさんの「私の愛する外国人」と一回で終了です。アメリカのあとを追うカナダの実態を描いて、単なる個人の物語を越えた迫力があつたのではないでしうか。

新井さんのあとはまだ決まっていますので、友人、親戚の方で、外国人と恋愛・結婚した女性をご存じの方を紹介ください。またグラビアの「私のしごと場」に登場してくださる方をご推薦いただけたらと思います。自薦もちろん歓迎です。

●経費の面でページ数は増やせないのに投稿は多数。その掲載を優先したいので「文章講座」は見送りになりました。あしからずご了承ください。

●ではまた来年。お元気で！

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上とまりますと送料が半額以下になります。

わいふNO.239

(隔月刊)

1993年1月1日発行

編集・わいふ編集部

定価460円(本体447円)

(年間購読料送料共4200円)

印刷・平河工業社

発行所・(株)グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

〒162 TEL (03)3260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……

必ずお申し出ください。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

母と子

12月号

定価三五〇円・千四六円

「いじめ」とその周辺

今月の視点

- なぜいじめめるの——私の推理 吉野和子
- 学級づくりと「いじめ」大町 正
- 教育相談で受ける「いじめ」問題 中村 博
- 「いじめ」の裁判で見たもの 杉井静子
- なぜ「いじめ」が多いのか 楽 政春

吉野和子 著

定価三五〇〇円・千三八〇円

限定出版

愛しき娘よ

13歳の遺稿と母親の手記

なぜ娘は自死したのか? 「いじめ」問題を追求する
貴重な記録。(上製・A5判・四五六頁)

不思議なPTA

PTA活性化への手引書

子どもの本っておもしろい

父母からの問いかけ

学校・教師と共に考えたい疑問や悩み

子どもと読む 子どもの権利条約

千203
電話

東久留米市中央町五・四・八
〇四二四(七四)九一二五

母と子社

女たちの情報紙

ふえみん
f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 650円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

あつ・おんな・はたらく・がつ・う
アジ・たべもの・せつけん・げんぱつ

